石清尾山塊古墳群調査報告

1973. 3

(昭48)

高松市教育委員会

目　　次

第一章　調査経過…… 1

第１節　調査に至るまでの経過…… 1

第２節　調査経過…… 2

第二章　地形と立地…… 4

第１節　高松平野の地形・地質…… 4

第２節　石清尾山塊の地形・地質…… 7

第三章　古墳時代以前の遺跡…… 11

第１節　弥生式土器…… 12

第２節　打製石器…… 16

第３節　磨製石器…… 18

第四章　石清尾山古墳群…… 23

第１節　古墳群の分布概要…… 23

第２節　古墳群一覧表…… 25

第３節　各古墳群の素描と主要古墳の概要…… 42

第４節　石清尾山古墳群の提起する若干の問題…… 81

挿　図

1	石清尾山塊遠望（写真）	17	摺鉢谷２号墳横穴石室（写真）
2	高松平野地形面分類図	18	摺鉢谷２号墳出土遺物実測図
3	石清尾山塊地質概略図	19	摺鉢谷４号墳横穴石室（写真）
4	動物形土製品実測図	20	摺鉢谷５号墳横穴石室（写真）
5	石器実測図	21	摺鉢谷10号墳遺物出土状況（写真）
6	石清尾山塊古墳分布図	22	摺鉢谷13号墳遺物分布図
7	摺鉢谷３号墳出土遺物実測図	23	摺鉢谷13号墳出土遺物実測図 (1)
8	摺鉢谷７・８号墳出土遺物実測図	24	稲荷山姫塚墳丘実測図
9	北大塚墳丘実測図	25	摺鉢谷13号墳出土遺物実測図 (2)
10	鏡塚墳丘実測図	26	〃　〃　〃　(3)
11	石船塚墳丘実測図	27	摺鉢谷９号墳実測図
12	石船塚出土円筒埴輪略測図	28	鶴尾神社４号墳石室（写真）
13	石船塚出土刳抜式割竹形石棺	29	浄願寺山古墳群分布略図
14	姫塚墳丘実測図	30	摺鉢谷10号墳出土遺物実測図
15	猫塚墳丘実測図	31	前方後円墳の規模
16	摺鉢谷15号墳実測図		

第一章　調　査　経　過

1．調査に至るまでの経過

高松市の基礎は，天正16年(1588年)豊臣秀吉の家臣「生駒親正」が讃岐の領主として、当時「篦原荘玉藻の浦」と呼ばれていた地に玉藻城を築城した時にはじまる。

生駒４代54年間の治政後，寛永19年(1642年)松平頼重（徳川家康の孫，水戸光圀の兄）が東讃岐12万石の領主として入国して以来，明治維新までの220年間領内の産業開発に努め，城下町として繁栄の一途をたどってきた。

明治維新を迎え廃藩置県後，香川県庁の所在地となり明治23年市制を施行，順次発展を続けつつあったが，昭和20年７月４日市街地の80％が灰じんに帰す空襲にあった。

戦後の動乱期を経て，積極的な復興が推進され，市街地の整備・拡大が促進されたが，これとともに新しい都市づくりのため順次市域を拡大して，人口28万人を数える四国の中枢管理都市「高松」ができあがった。

市域の拡大と市街地の拡大が順次進行され，市街地南西に近接する石清尾山・紫雲山等の山塊は市街地に浮かぶ孤島となり，山麓にも開発の事業が進行されることとなった。

この山塊は，面積約６㎢、標高約200ｍ，石清尾山を主峰とする紫雲山・浄願寺山からなり，東の屋島（史跡・天然記念物）とともに瀬戸内海に臨む展望台となり，ハイキングコースにも指定されて市民に親しまれ，憩いの場として自然の好条件をそなえたところである。

松の緑につつまれた丘陵には，築成が積石からなるもの，盛土からなるものなど多数の古墳が点在し，弥生時代の遺物が出土することから弥生遺跡としても知られていた。

点在する古墳群は石清尾山古墳と呼ばれ，安山岩を用いた積石墳丘は前方後円・双方中円・円などの形状をもち，盛土墳を含めると古墳は200余基を数え，古墳時代の遺跡として考古学上貴重な存在である。

高松市においては，自然環境に恵まれたこの地域が市街地に至近の位置にあるところから，かねてから市民のレクリェーションの場として開発する構想をもっていたが，開発地区は石清尾山の峰々がのびて環状に連らなる通称摺鉢谷が平坦地に恵まれ，しかも展望地に最適であるため選定され，峰山開発計画が策定された。

開発実施に先だって，開発計画の公共的性格からして峰山地区一帯に点在する大小古墳群のうち開発対象区域内の遺跡の分布状況について調査の申し出があった。（昭和43年12月）　これにより，昭和44年２月12日から同14日まで県・市文化財専門委員による実施踏査を行なった。

その結果，開発計画区域に点在する16基の古墳の所在を確認した。

これにもとづき遺跡保護の国民的課題に対処するため，文化財保護優先の立場に立った開発

計画策定を要望し了解を得るとともに，文化庁に対し石清尾山古墳群史跡指定の資料を提出した。

文化財専門審議会においては，すでに指定している「石船積石塚」に追加して，これらの古墳を「石清尾山古墳群」として指定することが内定した。（昭和45年３月）　指定決定に先だち，指定の範囲ならびに遺跡の現況等の資料作成のため埋蔵文化財緊急発掘調査を実施することとなった。

この調査は，単年度100万円(国50万円，県17万円、市33万円)の予算をもって開始され，第１次(昭和45年度)，第２次(昭和46年度)に分け，市教育委員会が調査主体となり，県教育委員会（松本主事）の指導により，高畑知功氏を中心に，四国学院大学（善通寺市）考古学研究グループの協力のほか，多数関係者の協力援助を得て実施することとなった。

調査場所の峰山地区は，標高150ｍ～200ｍ余，水源に恵まれず，交通不便などのため，調査従事者の往復の悪条件を克服するほか，調査期間の設定にあたっては，従事者の本務にさしつかえない時期を選ぶなどの制約をうけて実施した。

その調査概要は，既報の第１次・第２次調査概報のとおりである。

発掘調査終了に引き続き，峰山開発計画が想定する地域以外に存在する多数の古墳の分布調査をも実施することとなった。

この調査は，峰山開発計画の進行，山麓地帯の都市化現象などに対処する事前調査として実施するものである。

２．調 査 経 過

この調査は，国・県補助事業（予算100万円）として，稲荷山(通称紫雲山)および南側の浄願寺山に点在する古墳群の分布調査を行なうものである。

調査対象区域の山容は比較的急峻であるが，山麓から頂上へかけて緩傾斜するところは果樹園として開墾される部分が多く，近年になって住宅地として開発されるようになりつつある。

山林を形成する部分は，国有林を除くと急傾斜地となっている部分が多いが，生活の合理化・農業の省力化などによって，山林の下草等を堆肥あるいは家庭燃料とする風習が途絶えたため，山林部分はいうにおよばず，山道にも雑草が生い茂り，調査にあたり障害となることが予想された。

これらの自然的条件は，調査にあたり歩行の支障となるほか，遺跡の発見確認のための障害となるため，悪条件の少しでも緩和される落葉の季節を選んで調査するよう期間を設定したのである。

調査団の編成は，市文化財保護委員，その他（詳細別表調査団編成表）で編成し，原則としては調査員の本務外である日曜・休日を調査にあてることとした。

調査期間は，11月開始翌年３月末終了を予定し，自然の中に埋没した奥津城の所在をおって踏査をはじめた。地表面の起伏に注意をはらい草茂る樹間の道なき道を手斧片手にくぐりぬけ，急峻をよじ登り，あるいは岩石累々と山積する奥津城に立って展望を賞で，あるいは樹木にからまれて進路変更のよぎなきに至るなど，自然との戦いの中で変化に富んだ実施踏査であった。

本調査にあたり，京都帝国大学文学部考古学教室の実施した讃岐石清尾山石塚の研究（略称京大報告～昭和６年調査実施）を資料としたことはいうまでもないが，積石塚の場合，岩石のため樹木の生成が妨げられるため積石墳の確認が容易であるが，場所によっては自然に散在する石塊群があり，積石墳の破壊されたものと分別することが困難なものもあるが，盛土墳の場合，樹木の繁茂，下草の茂み，落葉の堆積などにおおわれるものが多く起伏する地表の状況によってわずかに所在を認めるものが多い。墳丘の主体部はほとんどの場合，破壊されて凹んだ状態にあり，石室の露出したものは原形を想定できるが，石塊が散乱して長い年月によってか土石によって埋没するものが多い。

今回の調査は分布調査であるが，遺跡の所在確認とその概要把握を目的としているため，墳丘の計測，石室の計測など現況把握に必要な資料等を得るべく的確な計測を実施することを希望するむきもあったが，調査対象となる遺跡があまりにも多いことと自然的悪条件の環境下にあるため，樹木の伐採，下草の除去など計測調査の前提条件として必要とするため，古墳の所在想定基数・調査期間等を考慮して，所在古墳の確認と平面的な概略計測を行ない，浄願寺山頂に群集する盛土墳の墳丘間距離測定を実施したのである。

しかしながら，100余基にのぼる遺跡の保護と関係遺物の保存については，今後も調査を必要としており，緊急を要する課題となりつつある。

東南からの遠景

小　山　　浄願寺山　　石清尾山　　紫雲山

挿図第１図　石清尾山塊遠望

第二章　地形と地質

1.　高松平野の地形と地質

1.　高松平野の地形的位置

讃岐半島は，香川県の主体部を占め，北にゆるく弓形に突出した形態をもち，沈降性の出入に富む岩石海岸の入江には，主に阿讃山地より供給された堆積物により埋められた沖積平野が発達する。

高松平野もそのような平野の一つで，香川県の中央やや東寄りに位置し，規模は，東西約11㎞，南北約10㎞である。

平野の東縁には溶岩台地屋島，及び300ｍ以下の高度で主として花崗岩からなる著しく開析された山地が南北に連なる。南縁には洪積台地，及び花崗岩あるいは安山岩の丘陵性の山地があり，更にその南に白亜系の和泉層群よりなる，1,000ｍ内外の高度をもつ阿讃山地がほぼ東西方向に走る。西縁は，北に溶岩台地五色台，その南に主として花崗岩からなるが一部に安山岩を載せる，300ｍ内外の高度をもついくつかの小規模な丘陵性山地が見られる。北は瀬戸内海に面する。

高松平野の地形面は，南縁の山地より流下して瀬戸内海に注ぐ本津川，香東川，春日川，新川の諸河川により形成された新しい沖積平野である。

高松平野の地形面は，扇状地及び下位段丘，三角州，低地氾濫原に分類される。[(1)]（挿図２）

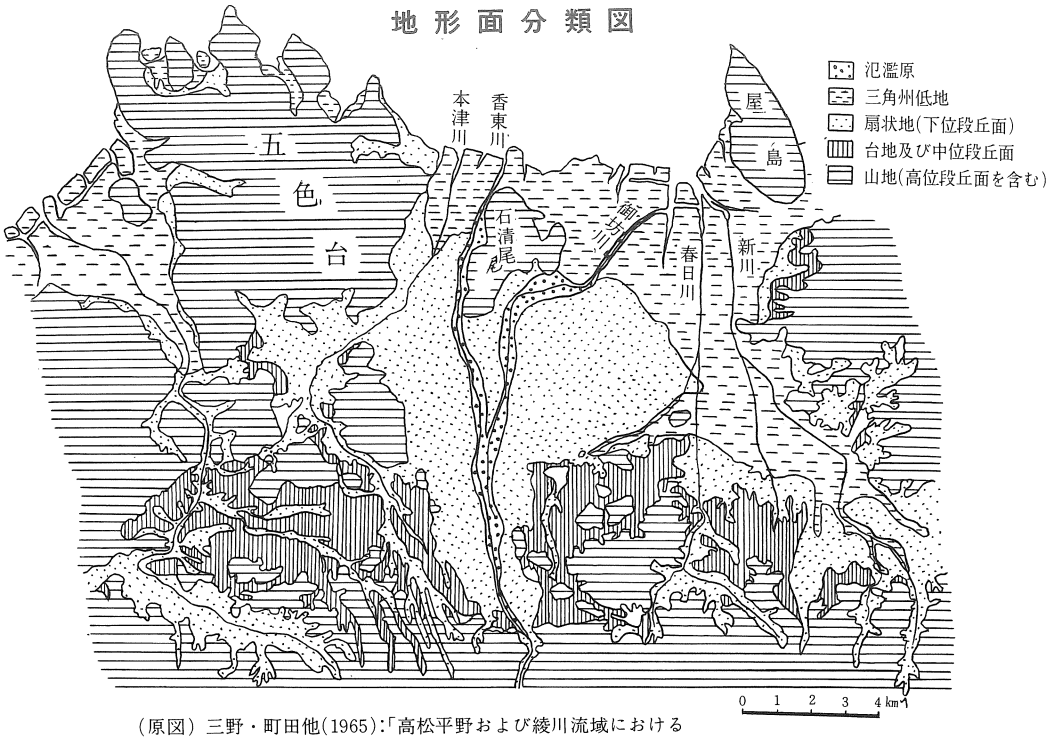
扇状地及び下位段丘は高松平野の南部・西部・中央部に分布する。このうちで香東川流域（旧香東川の流域を含む）の扇状地が最も広い区域を占める。

2.　扇状地及び下位段丘面

香東川は，現在も曲隆を続ける[(2)]早壮年期の阿讃山地から供給された大量の運搬物質を搬出して，岩崎付近を扇頂に，高松市街地南部に達する広大な扇状地を形成した。

香東川の現流路は石清尾山塊の西麓を流れるが，かつては大野付近で乱流し，流路は一定せず，下流は石清尾山塊の東西両側を分流していた。寛政三年（1791）に編纂された「大野録」には香東川についてつぎのように記されている。寛永の頃まで，大野の西で二またにわかれていた。その一筋の流れは一宮，坂田を通って石清尾山の東麓を流れて西浜へ流れ込み，一筋は，石清尾山の西に沿って現在のように流れていた。それを寛永14年（1637）西島八兵衛が，東の筋を塞ぎ是を田地とし，西流のみを香東川としたものである。[(3)] 河道変換の年代については寛永８年（1631）前後とする説もあるという[(4)]が，いずれにしても，大野から下流右岸地域に，ほぼ南北にのびる自然堤防列が見られ，ここに旧流路があったことは明らかである。

香東川扇状地の平均勾配は約９％と全体に緩勾配だが，上流部にくらべ下流部は一層緩傾斜



(原図) 三野・町田他(1965):「高松平野および綾川流域における水の賦存量に関する地理学的研究」より

挿図第2図　高松平野地形面分類図

となる。

扇状地面を細かく観察すると，わずかな傾斜の変換線があり，数段の階段状の地形をなして，南から北へ漸次高度を減ずる。また，網状流跡と考えられる，ほぼ扇状地面の傾斜方向に沿う微起伏も見られ，これに沿って地下水が豊富に伏流しているらしく，凹地部にはしばしば湧泉や出水が堀られ，灌漑に利用されている。雨の少ない地方でありながら，扇状地面全域にわたって水田に利用されているのは，多数の溜池が築造されたことだけでなく，このような利水の良さもあずかっていると思われる。

香東川扇状地の扇端は，香東川の西岸地域，東岸地域ともに5 m等高線付近である。東岸地域においては，今里町，西村，下所付近で，5 m等高線と長尾街道の間に,等高線とほぼ平行した傾斜の変換線があり，ここで扇状地と三角州が接する。西岸地域は，香東川と西縁の山地との間が狭く，また，下流部では本津川が流路を東に寄せて平野のほぼ中央を流れるので，香東川の扇状地面は東岸地域に比べてはるかに狭い。また，西岸地域では，本津川及びその支流古川により掘込みが行なわれ，段丘化している。

香東川扇状地の構成物質は，沖積統の未固結の礫，砂，粘土である。仏生山では地表下0.65

mまで表土，4.6mまで大礫混り砂層，11mまで大礫混り砂礫層，その下は60mまで砂，粘土，礫の互層[5]，礫質は，和泉層群の砂岩を主とし，花崗岩類も混じる。

現河床と扇状地面の関係をみると，扇央部や扇端部ではほぼ同じ高さであるが，扇頂部では明瞭な段丘崖で境されており，扇状地面形成後の隆起傾向をあらわしている。

春日川・新川の流域では，香東川流域（旧香東川流域含む）に比べ，扇状地の発達は悪く，由良山より南で台地の北縁と，東縁山地の山麓に，小規模な扇状地が分布するに過ぎない。一部は段丘状の地形となっている[6]。礫質は花崗岩及び安山岩類である。

扇状地及び下位段丘面上には，氾濫原を除くそのほとんど全域に条里地割が残されている。

3．三角州低地

三角州低地は高松平野を流れる前記諸河川が形成した複合三角州で，高松平野北部の海岸地域を占める。しかし，扇状地の発達が悪い春日川・新川の流域では，三角州低地は海岸部から更に内陸に入り込んで，池戸・川島東町付近に達し，広く高松平野の東部を占める。構成物質は主として砂，粘土など細粒物質である。この地形面の高度は，内陸の池戸付近で20m，馬ノ口で5m，旧国道11号線付近で1～2m程度である。

この地形面の表面は極めて平坦で，微起伏をもつ扇状地面とはかなり異なる。

5m等高線より北は極めて新しい沖積平野である。即ち現在の海岸線から約2km内陸に，洲端，高須，堀江など海岸を示す地名が見られる。また，「寛永14年（1637）西島八兵衛が松島から新川の間の堤防を築いて，福岡，木太，春日の新田を開いた」，「寛文7年（1667）江戸巡検，川口源兵衛，藤堂庄兵衛，堀八郎右衛門らに命じ，松島から西潟元にいたる東西18町に堤防をつくらしめ，下往還以北を稲田とした」という記録[7]や，かつて木太村（今の木太町）は入江の郷と呼ばれていたという伝承[8]があり，三角州低地北部は近世まで浅い海または極めて低湿な地形であったことを示している。また，馬ノ口付近より下流の三角州低地には条里地割を欠く。これについては，条里施行後，条里地形面が沈水したため，香東川扇状地から古高松に続く一連の条里の中間が失われたとする考え[9]もあるが，阿讃山地の上昇傾向や扇状地の上流部に低位の段丘が発達することからは，条里地形面が沈水したとする考えには無理があるように思われる。海あるいは低湿地なために非条里であったと考えても良いのではないだろうか。今後，この点に関しての実証的研究がまたれる。高松市街地のうち旧香東川の流路に沿う中野町・番町・錦町のあたりは，やや高まりを見せている。これは香東川扇状地の延長部とも，旧香東川や御坊川が幾筋かに分流して三角州を形成した際の自然堤防的微高地とも思える。しかし，そのいずれであるとしても，安楽寿院文書，康治2年（1143）の太政官牒に，野原庄四至が，北は野原郷五条二十二里十五坪とあり[10]，これが今の浜の町あたりに相当することや，高重[11]によると，福岡町にかろうじて検出できる条里地割があるというから，高松市街地は香東川の活発

な堆積作用により，春日川・新川の下流部に比べ，早くから陸化していたと考えられる。

本津川下流一帯も広く粘土，砂におおわれ最近まで海面下にあったと考えられている。[12]

引　用　文　献

(1) 東京教育大学地理学教室三野研究室（1965）：高松平野および綾川流域における水の賦存量に関する地理学的研究

(2) 高桑　糺（1963）：阿讃山地のPitching的曲隆に関する地形学的研究

(3) 讃岐香川郡志

(4) 高松市史編集室（1964）：新修高松市史

(5) 高桑　糺（1967）：高松の自然と水資源，地理学研究第16号，香川大学地理学研究室

(6) 前掲(1)

(7) 高松市史編集室（1960）：高松市史年表

(8) 香川県（1972）：香川叢書（第１）復刻版

(9) 西村嘉助（1957)：条里以後の地形変化，広島大学文学部紀要　11

(10) 福家惣衛（1965）：香川県通史

(11) 高重　進（1965）：讃岐の条里　広島大学文学部紀要　25－1

(12) 前掲(5)

２．石清尾山塊の地形・地質

〔位置〕　石清尾山塊とは，高松平野を北流する香東川右岸に沿って，北は西宝寺山(西宝町)から，南は勅使町高松工業高等専門学校にいたる南北約４km，東は紫雲山足下の名園栗林公園西縁より香東川にいたる東西約３kmにおよぶ丘陵地帯を指すものである。この山塊の経緯上の位置は北緯34°18′25″－34°20′30″，東経134°0′45″～134°2′43″にあり，行政区画上は山塊全域が高松市に属し，山塊中央部の峰山町を中心として，北より東廻りに西宝，宮脇，中野，栗林，室，東ハゼ，西ハゼ，松並，西春日，勅使，飯田，鶴市，郷東の各町により包囲された〝市街地に浮かぶ弧島〟と称するにふさわしい独立した丘陵地帯である。

〔地形〕　香川の地形は北から南へ，大きく三分される。即ち北部の平野部，中部の花崗岩丘陵地帯，さらに南部の讃岐山脈へと続く。

当山塊は地形的には北部の平野部に存在する火山性浸食丘陵地の一つと見られるもので，地形学上はメサ(messa)，或いはビュート(Butte)に相当するものと思われる。

メサは屋島，女木島，城山，大麻山等，県内にその例は多い。ビュートは飯野山に代表されるように独立した円錐状の山容を示すものであり，頂上部に台地状の浸食面を持たない点で，前者と異なるが，岩質の異なる硬軟の互層よりなり，それらに差別

侵食の働いた結果生ずる侵食地形に変わりはなく，侵食輪廻(りんね)の進行にともなって，メサよりビュートへ移行するのが通常である。

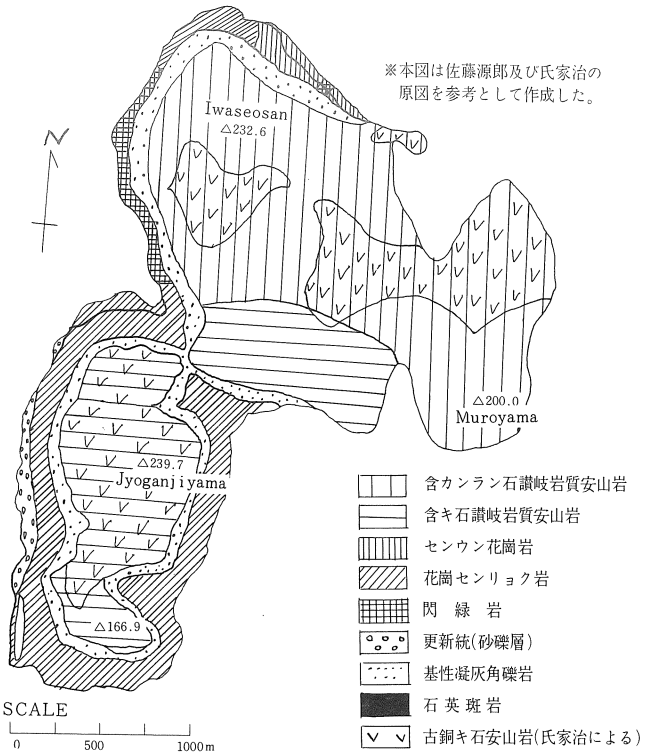
当山塊中，最もよくメサの地形を代表するものとして，摺鉢谷を囲む峰山町付近の地形を挙げることが出来る。

次に当山塊を構成する三丘陵群の区分とその地形上の特色について記すことにする。

地形図上，100ｍの等高線を辿ることにより，この山塊が明らかに三分される。即ちメサの好例地として前述した摺鉢谷をはさむ峰山町を取り囲む環状丘陵地域と，松並町より鶴市町にいたる〝切通し〟と呼ばれる鞍部を境に南部の浄願寺山(239.7ｍ)を中心とするもの，さらに鳥打越の鞍部より東に南北に細長く延びる紫雲山塊の三地域である。

先づ，中心地域をなす摺鉢谷一帯の環状丘陵地について見るならば，三地域中最大の面積を占め，しかも緩傾斜面の発達は他地域に比べ著るしく，現在も果樹園等，土地利用は極めて盛んである。この地域稜線部に大型古墳群が多く集中して見られることも特筆すべきことであり，地形発達上の特徴と，これら古墳群との関連について今後さらに詳細な検討がなされることが必要であろう。この地域の名称については石清尾八幡宮の裏山であることから石清尾山山塊と呼ばれることが多く，又町名より峰山とか，摺鉢谷など様々な呼称があるが，232.6ｍの三角点を持つ石清尾山を中心として，西稜を南に亀命(きめい)山(214.4ｍ)，御殿山(203.9ｍ)，東に振って峰山，松並の町境から北上し，東稜の中心をなす石船山(208.4ｍ)にいたる地域を総称するにふさわしい呼称は見当たらないようである。この地域，西稜部の香東川に臨む西斜面について見ると標高100～200ｍに属する部分は急傾斜を示し，露岩，散岩が著るしく，転石か堆石か，さらに節理の極度の発達から生じたものか判断しにくいものが多い。摺鉢谷側では緩傾斜面の150～200ｍ付近まで広々と展開し，谷頭平野をほうふつさせるに十分であるが，標高40～130ｍ付近では最も開析が進み，この谷は文字通り摺鉢状に峰山町の平坦面全域を集水区域とし，北に流れ石清尾山山脚部を測刻し東流後，再び北流して内海に注ぐ小溪流である。御殿山からの南稜部及び石船山の東稜部においても西稜部同様外急内緩の形態を保っている。

次に南の浄願寺山地域について見ると，標高100ｍを境として上部はやや急斜面を持つが，200ｍ以上の部分はやや平坦面に近い緩斜面を持ち，浄願寺山頂上付近ではメサらしい地形が見られる。南端の三角点(166.9ｍ)付近や，北方のピーク(208.1ｍ)ではメサからビュートへの移行型として考えるべきものであろう。香東川沿いの100ｍ以下の斜面上には多くの幼年谷が発達しているのも特徴的である。この地域は



挿図第3図　石清尾山塊地質概略図

摺鉢山地域に次ぐ面積を持つが，浄願寺山頂(239.7m)の標高は当山塊中の最高地点を示すものである。

最後に紫雲山地域について見ると北に稲荷山(164.2m)，南に室山(200m)からなる南北約1,500m，東西約800mの細長い丘陵を成し，中央部の169.2mの標高点より西に支稜が延び鳥打越にいたっている。この丘陵の特色は北部の稲荷山付近の稜線沿い標高150mを境に上部に平坦面の発達が見られる程度で，地形上，この山についてはメサともビュートとも分け難いのが特徴である。

〔地質〕　次に，この山塊を構成する岩石について記すならば，地形上メサと呼ばれるように下層には風化・侵食を受けやすいと言われる黒雲母　花崗岩や石英　閃緑岩等，深成岩類が見られる。これらは、いわゆる領家帯に属するものであり，時期的には中生代白亜紀のものとされている。さらにその上部には火山砕屑岩，主として角礫質黒色凝灰岩(俗称豊島石(てしまいし)と呼ばれる)が下部の深成岩類を被覆しており，その層厚は山塊北部において厚く，数10メートルに達するところもある。一般に下部の深成岩体との地層境界面はほぼ水平であり，浄願寺山では標高100m前後の斜面によくその露頭が見られ，特に切通し付近において著るしい。東部の紫雲山においては、殆んどこの種の露頭は見られず，ここでは栗林公園西端の堀割に見られるように下部より

いきなり安山岩質の溶岩が柱状節理の発達をともないながら山脚を構成している。このことは他地域と異なり，メサやビュートの地形として簡単に扱われるべきものではないことを示している。それは独立した溶岩丘，或いは岩脈として存在するものかどうか，なお検討の必要があろう。ただ，この地域の南端付近では基盤の深成岩が一部露出しており，基盤上に不整合に橄欖石安山岩の溶岩が迸出している。

最後に，この山塊の最上部を被覆する安山岩質の溶岩について記すならば，且っての調査[1]では浄願寺山を中心とする南部と，紫雲山及び摺鉢山を含む北部に二分して，南部は古銅輝石安山岩，北部は含橄欖石斜方輝石安山岩が分布するものとされたが，近時の調査[2]からは，いわゆるサヌカイト(Sanukite, Weinschenk 1891命名)に属するものとされる古銅輝石安山岩よりなる溶岩の分布が稲荷山を中心とする紫雲山北半から鳥打越を経て石船山を含む摺鉢山東稜部，西部では亀命山周辺の地域，さらに南部の浄願寺山では南端166.9mのピーク周辺を除く殆んど全域を覆っている。これら三地域の他は，いずれも含橄欖石安山岩質の溶岩で石清尾山，御殿山を中心として紫雲山南部から峰山町一帯，さらに浄願寺山南稜部をも一部含むかなり広範な分布を示している。これら溶岩の迸出時期については新生代第三紀中新世後期(1200～550万年前)[3]に属するものと見られ，放射性同位元素の絶対年代測定の結果によれば約1200万年～1300万年前のものと解析されている。屋島における讃岐岩質溶岩(500万年と測定)と比較して著るしい差異のあることは注目すべきことである。

なお，1950年代までは瀬戸内火山帯，或いは二上火山帯等の名称が用いられていたが，今日では火山帯の名称はない。領家帯に沿う瀬戸内岩石区に属するものとして扱われていることを付記しておく。

1）佐藤源郎　昭和7年　商工省地質調査所，高松地質説明書
2）氏　家　治　昭和45年　岩石鉱物鉱床学会誌　第63第2号
〝四国北東部の火山岩類の岩石学的研究〟
3）河野義礼他　昭和42年　岩石鉱物鉱床学会誌　第57第12号
〝瀬戸内火山岩のK－Adating〟

第三章　古墳時代以前の遺跡

石清尾山山塊において，先土器時代・縄文時代にさかのぼる遺跡の存在は，現在のところ確認できていない。しかし，摺鉢谷遺跡の項で述べるように，それらの可能性を持つと考えられる遺物が採集されており，今後の調査により，先土器時代および縄文時代早期の遺跡が発見される可能性は強い。

弥生時代に属すると推定される遺跡が現在３ヵ所知られている。以下それらの概要を列記する。

下ノ山遺跡

石清尾山北方斜面に所在し，1882年・1883年(明15年・16年)に広形銅鉾を２個出土。(注１)現在，その正確な位置は不明である。

摺鉢谷遺跡

摺鉢谷に所在。多くの採集品により，現在，その詳細を知り得る唯一の遺跡である。

片山池下遺跡

1965年に坂田廃寺跡が調査された際に下層より後期の土器が出土したという。その他，1972年に香川県教委により緊急調査が行なわれた浄願寺山東側の山裾の南山浦古墳群が所在する地域にも中期あるいは後期の弥生式土器が出土したと聞く。報告を待ちたい。

摺鉢谷遺跡

石清尾山山塊のほぼ中央部，摺鉢谷周辺に弥生時代の遺跡があることはかなり古くから知られていた。(注２)この遺跡から出土した遺物のうち，弥生式土器（図版第８図１・11・15，第９図・35・37・44）６点と打製石庖丁（図版第１図１・３～６，第２図13，第３図20）７点が既に六車恵一氏により紹介されている。(注３)

同地（現在は高松市峰山町）に果樹園を経営されていた故藤本円次郎氏は，戦前より摺鉢谷一帯に散布していた土器や石器を熱心に採集され，現在では御子息の藤本武四氏が，それらを受けつぎ保管されている。ここに紹介する遺物は，ほとんど同氏の所蔵されているものである。また，打製石器のうち７点（図版第１図２，第３図29，挿図第５図・24・25・38・44)は財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵のものである。

磨製石器の材質について，全部のものを知ることは残念ながら出来なかったが，これらのうちの６点については香川大学教育学部の鑑定にもとづいた。

遺跡の位置・環境

現在では峰山町一帯が果樹園として開墾され，地表から遺物の分布を確認することがむずかしく，多くの遺物を採集された藤本円次郎氏が故人となった現在，詳細な位置を知ることは困

難であるが，1931年・1932年(昭6年・7年)に石清尾山山塊を踏査した梅原末治氏は，その著書『讃岐高松石清尾山石塚の研究』の中で，この遺跡にふれ，「……高松市から溪流に添うて谷を登りつめた所，以南の開墾した緩傾斜地……」に多数の弥生式土器片，および石器の原料石の散布をみたと記載している。一方，今回の分布調査中，摺鉢谷を流れる小溪をさかのぼって，標高140mのちょうど水の流れ出る地点の比高5m，20m×10m程の範囲で開墾作業の為削平している箇所を偶然に発見し，詳しく調べることができたが，何も遺物は見い出せなかった。また藤本武四氏の談によると，円次郎氏は他の人の畑からの出土品をも譲り受けていたとのことで遺跡の位置については，標高約160m以上の摺鉢谷南西方向の緩傾斜面および平坦部という，かなり広い範囲を想定せざるを得ない。

この位置から瀬戸内海は直接見ることはできないが，石清尾山山塊のうち，紫雲山，浄願寺山を除く，中央の摺鉢谷を中心とする山塊は緩やかな傾斜の平坦な尾根で連続しており，約500m北ないし北東へ歩けば瀬戸内海を一望することの可能な位置に立つことができる。また南方は急な傾斜をなし，高松平野へと降りてゆき，広く高松平野を見渡すことが可能である。

遺　物

遺物は現在，所在の確認できるものについては可能なかぎり集録につとめたが，ここに紹介するもののほかに梅原末治氏採集の打製石庖丁1点が『京都大学文学部博物館考古資料目録1』に記載せられている。

集録する土器は，弥生中期の器形のわかる破片が47点，石器が100点，他に土製品が1点ある。なお，これら遺物は藤本氏宅が戦災にあい，一度火を受けたため，磨製石器類の多くは熱による剝落が著るしく，さらに破片となっているものもある。また表面採集のせいもあり土器類は器表の状態が良好とはいえない。

香川県下の弥生式中期の遺跡については，すでに荘内半島の紫雲出山遺跡[(注4)]，および丸亀市広島の心経山遺跡[(注5)]の詳細な報告が，それぞれ小林行雄・佐原真氏，遠藤順昭・町田章氏によってなされているので，記述に際しては地理的に比較的近いこれらの遺跡の報告を参考にした。特に弥生式土器・石器の分類にあたっては紫雲出山遺跡での分析を多くの参考とした。

1．弥生式土器

すべて破片であり，全体に石器の豊富さにくらべて，量は比較的少ない。器種からみても壺形土器に対し，他の器種はとぼしい。これらは遺物のすべてが表面採集によっていることに起因するものと思われる。

壺形土器（図版第8図，第9図48）

壺形土器A（1－7・16）

やや長い筒状の頸部から，口縁部がななめ上に外反し，端部が上下に拡張されるものである。

これらは佐原真氏の分類に従って分類すれば，A_2（5・16），A_3（2・3・7）に分類され，さらにA_1になる可能性をもつものとして6がある。6は，ヨコナデによる調整範囲が少ないものと思われ，筒状の頸部がやや外方に開いてたち，内外面は単位巾約1.5cmの「刷毛目」調整を施し，頸部下端に指頭圧痕文凸帯を有する。

A_2は紫雲出山遺跡において認められるものと，形態的・成形・調整手法的にも，ほぼ同様のものである。5は内外面ともナデおよびヨコナデにより仕上げられ，3条の凹線文をもつ口縁端部には棒状浮文を有し，頸部下端には，篦，あるいは櫛状工具による圧痕文が施されている。16は口径9.5cmの小形のもので頸部には同様の櫛状工具による圧痕文をもつ。口縁内面には竹管文を端部に接して一周させ，その内側に部分的に半截竹管による列点文を施している。

A_3は紫雲出山および心経山では数の少ないものである。やや長い筒状の頸部を絞りあげ，指頭圧痕をやや内面に残し，外面には縦方向の「刷毛目」を施したのちに，口縁端部とともに頸部にもヨコナデ調整により，やや広い巾の凹線文を施している。胴部上半に圧痕文を有するもの(7)もある。

1，4は口縁端部に凹線文を持ち，さらに4は口縁部外面に2条の凹線文を持つが頸部が不明なため，A_2に属するのか，A_3に属するのか判断できない。

壺形土器B（8－10）

これらは全て，B_1に属するものである。口径は10数cmで，ななめ外方にひらく筒状の頸部から口縁部直下にかけて，断面三角形の凸帯をはりつけている。凸帯の上に刻み目を施こすもの（8，9）と施こさないもの（10）とがある。凸帯間，および周辺にはヨコナデ調整が認められるが，凹線文にまでは至らない。

壺形土器C（11－14）

頸部の凹線文の有無，ヨコナデの範囲などにより，C_1（11・12）とC_3（13・14）に分類される。筒状の頸部が，ほぼ直立するものであり，頸部内面には，頸部を絞って成形した際の絞り目が認められる。

C_1はヨコナデ調整が明瞭でなく，施されても小範囲のものである。11は頸部内外に成形の際指頭圧痕が認められ，下端には6，12と同様の指頭圧痕文凸帯を1条もつ。壺Cとしては，口縁部が若干強く外に開くものである。口縁端部のみヨコナデを施し，ヨコナデによる起伏をもつ。12は北谷遺跡出土例(注4)に類似するものであり，頸部下端に指頭圧痕文凸帯をもつ。

C_3に分類した13，14は頸部に7条以上の凹線文を持ち，14は頸部下端に篦圧痕文を2段に施している。

壺形土器D（図版第8図15）

頸部および口縁部が内傾して立つ，無頸壺と呼ばれるものである。器体外面は，現存する部

分がわずかでいずれか判然としないが，タタキ目あるいは荒い「刷毛目」をななめに施したのち，細い「刷毛目」で外面は縦方向に，内面は不定方向に「刷毛目」調整している。口縁端部より4cm程の範囲で，外面は6条の凹線文を，内面はヨコナデを施している。外面はさらに先端の鋭利な篦状工具で5条の凹線文をはさんで，口縁部と頸部下端に2帯の格子目文を施し，凹線文帯を20程の区画に縦に沈線を引いて等分したのち，その両側に鋸歯文を6～7単位，施している。口縁端部は内側にやや拡張され，ヨコナデにより起伏を生じた端面にも同様の器具で外側に鋸歯文帯を，内側に羽状文帯を施す。口縁部直下には蓋用の小孔を持つ。ヨコナデおよび凹線文が発達し，C_3とよばれるものである。

その他の壺形土器（図版第8図17・18，第9図48）

17は口径約33cm，18は口径約40cmにも達する大形の土器の口縁部付近の破片である。5～6条の凹線文をもつ口縁端部には，それぞれの単位数は不明であるが，円形浮文・棒状浮文を施している。17は円形浮文の上をさらに竹管で刺突している。口縁内面には，2帯にわたり，3～5条の櫛描波状文を施している。

形態的にみれば，壺形土器A_3の大形のものに属すると考えられるが，あるいは器台形土器の可能性もある。岡山県倉敷市戸津田遺跡[注7]で類例が報告されている。

48は壺Aに似た筒状の頸部がやや外に広がるもので，壺Cに似るが，口縁部は端面をなさず，丸くおさめられている。頸部下端には，篦あるいは櫛状工具による圧痕文をもつ。器表の荒れがひどく，調整は不明である。

甕形土器（図版第9図19－24）

（19・21・22）は，壺形土器と判然と区別しがたいが，甕形土器に一括しておいた。図示するものの多くは甕$_2$に分類されるものだが，一点図示しえなかったものに甕$_1$のものが存在する。口縁部上端をわずかに上方に突出させるのみで，端部の巾もせまく，凹線文の手法を全くみないものである。23・24も甕$_1$である可能性が強い。

甕$_2$（19－22）には折れまがった頸部に，棒状の器具による刺突文凸帯を持つもの（19・21・22）と，もたないもの（20）がある。これらは口縁部をやや拡張して，内外面ともヨコナデ調整をおこない，口縁端部に2～5条の凹線文を施す。口縁部下約3cmまでヨコナデにより調整し，内面はほとんどのものがナデ仕上げである。胴部外面はナデ，または「刷毛目」により調整される。胴部中央部に近く，刺突文を有するもの（23・24）もある。

鉢形土器（図版第9図25）

小破片のため，口径は不明であるが，約30cm前後の大形のものになると思われる。

口縁部はほぼ直立し，口縁端面は，ほぼ水平面をなして，やや内外に拡張される。内外面とも口縁部下は，ヨコナデ調整が顕著で，外面には巾広の凹線文が，3条以上施されている。大

形鉢$_2$と分類されるものである。

高杯形土器（図版第９図26・27）

高杯A_3（26）と高杯B_2（27）の存在が認められる。26は，口縁部が内湾しながらひらくもので，口縁端面はやや内外に拡張し，外面の２条の凹線文より下部は，横方向の箆磨きが施されている。

27は，明瞭な稜をもって内側に折れ曲った口縁部外面に５条の凹線文をもつもので，下半部は箆磨きされている。

高杯形土器脚台部（図版第９図28－37）

連続成形手法によって成形されるもの（28－32・34・36・37）が大部分だが，35は組み合わせ成形手法の可能性もある。連続成形手法の際，受け部に充塡する円盤形の土製品（33）が存在する。

内面に絞り目成形痕を残すもの（28・31・34・37）と，その後，箆削りを施すもの(31・36)がある。脚台内部を箆削り成形した際の箆先の痕跡が認められる円盤形土製品もある。外面は器表が荒れていて不明であるが，受け部付近をナデ調整し，箆磨きを受け部より下に施して，端部をヨコナデするもの（34）が一般的であると思われる。35は内外面ともナデ仕上げによるものと思われる。

外面の文様としては，細い沈線文を施すもの（31・32）が認められ，31は５条の沈線文が受け部付近に施され，更にその下に刺突文がめぐるようである。32は，６条の沈線がやや雑に施される。杯部が欠損しているが，受け部から杯部への内湾ぎみのたちあがりがやや強い37は高杯Ｃになると思われる。

底部（図版第９図38・39・41－45）

壺形土器の底部（38・39・40）

器壁が，甕形土器底部に比してやや厚く，形態・内面調整における差とともに判別しうる。38は胴部外面下半が縦方向に箆磨きが施されている。底部付近はいずれもヨコナデが施され，内面はナデ仕上げである。

甕形土器の底部（41－44）

内面が箆削りによるもの（45）とナデによるもの（41－43）があるが，器壁が荒れていて，明瞭には観察できなかった。外面は箆磨きされるもの（45）のほかに，ナデ仕上げによるもの（41－43）が認められ，41は発達したヨコナデにより凹線状の起伏がみられる。これらは甕$_2$の底部になるものと思われる。

46は，底部の径が約20cmになるもので，胴部下半へやや内傾して移行する。外面はヨコナデされている。胎土には砂粒を若干含み，焼成のあまり良くない，茶褐色を呈するもので，弥生

式土器になるものと思われる。全体の器形がどうなるのかは不明である。

その他に，全形を知ることはできないが，やや異形を示すものに，47がある。垂直に立った口縁部に，途中で折れまがる長い把手がついたもので，断面円形の把手部分には縦の篦磨きを施してある。口縁部近くは内外面ともヨコナデを施し，内面はナデ仕上げである。胎土中には雲母や微砂を若干多く含み，堅くやきしめて，色調は黄褐色を呈する。

藤本氏の採集資料中，弥生時代に属さない土器類としては，わずかに，内面に青海波文を有する巾5cm程の須恵器片が一片存在するのみで，中世に属する遺物は確認されていないことから，また形態的にも，47が中世の土釜形土器になる可能性はない。先に述べた胎土・色調・焼成からみても弥生式土器に属するものと思われる。

2．打製石器

すべて石質はサヌカイトで，図示したもののほかにも若干のサヌカイト剥片がある。石清尾山山塊からはサヌカイトは産しないので，国分台・城山から原石をもちかえり，遺跡においてこれらを製作したと思われる。

石鏃（挿図第5図1－46）

46点あり，いずれも打製品である。佐原真氏の分類にしたがうと，1－4が平基無茎式，5－27が凹基無茎式，28－33が凸基無茎式，34－46が凸基有茎式である。さらに，それぞれの型式内においても形態差が認められる。凹基式の中で10－14は基部のえぐりが大きく，このような形態のものは弥生時代の石鏃にはあまり見られない。加えて，石器製作技法においても，弥生時代中期の大形化した石鏃が，両面あるいは片面の中央に，素材としての剥片の剥離過程でできる大剥離面を多くの場合残すことは，打製石庖丁，石槍とともに中部瀬戸内における一般的な特徴である。にもかかわらず，これらのものにおいては，二次加工の際の剥離が中央部に達し，大剥離面が遺存していないことから縄文時代のものと考えられる。そして10・13・14のように鍬形鏃に近い形態的特徴をもつものを含んでいる点から推定すれば，早期までさかのぼる可能性すらあるといえよう。また47も両面ともかなり丁寧な押圧剥離を施して側縁を薄く仕上げており，石鏃ではなく，縄文早期の有舌尖頭器である可能性がある。

石鏃の各型式間の比率は凹基(50%)，平基(9%)，凸基無茎(13%)，凸基有茎(28%)となり，凹基，平基式と凸基式群は59%：41%である。(ただし，10－14の石鏃をはぶけば55%：45%となる。) なお，これらの石鏃のうち31個は，かって水野正好氏によりすでに調査され，『紫雲出』にその結果が紹介されている。

石槍（挿図第5図31・32）

32は先端が，31は先端・基部とも破損している。31は細長く柳葉形を呈し，32は長さの割に巾が広く木葉形をした形態である。両者とも中央に大剥離面を残さず二次加工の剥離面によっ

て構成されており，この地方の弥生時代の石槍とは形態とともに異っている。なお，31は下半部を欠損していて不明だが，32には弥生時代の石槍によくみられる刃部下半の磨滅は認められない。32は風化が比較的進んでいる点からも先土器時代ないし縄文時代初頭の尖頭器と考えておきたい。

打製石庖丁（図版第１図１－８，第２図10－17，第３図20－26）

14点ある。すべてサヌカイトの横長の剥片を素材としている。背部を刃潰しし，刃部は，小さな剥離面により調整するものと，剥片を剥離したままで二次加工していないもの（５・３・12・13・20）がある。さらに多くの場合，両側辺に明確な紐かけのためのえぐりをいれている。明瞭なえぐりを持たないもの(３・25)は，両側辺に小剥離を重ね，直線状に，あるいはわずかに内湾させ，それに代えたらしい。15は片側を欠損しているが，一方の側面は敲打を重ねてカドをつぶしてえぐりとし，22の場合も最初は両側にえぐりをもっていたと思われるが，片側をを破損したため，やはり小剥離を重ね欠損の結果生じた稜をとり除いて，えぐりの代用としている。

大きさは巾約７～3.5cm，長さ約12～７cmとかなりの差がある。刃部の形態は，破損したり再加工をおこなっているものが多いが，直線をなすものと外湾するものとわある。

これらは，ほとんどすべての打製石庖丁に使用による磨痕が全面にわたって認められ，とくに剥離面と剥離面のなす稜が丸みを帯びているものが多い。(図版第６図)また磨痕のほか刃部の欠損，再生痕も認められる。

18は大きな横長の剥片の刃部にわずかの細かな剥離を加えたのみで，そのままスクレイパーとして使用したもので，刃部には使用の結果生じた明瞭な磨痕が認められる。打製石庖丁の素材となった剥片はおそらく，このようなものであったと思われる。この剥片の正面には少なくともこれと同様の剥片を２個以上連続して剥離したと考えられる剥離面が存在する。もしそう認めてよいならば，瀬戸内地方先土器時代のナイフ形石器文化の一時期に特徴的ないわゆる瀬戸内技法に近い剥片剥離技術が，この時期にも駆使されていたことになるだろう。しかし，時代的な連続性をもっていないことは明らかであるから，両者間の直接的な系譜関係を想定するよりも，一定の条件のもとでは同様の技術が生じうるものと考えるべきであろう。

27・28はいずれも横長剥片を用い，上側辺を刃潰しし，下側辺を刃部としたものである。このかぎりでは打製石庖丁と同様である。しかし，明確なえぐり，あるいはそれにかわるものを持たず形態的にも小さい。ただ27のみは両側辺の小剥離がえぐりになる可能性があり，打製石庖丁になるかもしれない。なお，このほかに梅原氏採集のものが１点知られている。(注６)

打製石鎌（図版第３図21）

刃部が内湾し，また長さが巾の割に長いこと，さらに断面形がほぼ左右対称に整えられてい

ること，さらりえぐり，またはそれにかわるものを持たないなどの諸点で打製石庖丁と区別され，打製石鎌としての形状をそなえていると考える。さらに9・19も背部を刃潰ししており，その可能性がある。

スクレイパー（図版第3図29）

かなり破損しているが，左側を残し他の3側辺に刃部をつくっている。風化も比較的進んでおり，先土器時代のものである可能性がつよい。

凹石（図版第7図）

長さ14.8cm，巾8.3cmの砂岸のやや扁平な円礫で，両面中央部に径2～3cmの範囲の敲打によると思われるくぼみがあり，上端，および一方の側面にも敲打のあとが認められる。

3．磨製石器

太形蛤刃石斧（図版第4図33－37）

すべて，上半部あるいは下半部を欠損している。33は下半部を欠損しているが，側面中央部は研磨後の敲打によりくぼみ，また下端もたび重なる敲打により丸びをおびており，破損したのちに石槌として転用されたことを示している。34は輝石片岩製で，使用の結果，刃部は著しくすりへっている。35は石英玢岩製で，研磨が非常に丁寧に施されていて光沢を有する。36・37は材質がそれぞれ安山岩，片麻岩である。図示しなかったが，他に一点太形蛤刃石斧と考えられる小破片がある。

柱状片刃石斧（図版第4図41，第5図42－53）

破損したものが多く，完形品は3点のみである。形態はかなり多様であり，刃部が片刃というより両刃に近いもの(44・45)，側辺のなす稜が鋭利なもの(42・46・48・49・50)と丸みをおびるもの(43・47・51・52)などがあるが，これは原材の形態に規制されたものと思われる。48・53は破損後，槌に転用されたもので，48は先端に敲打痕が著しく，53は先端が部分的に磨滅している。材質は47が縁泥片岩，42が黒雲母片岩であり，扁平片刃石斧とともにすべて片岩質の石材をもちいている。

この他に図示しなかったが，柱状片刃石斧の破片が7個体分ある。すべてのものが無抉式柱状片刃石斧と思われ，有抉式のものは1点もない。

扁平片刃石斧（図版第4図38－40，第5図54）

すべて片岩質の材質で，柱状片刃石斧と同様の原材を用いていると思われる。

38・40は丁寧に整形をおこなっているが，39は円礫と推定される原材の形に規制され，断面形がややいびつである。刃部の残好するもの(38・40・54)は，いずれも使用による刃部の破損が著しい。54はかって梅原末治氏により有孔の石斧として紹介されたものである。片刃というより両刃に近い刃部をもち，中央に両側から穿った孔がある。片面の上端中央には研ぎだされ

た小さな弧状を呈する凹みがみられる。この凹みは石斧の機能とは無関係と判断されるので，中央の一孔と合わせ，もと二孔をもつ磨製石庖丁の破片を扁平石斧に再加工再加工したものと考えて誤りないだろう。したがって本遺跡における唯一の磨製石庖丁でもある。このように中央部にかなり大きな孔を持つことは石斧として強度の点からは不利であったと考えられる。それにもかかわらず，こうした転用をまねいた理由は，片岩質に統一されている柱状片刃石斧および扁平片刃石斧の原材が香川県内に産せず，おそらく徳島県の吉野川流域から供給され，原材の入手しにくかった点に求められるであろう。

上述してきた弥生式土器をまとめてみれば，壺(A_1？)・A_2・A_3，B_1，C_1，C_3，D_3，甕$_1$・$_2$，大形鉢3，高杯A_3，B_3などで，これを紫雲出山，心経山両遺跡での弥生式土器の編年(注8)と対比すれば，わずかにあるものは中期2にさかのぼりうる可能性があるが，中期後半，つまり中期3～中期4の時期が主体で，心経山と同様，比較的短時間営まれた集落であったといえる。そうした時期的特徴と山頂という立地から，この遺跡も高地性集落と呼ばれるものに属することは明らかである。摺鉢谷を中心とした地域では，現在でも稲作は不可能であり，また谷の流れ出る北側の地点も当時，海岸線がすぐそばまで迫っていたと考えられ谷水田の存在は否定的といわねばならない。この遺跡で出土した打製石庖丁，石鎌の用途については，紫雲出山・心経山と同様に畑作の可能性を考えておきたい。

一方，高松平野を中心とした地域における弥生時代の遺跡には報告されたものとして，前期に高松市天満遺跡(注9)，木田郡三木町香川大学農学部遺跡(注10)があり，後期の高松市大空遺跡(注13)が知られているのみである。またそれらの遺跡の規模，範囲なども明確ではなく，高松平野における遺跡群のあり方を知るにはまだ不明な点が多い。しかし，断片的な採集資料(注11)からみれば高松平野のほぼ中央部にかなりの規模の遺跡が存在すると思われる。

このことは，古墳時代において，この石清尾山山塊に多数の古墳を築いた人々の居住した集落を考えるうえからも当然予想されることである。おそらく香大農学部遺跡での観察にみられるように郷東川，春日川，新川などの沖積作用が非常に激しく，当時の平野部の遺跡群は深く埋没しているのであろう。

そうであるならば，採集資料という限界はあっても，時期的にも規模的にも小さいといえる摺鉢谷の遺跡がこうした平野部の遺跡との間に密接な関係を持っていたであろうことは当然考えられる。

石製武器は他の打製石庖丁，石斧などの石器にくらべ，特に多いとはいえず，出土遺物からみるかぎりにおいては卓越した軍事的性格は認められない。しかし，備讃瀬戸，高松平野を広く見渡し，また平野部との連絡の比較的容易なその立地は，多分に軍事的・政治的な性格を示しているといえる。畑作が行なわれていたとしても，それは小規模なもので，こうした山頂に

集落を営なんだ主要な原因とはなり得ないと思われる。

都出比呂志氏は畿内における中期後半の高地性遺跡を共同体間の抗争激化の反映として考えている。(注12) 中部瀬戸内においても，そうした遺跡を瀬戸内海という交通路との関係とともに，在地における社会的矛盾の進行との関係からみてゆくことが必要であろう。香川県においては未解決な点が多く，いわゆる高地性遺跡を平地の遺跡とともに統一して把えてゆくとともに，今後特に後期の実態を探ってゆく必要がある。

一方，後期においては大空遺跡の土器について岡山県地方との関係が指摘されている。(注13) ここに紹介した資料においても，紫雲出・心経山にくらべて壺形土器A_3が比較的多いことから，また壺形土器としたうちのあるものが器台形土器になるとすれば大空遺跡出土例より一時期古いものとして，中期後半においても，吉備地方との関係が考えられる。また石鏃の型式からは畿内との関係が考えられるほか，(注14) 石斧類の原材の面からは吉野川流域との関係も想定し得る。

今後に残された課題は多いが，現在，非常な勢いで県下の遺跡が破壊されつつあり，今後その勢いはさらに強まると予想される。摺鉢谷遺跡は，高松市の歴史を考えてゆくうえで欠くことのできない遺跡である。幸いにも長年にわたり，資料を収集・保管されてきた藤本氏の努力のおかげで，以上のことを知ることができたが，現在も地中には，まだ多くの遺物・遺構が眠っているものと思われ，将来，問題意識をもった学術調査が行なわれば，さらに多くの事実が判明すると思われる。峰山町は今後，開発が進む可能性が強いが，古墳群とともに，この遺跡を守ってゆく努力が必要である。

注

1．出土した銅鉾は現在，東京国立博物館に保管されており，そのうちの1点の写真が，梅原末治1940『日本考古学論巧』に「讃岐国弦打村出土」として掲載されている。

2．1902年に玉置繁雄氏が「讃岐高松摺鉢谷にて土器」という標題で『人類学雑誌』18巻に報告している。

3．六車恵一1955『磨製・打製石庖丁図録』，六車1956「讃岐弥生式土器聚成図録」（『香川県文化財協会報』1）

4．小林行雄・佐原真1964『紫雲出』

5．遠藤順昭・町田章1970「讃岐広島心経山の弥生遺跡」（『古代学』17－2）

6．京都大学文学部1960『京都大学文学部博物館考古資料目録』1。写真によれば刃部がやや外湾し，背が直線状をなす長方形に近いものであり，一端を欠損するがえぐりをもつものである。現長10.5cm。

7．高橋護1957「戸津田遺跡出土の弥生式土器」（『遺跡』26）

8．注5文献，第2表。

9．細溪福太郎・六車恵一1967「高松市天満弥生式遺跡」（『文化財協会報』特別号 8）。

10．広峰義昭・六車恵一・溝渕茂樹1969「香大農学部構内出土の遠賀川式土器の新資料について」（『文化財協会報』特別号 9）。

11．高松平野のやや東よりの部分を流れる春日川の中流域，現在の元山町付近の河原からは，これまでかなり多量のサヌカイト片，石鏃などが採集されている。資料は現在分散しており，わずかだが香川大学に保管しているものもある。

12．都出比呂志1970「農業共同体と首長権」（『講座日本史』1）。

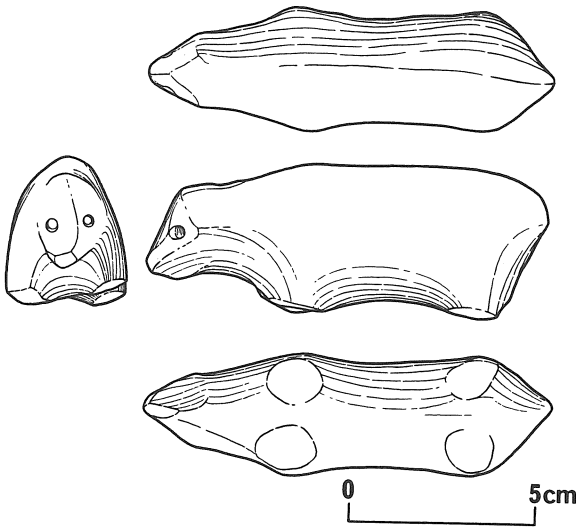
13．鎌木義昌・六車恵一1961「香川県高松市大空遺跡の土器」（『弥生式土器集成』資料篇 2）。

14．注 4 文献。

動物形土製品

故藤本円次郎氏が他の弥生時代の遺物と共に摺鉢谷を中心とする地域で採集したもので，現在藤本武四氏が保管している。

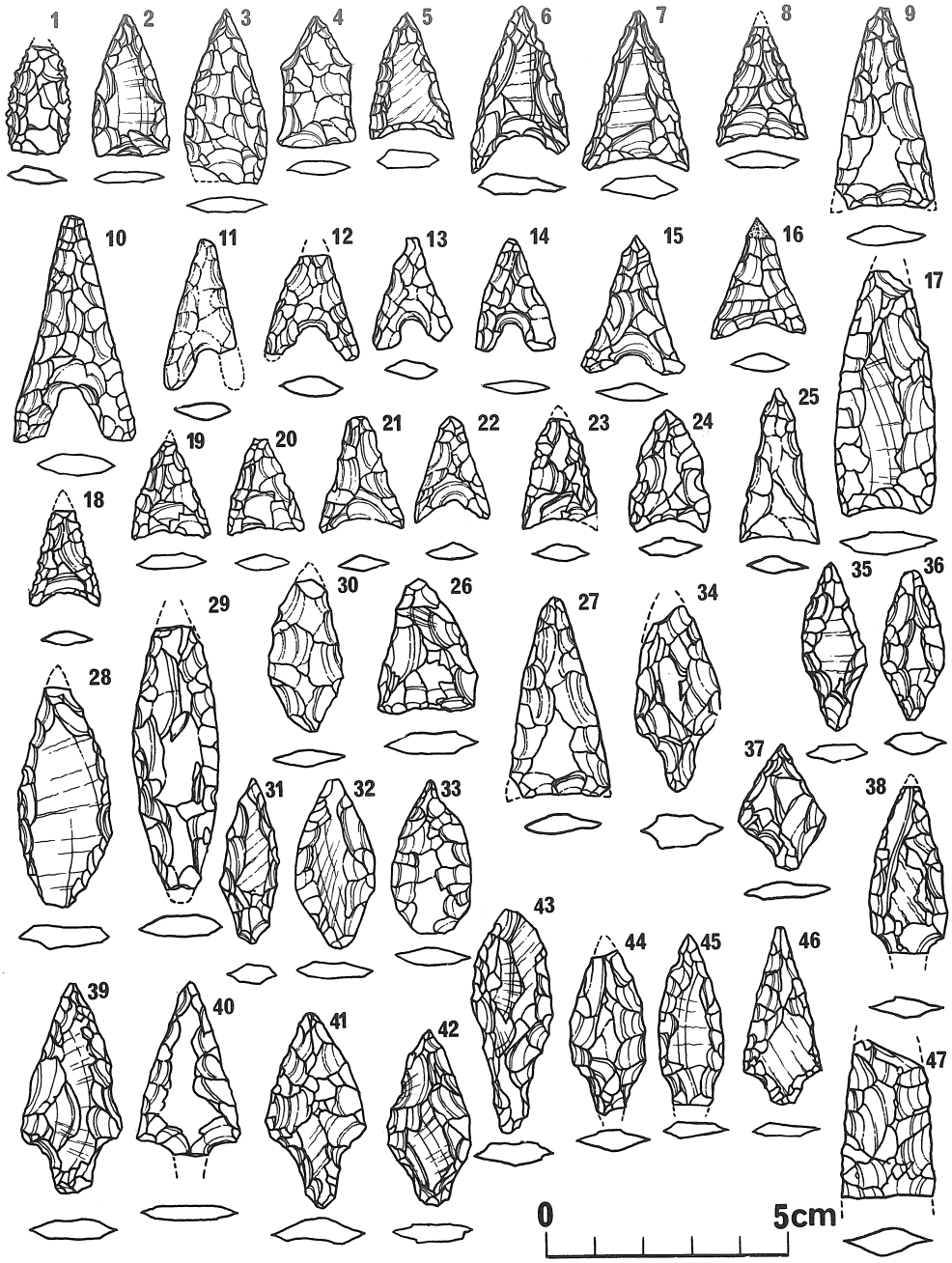
出土地点，出土状況とも詳細は不明である。　全長10.7㎝，高さ 4 ㎝で胎土には 1 ㎜以内の砂粒をかなり含み，色調は表面は黄褐色，断面は褐色，素焼きである。一見したところでは胎土・焼成・色調とともに弥生式土器とさほど変わるところはないが，胎土はやや土師器に近いようである。



挿図第 4 図　動物形土製品実測図

ずんぐりした胴部には，周囲の粘土をくぼませることにより，四本の短い足つくり，胴体の先にはやや低く頭部を作り出し，目のみを径 3.5㎜の棒状具で前方より刺突することにより表現している。胴部の後方はやや高い位置に，ゆるい高まりがあり，尾をあらわしているとみられる。足の先は平坦であり，剝離した痕跡は認められないところから，これ自体で完形をなしていたものと思われる。表面の肌荒れがひどく，調整等は不明であるが，頭部付近は指頭により整形したらしく，圧痕が残っている。全体に表現は稚拙であり，何の動物をまねたのか定かではないが，可能性あるものとしてイノシシがあげられるであろう。

このような遺物は弥生時代および古墳時代に類例を見ず，一応，古墳時代以降のものとしておきたい。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
5cm

挿図第5図　石　器　実　測　図

第四章　石清尾山古墳群の概要

1.　古墳群の分布概要

石清尾山塊一帯に分布する古墳は，現在確認できるもの 124基，過去に存在したものを含めれば 200基内外を数えることができる。

本書においては，これらを総称して石清尾山古墳群とし，記述の便宜上さらに14のグループに分類する。

従って，これまで１次，２次調査で石清尾山～号墳と呼称してきた古墳は，その立地形に拠って摺鉢谷～号墳と言い換えることになる。

A　摺鉢谷古墳群（No.１～No.31）

いわゆる摺鉢谷とそれを取りまく尾根とに分布。

積石塚・横穴式石室墳が主体。

B　峰山墓地古墳群（No.32）

摺鉢谷から流れ出た川の西側，石清尾山の東山麓に所在。

横穴式石室墳が主体。

C　西方寺古墳群（No.33～No.35）

石清尾山の北方山麓に分布。

横穴式石室墳が主体。

D　木里神社古墳群（No.36）

石清尾山の北西山麓に所在。

横穴式石室墳が主体。

E　御殿神社古墳群（No.37）

摺鉢谷を形成する山のうちの亀命山（御殿山）の西方山麓に所在。

横穴式石室墳が主体。

F　北山浦古墳群（No.38～39）

猫塚と姫塚を結ぶ山の背の南方山麓に分布。

横穴式石室墳が主体。

G　鶴尾神社古墳群（No.40～No.44）

姫塚から南東に伸びる丘陸上にある。積石塚が主体。

H　奥の池古墳群（No.45～No.49）

石清尾山と稲荷山とが形成する谷の南側に分布。

横穴式石室墳が主体。

I　稲荷山古墳群（No.50～55）

栗林公園の借景である紫雲山（稲荷山）に分布。

積石塚が主体。

J　野山古墳群（No.56～59）

浄願寺山と御殿山をつなぐ鞍部に分布。

積石塚・横穴式石室墳が主体。

K　浄願寺山古墳群（No.60～116）

浄願寺山山頂一帯に分布。

横穴式石室墳が主体。

L　がめ塚古墳群（No. 117）

浄願寺山の南西山麓に所在。

横穴式石室墳が主体。

M　片山池古墳群（No. 118）

浄願寺山の南東山麓に所在。

横穴式石室墳が主体。

N　南山浦古墳群（No. 119～124）

浄願寺山東方山麓に分布。

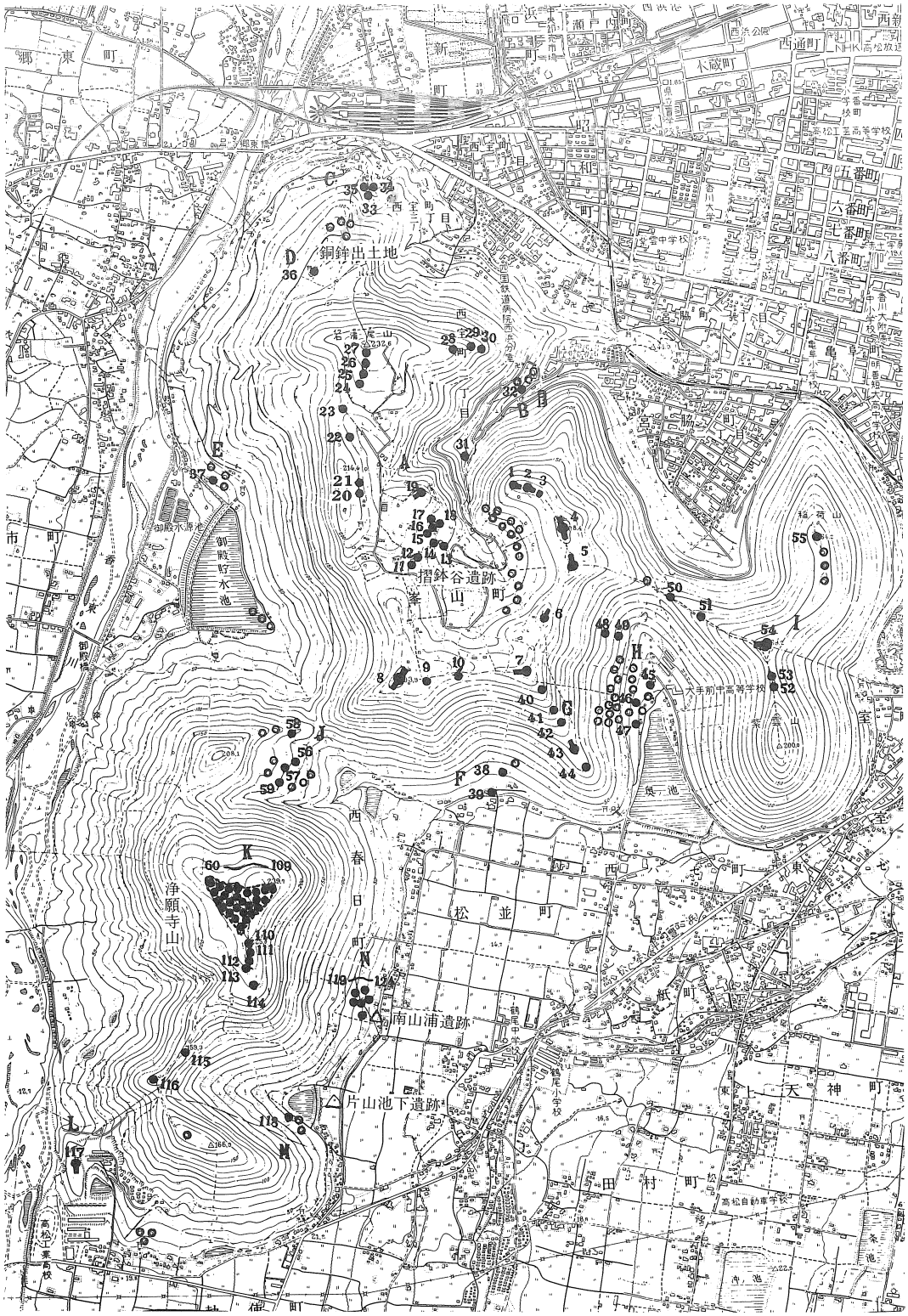
横穴式石室墳が主体。

この分類は，あくまでも記述の便宜上のもので，歴史的に形成されたものを反映しているものではない。

厳密な意味での古墳群の分類は，様々な角度から検討されるもので，本書の分類は，今後の研究の進展によって当然補正されるべきものである。

今回の調査は，古墳及び古墳群が現在いかなる状況におかれているかの内容に力点をおいた。

なお，本調査で計測した石室主軸方向は，クリノメーターで計測したため，その誤差は大きい。また，この地域の磁北は6°29′（1971年）西に偏っている。墳丘の規模，石室の大きさも実測されたもの以外はすべて略測である。



挿図第6図　**石清尾山塊古墳分布図**

●印　現存するもの

○印　京大報告に記載されているが現存しないもの

A　摺鉢谷古墳群

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
							m	m
1	北大塚西古墳	峰山町1838－2	私有 国有	山林	尾根	前方後円墳 （積石塚）	全長 19.00	
2	北大塚古墳	〃	〃 〃	〃	〃	〃 〃	全長 40.00	
3	北大塚東古墳	〃	〃 〃	〃	〃	方墳 （積石塚）	長辺 10.00 短辺 9.00	2.00
4	鏡塚古墳	〃	〃 〃	〃	〃	双方中円墳 （積石塚）	全長 70.00	
5	石船塚古墳	峰山町１８３８	〃 〃	〃	〃	前方後円墳 （積石塚）	全長 57.00	
6	小塚古墳	〃	私有	〃	〃	〃 〃	全長 17.00	
7	姫塚古墳	峰山町1838－71 〃 1838－24 〃 1838－25	〃	〃	〃	〃 〃	全長 43.00	
8	猫塚古墳	鶴市町御殿 峰山町５７	国有	〃	〃	双方中円墳 （積石塚）	全長 96.00	
9	摺鉢谷22号墳	西春日町		〃	〃	円墳 （盛土）	直径 11.00	1.5
10	摺鉢谷１号墳	西春日町 1063－10	私有	〃	斜面	円墳	直径 7.00	2.0
11	摺鉢谷２号墳	峰山町1821－２	〃	宅地	〃	〃	直径 10.00	〃
12	摺鉢谷３号墳	峰山町1821－１	〃	畑	〃	〃	〃	2.5
13	摺鉢谷４号墳	峰山町1826－２	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	3.0
14	摺鉢谷５号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
15	摺鉢谷６号墳	峰山町1838－61	〃	宅地	〃	〃	直径 6.00	2.0
16	摺鉢谷21号墳	峰山町１８３８	〃	畑	〃	〃	直径 8.00	1.5
17	摺鉢谷７号墳	峰山町1838－59	〃	〃	〃	〃	直径 6.00	1.0
18	摺鉢谷８号墳	峰山町1838－59	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.0

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm) 全長	玄室	羨道	遺物	現状	備考
竪穴式石室 2？	1 N－64°－W 2 不明	280			不明	前方部ほとんど残存せず後円部中央に盗掘坑あり	
不明	不明	不明	不〃明	不〃明	土師器（外表）	尾根道のため荒廃	
〃	〃	〃	〃	〃	不明	尾根道のため積石崩壊	
竪穴式石室？	〃	〃			〃	尾根道が一部削る盗掘坑あり	
割竹形石棺 竪穴式石室 2	1 ほぼ東西 2 ほぼ南北 3 ほぼ南北	178 185			鏡 1，円筒埴輪，土師器(外表)	尾根道が墳丘の一部を削る。竪穴式石室が盗掘を受け露出。	国指定史跡
不明	不明	不明	不明	不明	不明	前方部残存せず。尾根道により荒廃。	
竪穴式石室？	〃	〃			鏡，刀剣 円筒埴輪 土師器	尾根道により荒廃，中央部に盗掘坑あり。	
竪穴式石室 5～9？	〃				鏡ほか	大盗掘に合い、大幅に変形。	
不明	〃	不明	不明	不明	不明	墳丘中央部に大きなくぼみが存在する。	
横穴式石室？	〃	350以上	幅 80	〃	〃	天井石が露出し，石室が暴露されている。	
横穴式石室（両袖式）	N－23°2′－W（南東）	657以上	長 350 幅 150 高 207	〃	須恵器 土師器 金環ほか	羨道部先端破壊，石室の保存は良好。	床面清掃，石室実測完了
〃 〃	N－36°7′－W（南東）	597以上	長 321 幅 150 高 205	〃	須恵器 土師器 金環ほか	〃	〃
〃 〃	N－38°－W（南東）	690以上	長 500 幅 197 高 260	長200以上 巾130 高170	須恵器 土師器 ほか	祭壇設置のため奥壁は取り除かれ，床面が掘り下げられ側壁にはコンクリートの目ばり。	〃
〃 〃	N－38°－W（南東）	485以上	長 215 幅 197 高 230	長270以上 巾140 高170	不明	4号墳と共に祭壇設置のため，床面・側壁コンクリート。羨道部先端破壊。	
〃 〃	N－16°－W（南東）	310以上			〃	不動信仰に利用、祭壇設置，石室を建物のなかに入れる。	
横穴式石室	（南東）	不明	不明	不明	〃	盛土は流出し天井石が露出し石室基底部は残存。	
横穴式石室（無袖式）	N－14°3′－W（南東）	414以上			須恵器 鉄製品	水道工事，開墾により大半破壊石室基底部残存。	床面清掃，石室実測
横穴式石室	（南） N－5°7′－W	272以上			土師器 鉄製品	開墾により石室基底部を残すのみ。	〃

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
19	摺鉢谷9号墳	西宝町 西石清尾36 峰山町	国有 私有	山林	尾根	前方後円墳 （積石塚）	全長 27.40 後円部径13.10 前方部巾10.00	—— 1.20 0.95
20	摺鉢谷10号墳	鶴市町御殿３７	国有	〃	斜面	円墳	直径 6.00	2.00
21	摺鉢谷20号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 6.50	〃
22	摺鉢谷19号墳	鶴市町御殿	私有	畑	〃	〃	直径 8.00	〃
23	摺鉢谷11号墳	鶴市町御殿３７	国有	山林	南面傾斜地	〃	直径 6.00	1.00
24	摺鉢谷12号墳	西宝町香西３７	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	1.50
25	摺鉢谷18号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 6.00	1.00
26	摺鉢谷17号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	1.20
27	摺鉢谷13号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 9.00	1.50
28	摺鉢谷14号墳	西宝町 西石清尾36	〃	〃	尾根	円墳 （積石塚）	直径 5.00	1.00
29	摺鉢谷15号墳	〃	〃	〃	〃	尾根	直径 7.00	1.40
30	摺鉢谷16号墳	〃	〃	〃	尾根よりの南斜面	円墳 （積石塚）	直径 6.00	1.00
31	摺鉢谷23号墳	峰山町	〃	〃		〃 〃	直径 9.00	2.00

B　峰山墓地内古墳群

32	峰山墓地内 1号墳	西宝町２丁目	市有	墓地	南東に面した斜面			

C　西方寺古墳群

33	西宝寺１号墳	西宝町 ３丁目５０６	私有	山林	北面した傾斜地	円墳	直径 8.00	1.20
34	西宝寺２号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	1.00
35	西宝寺３号墳	〃	私〃	〃	〃	〃	直径 10.00	2.50

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm) 全長	玄室	羨道	遺物	現状	備考
竪穴式石室？	不明	不明			不明	尾根道，開墾によって変形を受けている。	墳丘実測
横穴式石室（片袖式）	N－10°－W（南）	455以上	長 267 幅 146 高さ 134	幅 105	須恵器，金環，鉄製品ほか	墳丘は大半を失い，石室も基底部を残すのみ。	床面清掃 石室実測
横穴式石室（両袖式）	（南）	410以上	長 215 幅 100	幅 100	不明	〃	〃
横穴式石室	（南東）	575以上	不明	不明	〃	開墾のため，墳丘は周囲を削られ天井露出。羨道部，天井部は破壊。	
不明	不明	不明	不明	不明	〃	墳丘は礫混じりの土で構成されている。畑地化の際に形成された可能性もある。	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	礫混じりの土で形成，墳丘の一部は削られている	
横穴式石室（両袖式）	N－10°9′－E（南）	420以上	長 210 幅 150	幅 90	須恵器，土師器，鉄製品	天井石を失ない，基底部を残すのみ。	床面清掃 石室実測
竪穴式石室？	不明	不明			不明	墳丘は著しく崩壊，最基底部は残存。自然地形との判別困難。	
〃	〃	〃			〃	〃	墳丘実測
不明	〃	不明	不明	不明	〃	〃	
竪穴式石室	〃	〃			〃	〃	
横穴式石室	N－60°－W（南東）	300以上	幅 157 高さ 130以上	不明	不明	墓地内にあり，段階状に造成された墓地によって墳丘はそれに組み込まれ石室がのぞいている。	
不明	不明	不明	不明	不明	不明	山林中にあり，墳丘中央部に大きな穴があいている。石塊が散乱。	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

D　木里神社古墳群

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
36	木里神社1号墳	郷東町	私有	社地	北東に傾斜した台地	円墳	直径 10.00 m	2.00 m m

E　御殿神社古墳群

37	御殿神社1号墳	鶴市町御殿1434	私有	宅地	南面した傾斜地	円墳	不明	不明

F　北山浦古墳群

38	北山浦1号墳	西春日町北山浦1063	私有	宅地	南面した傾斜地	円墳	直径 10.00	2.50
39	北山浦2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	1.20

G　鶴尾神社古墳群

40	鶴尾神社1号墳	西春日町	私有	山林	南面した尾根上の傾斜地	円墳（積石積）	長径 9.00 短径 8.00	1.50
41	鶴尾神社2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 13.00 短径 10.00	4.00
42	鶴尾神社3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 10.00	2.50
43	鶴尾神社4号墳	〃	〃	〃	尾根突端	前方後円墳（積石塚）	全長 47.00 後円部径30以上	
44	鶴尾神社5号墳	〃	〃	〃	山腹の南東傾斜地	円墳（積石塚）	長径 8.00 短径 6.00	1.50

H　奥の池古墳群

45	奥の池1号墳	西春日町北山浦	私有	畑	東面する傾斜地	円墳	直径 12.00	1.50
46	奥の池2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 11.00	1.50
47	奥の池3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 10.00	〃
48	奥の池4号墳	室町	〃	山林	南東に面する傾斜地	〃	直径 8.00	〃
49	奥の池5号墳	〃	〃	〃		〃	〃	2.00

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm) 全長	玄室	羨道	遺物	現状	備考
横穴式石室	（南西）	不明	不明	不明	不明	神社建設のため墳丘の周囲は削られ石垣が築かれている。また社殿の一部に取り囲まれているため計測できない。	
横穴式石室	不明	不明	不明	不明	人骨	墳丘は削られ石室は崩壊し，その上に家が建てられている。	
横穴式石室（両袖式）	N－37°－W（南東）	775以上	長 395 巾 160 高 180	幅 105	不明	民家の庭の一部になっているため，墳丘の周囲は削られ，羨道部・奥壁の一部破壊。	
〃 〃	（ほぼ南）	400以上	長 180 巾 160 高 170	幅 90	〃	宅地化のため削られ消滅	
不明	不明	不明	不明	不明	不明	基底部の段築若干残存。中央部に盗掘　。	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘崩壊著しい。自然地形との判別困難。	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	基底部の段築残存。中央に盗掘坑，自然地形との判別困難。	
竪穴式石室 2 ?	1 ほぼ東西 2 〃	450 不明	幅(西部)115 〃(東部) 90	高さ 90	土師器（外表）	墳丘の崩壊著しい。後円部・中央部に竪穴式石室露出。	墳丘実測
竪穴式石室	N－68°－E	200以上	幅 100	高さ 60以上	不明	崩壊激しく，周囲に安山岩の自然露頭があるため墳丘との区別困難。墳丘中央部に天井石を失なった竪穴式石室が露出。砕石作業の進行状況次第では破壊される恐れあり。	
横穴式石室	N－9°－E（南）	560以上	不明	不明	不明	荒廃した畑中にあり開墾により墳丘の大半を失なっている。学校の用地のため，整地される恐れあり。	
横穴式石室（両袖式）	N－12°－E（南）	650以上	長 450 幅 185 高 160以上	幅 110	〃	畑中にあり盛土の大半を失ない羨道部先端部・奥壁部は破壊され，物置として利用されている	
横穴式石室	不明	不明	不明	不明	〃	畑中にあり，墳丘・石室とも徹底的に破壊されている。基底部は残存している。	
不明	〃	不明	不明	不明	〃	盛土は大半を失ない，中央部に安山岩の巨石が露出，自然との区別困難。	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

I 稲荷山古墳群

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
50	稲荷山3号墳	宮脇町稲荷山	国有	山林	尾根鞍部	円墳（積石塚）	m 直径 9.00	m 1.00
51	〃 2号墳	〃	〃	〃	尾根	〃	長径 15.00 短径 11.00	1.50
52	〃 1号墳	室町紫雲山	〃	〃	尾根鞍部	〃	直径 18.00	2.50
53	〃 4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	2.00
54	稲荷山姫塚	宮脇町 室町	〃	〃	山頂	前方後円墳（積石塚）	全長 54.00 後円部径 24.00	4.00
55	稲荷山北端古墳	宮脇町稲荷山	〃	〃	尾根突端	円墳（積石塚）	長径 28.00 短径 20.00	2.50

J 野山古墳群

56	野山1号墳	西春日町 野山1063－126	私有	畑	東面した傾斜地の丘陵上	円墳	直径 12.00	3.50
57	〃 2号墳	〃 〃 1063－129	〃	〃	〃	〃	〃 8.00	2.50
58	〃 3号墳	〃 〃 1063	〃	〃	〃	〃	〃 8.00	1.50
59	〃 4号墳	〃 〃	〃	畑 山林	北東に面した尾根上の傾斜地	円墳（積石塚）	長径 7.00 短径 5.00	1.20

K 浄願寺山古墳群

60	浄願寺山1号墳	西春日町 飯田町東山1414	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	長径 16.00 短径 11.00	1.50
61	〃 2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 6.00	1.50
62	〃 3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 22.00	2.00
63	〃 4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10.00	1.50
64	〃 5号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 6.00	1.50

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm) 全長	玄室	羨道	遺物	現状
不明	不明	不明	不明	不明	土師器	墳丘は攪乱を受けてほとんど失なっている。尾根道にもあたっているため残存部は少ない。
竪穴式石室	〃	〃			不明	尾根道の西半部を切られ、中央部には盗掘坑あり。基底部は残存。
不明	〃	〃			〃	尾根道が墳丘中央部を通っているため変形を受けている。
〃	〃	〃			〃	〃
竪穴式石室	〃	〃			〃	山道が後円部の一部を削る。後円部、前方部に盗掘坑、前方部段築崩壊しかけている。
不明	〃	〃			〃	山道が墳丘を横切り、段築も崩壊しているが、基底部は残存。

横穴式石室（片袖式）	N－16°－E（南）	635 以上	長 310 巾 210 高さ105以上	巾 85 高さ 105以上	不明	畑地化のため墳丘の周囲は削られ石室の奥壁、羨道部先端は破壊。
〃	N－17°－E（南）	440 〃	長 320 巾 160 高さ150以上	巾 100 高さ 100以上	〃	〃
横穴式石室	N－16°－E（南）	500 〃	巾 102 以上	不明	〃	開墾のため盛土は失ない、石室と基底部を残すのみ。
竪穴式石室	不明	不明			土師器片（外表）	荒廃し、中央部に盗掘坑がみられる。

不明	不明	不明	不明	不明	不明	墳丘中央部は深くえぐられ巨石が露出している。畑の境界の壁が墳丘を横断。
横穴式石室（両袖式）	N－42°－W（南東）	560 以上	全長 405 巾 135	巾 75	〃	墳丘中央部は深くえぐられ石室基底部が露出している。
横穴式石室	〃（〃）	推定 800以上	全長 400 巾 228	不明	〃	墳丘中央部は削られ石室基底部が露出、羨道先端は破壊されている。
横穴式石室（両袖式）	N－18°－W（南東）	655 以上	巾 235	巾 140	〃	〃
横穴式石室	N－36°－W（南東）	推定 600以上	巾 150	不明	不明	〃

No.	名　　称	所　在　地	所　有	地　目	立　　地	墳　　丘		
						形　　態	平面計測	高さ
65	浄願寺山6号墳	飯田町東山1414	公　有	山　林	山頂の南面した傾斜地	円　　墳	m 直径　7.00	m 0.50
66	〃　7号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 13.00 短径 10.00	1.50
67	〃　8号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　10.00 〃　8.00	1.00
68	〃　9号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　8.00 〃　7.00	1.20
69	〃　10号墳	〃	〃	〃	〃	円　　墳 （空　掘）	〃　11.00 〃　8.00	2.70
70	〃　11号墳	〃	〃	〃	〃	円　　墳	〃　12.00 〃　8.00	1.50
71	〃　12号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　10.00 〃　8.00	1.50
72	〃　13号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　9.00	1.50
73	〃　14号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　8.00 短径　7.00	1.50
74	〃　15号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　8.00 〃　6.00	1.00
75	〃　16号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　7.00	0.50
76	〃　17号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　9.00	1.20
77	〃　18号墳	〃	共　有	〃	南面した傾斜地 （山 頂 部）	〃	〃　7.00	1.50
78	〃　19号墳	飯 田 町 東 山	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径　9.00	1.20
79	〃　20号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　9.00 〃　7.00	2.00
80	〃　21号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　10.00 〃　7.00	1.50
81	〃　22号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　9.00 〃　7.00	1.00
82	〃　23号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　8.00	1.20

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	墳丘は削平されている。
横穴式石室	推定 N－12°－W	〃	〃	〃	〃	墳丘は削平され、石室の用材が露出している。最下部は残存しているらしい。
不明	不明	不明	不明	不明	〃	墳丘中央部に大きな盗掘坑あり。
横穴式石室	推定 N－20°－W	〃	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘坑あり。石室の用材が若干露出。
〃	N－16°－W（南）	740 以上	長 355 巾 160 高 160	巾 100 高 110以上	〃	墳丘の周囲は若干削られ羨道の先端部は破壊されているが、本古墳群中保存度は最も高い。
横穴式石室（片袖式）	推定 N－20°－W	推定 700以上	不明	不明	〃	墳丘中央部に石室の用材が散乱している。
横穴式石室	推定 N－28°－W	推定 600以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘坑あり。
〃	推定 N－20°－W	推定 750以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に石室の用材が露出、基底部は残存。
〃	推定 N－10°－W	推定 600以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘坑あり。
〃	推定 N－22°－W	推定 650以上	〃	〃	〃	墳兵中央部に盗掘坑あり。石室の用材が露出。
不明	不明	不明	〃	〃	〃	わずかな盛りあがりをみせる。
横穴式石室	N－16°－W	推定 700以上	〃	〃	〃	中央部に盗掘坑あり。
〃	N－18°－W（南）	450 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け石室の用材である安山岩の石塊が露出、羨道部先端破壊。
〃	N－14°－W（南）	650 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部に天井石らしきもの露出。
不明	不明	不明	〃	〃	〃	比較的保存度良好。
横穴式石室	（南）	750 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け玄室部の天井石が露出。
〃	推定 N－30°－W	推定 620 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部に石室の用材が散乱。
〃	推定 N－16°－W	推定 727 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部の石室の用材が散乱。

No.	名　　称	所　在　地	所　有	地　目	立　　地	墳　　丘		
						形　　態	平面計測	高さ
83	浄願寺山24号墳	飯田町東山	共　有	山　林	南面した傾斜地（山頂部）	円　　墳	直径　8.00 m	1.20 m
84	〃　25号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　9.00 短径　7.00	1.50
85	〃　26号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 12.00 短径　9.00	2.50
86	〃　27号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　8.00	1.00
87	〃　28号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 10.00	1.00
88	〃　29号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　9.00 短径　7.00	1.20
89	〃　30号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 11.00 短径　9.00	2.00
90	〃　31号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　9.00 短径　8.00	1.20
91	〃　32号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 11.00 短径　9.00	2.50
92	〃　33号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　7.00 短径　6.00	1.00
93	〃　34号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　10.00 〃　8.00	2.00
94	〃　35号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　7.00	1.20
95	〃　36号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径　8.00	1.20
96	〃　37号墳	〃	〃	〃	山頂の南東に面する斜面	〃	直径　6.00	1.00
97	〃　38号墳	西春日町南山浦	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径　8.00	1.50
98	〃　39号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　7.00	1.20
99	〃　40号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　9.00 短径　7.00	1.20
100	〃　41号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　8.00	1.00

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	かって畑であったため相当荒廃している。
横穴式石室	N－10°－E	580 以上	〃	〃	〃	墳丘中央部盗掘坑あり、石室の用材散乱。
〃	N－2°－W	810 以上	巾 140	〃	〃	巨大な安山岩の天井石が動かされ石室が露出している。
〃	N－24°－W	推定 560以上	不明	〃	〃	かって畑であったため墳丘は削平され石室基底部が露出。
〃	N－33°－W（南東）	不明	〃	〃	〃	〃
不明	不明	不明	不明	不明	〃	比較的保有度良好。
横穴式石室	N－°8－W	700 以上	巾 155	〃	〃	盗掘を受け石室露出。
〃	N－26°－W	620 以上	推定 310 巾 135	〃	〃	盗掘を受け石室露出。
横穴式石室（両袖式）	N－36°－W	推定 810以上	不明	〃	〃	盗掘を受け石室露出。
横穴式石室	不明	不明	〃	〃	〃	天井石らしきもの露出している。
〃	N－0°（南）	680 以上	巾 133	〃	〃	盗掘を受け石室基底部露出。
〃	N－16°－W	580 以上	不明	〃	〃	盗掘を受け、石室の用材散乱。
〃	N－20°－W	780 以上	巾 155	〃	〃	盗掘を受け石室露出、羨道部破壊。
〃	N－16°－W	550 以上	不明	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	N－0°（南）	750 以上	長 380 巾 150	巾 80	〃	盗掘を受け石室露出、羨道部先端破壊。
〃	N－20°－E	550 以上	不明	不明	不明	盗掘を受け石材散乱。
〃	N－0°（南）	推定 660以上	〃	〃	〃	
〃	推定 N－28°－W	不明	〃	〃	〃	中央部に盗掘坑あり。

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
101	浄願寺山42号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	直径 8.00 m	1.20 m
102	〃 43号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径 8.00	1.20
103	〃 44号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.20
104	〃 45号墳	飯田町東山	〃	〃	〃	〃	直径 9.00	1.00
105	〃 46号墳	西春日町南山浦	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.20
106	〃 47号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 8.00	1.50
107	〃 48号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 8.00 短径 6.00	1.20
108	〃 49号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 8.00 〃 6.00	1.50
109	〃 50号墳	〃	〃	〃	〃	〃		1.10
110	〃 51号墳	飯田町東山1423	〃	〃	山頂の台地	〃	長径 8.00 短径 6.00	1.00
111	〃 52号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 7.00 〃 5.00	1.00
112	〃 53号墳	〃	〃	〃	南面した傾斜面	〃	〃 10.00 〃 9.00	2.00
113	〃 54号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 8.50 〃 7.00	1.50
114	〃 55号墳	西春日町南山浦	〃	〃	山頂南東部の突端	〃	〃 8.00 〃 8.00	1.50
115	〃 56号墳	飯田町 西春日町南山浦	〃	〃	尾根上の鞍部	〃	〃 8.00 〃 6.00	1.20
116	浄願寺山57号墳	飯田町	共有	山林	尾根上小台地	円墳	直径 8.00	1.20

L がめ塚古墳群

117	がめ塚	勅使町小山	国有	山林	台地	前方後円墳	全長 25.00 後円部径 15.00	後円部 2.50 前方部 1.00

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
横穴式石室	推定 N－10°－W	推定 550以上	不明	不明	不明	中央部に盗掘坑あり。
〃	推定 N－12°－W	推定 700以上	〃	〃	〃	中央部に盗掘坑あり、石材散乱。
〃	推定 N－5°－W	不明	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	推定 N－8°－W	〃	〃	〃	〃	盗掘を受け中央部に大きな穴あり。
〃	推定 N－4°－W	〃	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	推定 N－5°－W	〃	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	N－14°－W	推定 500以上	〃	〃	〃	盗掘を受け天井石露出。
〃	N－5°－W	不明	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
不明	不明	〃	〃	〃	〃	石材散乱。
横穴式石室	〃	〃	〃	〃	〃	安山岩の巨石が露出、地山の岩盤と識別が困難。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央部に盗掘坑あり、石塊が散乱。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘は削平され、原形をとどめていない。
不明	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘上には石塊が散乱。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘は大半を失ない、内部構造も失なっている。尾根道が墳丘を縦断。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央部に若干のくぼみがあるが、比較的保存度良好。

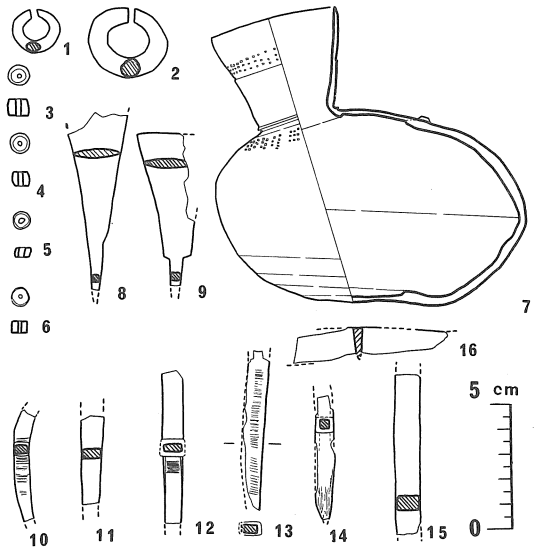
不明	不明	不明	不明	不明	不明	学校の校地内にある。後円部に給水塔が建ったため後円部は削平され前方部の盛土も削られ基底部を残して破壊。

M　片山池古墳群

No.	名　　称	所　在　地	所　有	地　目	立　地	墳　丘		
						形　態	平面計測	高さ
118	片山池1号墳	西春日町南山浦 1626－10	私　有	畑	山麓の北東に面した傾斜地	円　墳	直径 7.00 m	0.50 m

N　南山浦古墳群

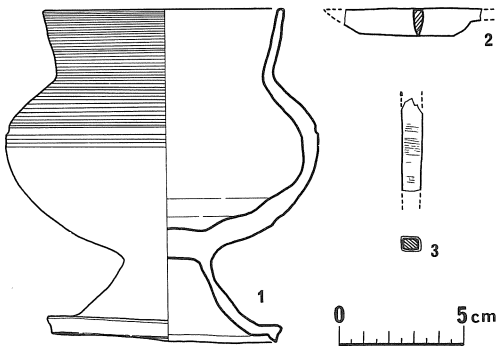
119	南山浦1号墳	西春日町南山浦	県　有	畑	東面する斜面	円　墳	不　明	不明
120	〃　2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
121	〃　3号墳	〃	私　有	〃	〃	〃	〃	〃
122	〃　4号墳	〃	県　有	〃	〃	〃	〃	〃
123	〃　5号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
124	〃　6号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃



挿図第7図　摺鉢谷3号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	畑地化のため墳丘は削平され石室の用材と思われる巨石が露出している。

横穴式石室	（南）	860 以上	長 225 巾 180	長 370 巾 140	須恵器、土師器 鉄鏃、鉄釘、 金鐶	県営住宅建設のため、発掘調査を完了し、石室はそのままの状態にしている。
〃	（南）	766 以上	長 416 巾 180	長 350 巾 140	須恵器、鉄鏃 金環、馬具	
〃	（南東）	680 以上	長 460 巾 190	長 220 巾 150	須恵器、土師器、瓦片、骨	
〃	（南）	現在長 300	巾 120		須恵器、土師器、鉄鏃	
〃						未調査 羨道部天井石の一部破壊。
〃						未調査 奥壁、側壁のみ残存。



挿図第8図 摺鉢谷7・8号墳出土遺物実測図
（3は8号墳出土）（縮尺1/3）

3. 各古墳群の素描と主要古墳の概要

A 摺鉢谷古墳群（No.1～No.31）

高松市街地の南西部，海に近接する山塊にある。標高232.6 mの石清尾山を中心として，山頂一帯に分布する古墳群である。この古墳群は，大別して積石塚と盛土墳とに分類できる。これは，そのまま時期差を表わしている。すなわち，盛土墳のうち内容の判明している古墳の内部構造はすべて横穴式石室である。それに比べて積石塚には，現在まで横穴式石室の存在は確認されていない。本古墳群も，当然ある程度のグルーピングが可能である。今，積石塚においては，No.1～No.5までの双方中円墳と前方後円墳を含む古墳群(イ)，No.6～No.8の古墳群(ロ)，No.28～No.30の古墳群(ハ)，それから，今は消滅した北大塚南方の小円墳群(ニ)がある。（No.19，No.31は現象的には孤立）。また盛土墳は，No.9～No.10の古墳群(ホ)，No.12～No.18の古墳群(ヘ)，No.20～No.22の古墳群(ト)，No.23～No.27の古墳群(チ)に分類できる。

(イ)No.1～No.5，すべて尾根上に立地し，海を望むことのできる景勝の地に存在する。いずれも，古墳時代でも前半期半に築造されたものであると推定される。各古墳間には時期差が存在するが，資料的に不確実なものが多く，厳密な比較はできない。しいて，順序をつけるならば，No.5の石船塚がなかでも新しい要素を持っている。立地からみれば，鏡塚が最も優位な位置を占めている。墳形からは判断しかねる。いずれにしても，4世紀の前半～中葉から5世紀の初頭にかけて，(ロ)の古墳群とともに，この石清尾地域を基盤にしていた集団を代表する一系列であることは確実である。

No. 1 北大塚西古墳

立　　地　高松市街地から摺鉢谷に登る道の東側尾根上にある。摺鉢谷が馬蹄形にめぐる一方の端にあり摺鉢谷9号墳（No. 19）と谷を隔てて対峙する。北大塚のすぐ西側に存在する。

墳　　丘　前方後円墳　積石塚

墳丘は，この山から産する含輝石讃岐岩質安山岩で築かれている。崩壊が激しく本来の墳形，規模を明らかにしえないが，一応前方後円墳としておく。現存するものは，全長約19m，後円部径約9m，高さ約1.5m，くびれ部巾約5m，前方部長約10m，巾約6mである。前方部を尾根の伸びる方向と同様に東に向けている。したがって，前方部を北大塚に向けていることになる。

埴輪，土師器等は不明。

内部構造　竪穴式石室2基

後円部のほぼ中央に，主軸に平行して，竪穴式石室が存在した。全長約2.8m，幅約0.8m，深さ約0.65mである。側壁の下半は比較的大形の石塊を用い，上半は

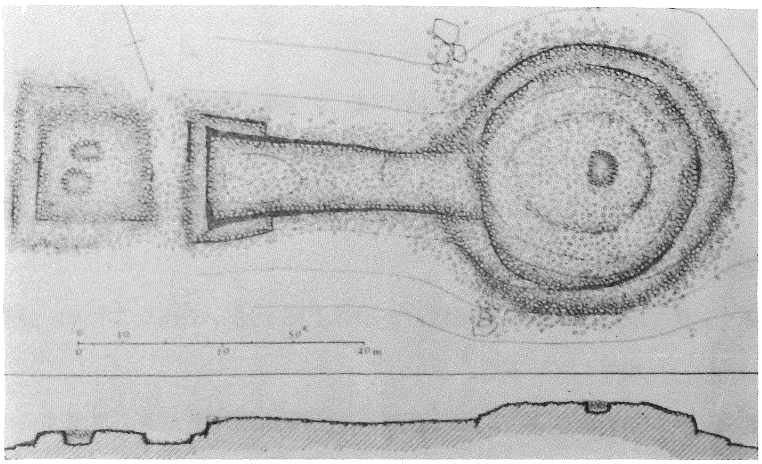
主軸に直交する竪穴式石室の一部が露出している。荒廃しているので，詳細は明らかでない。

遺　　物　京大報告によれば，石室内から丸底の壺の破片が採集されている。これが本来の副葬品かどうかについては明らかにしえない。

現　　状　山林中にあるが，墳丘中央を尾根道が通っているため相当荒廃している。特に前方部はほとんど残存していない。

問 題 点　石清尾山古墳群における前期古墳のなかでも小規模ではあるが，首長系列に属する古墳と思われる。築造時期は不明。

No. 2　北大塚古墳（挿図第９図）



挿図第９図　北大塚墳丘実測図

立　　地　No.１古墳のすぐ東に位置し，鏡塚から北西に下降する尾根の先端近くにあり，海に対する眺望は極めてよい。

墳　　丘　前方後円墳　積石塚

全長約40ｍ，後円部径約19.5ｍ，高さ約 4.5ｍ，くびれ部巾約4.5ｍ,前方部長約20.5ｍ，幅約10ｍ，高さ約３ｍである。後円部に比べて，前方部は低く狭い。後円部は２段築成であるが，前方部と後円部をつなぐ部分は１段築成であり，前方部先端にいたって２段築成となる。したがって，前方部は，途中から角度をかえて開くことになる。前方部を東に向け，主軸は尾根の方向と一致し東西方向をとる。なお，積石の間には若干の土砂が存在する。外表には，土師器片が散在している。埴輪は元々存在していなかったらしい。

内部構造　竪穴式石室であると思われるが不明。

遺　　物　墳丘外表の土器片は，実見した限りでは図示できるものはない。したがって，器形も判別できない。破片には，厚さ約５～６㎜，外面は「ハケ」調整，内面はヘラ削

りされたものがあり，色は赤褐色，胎土（含雲母）・焼成とも良好なものである。あるいは，壺形土器の一部であるかもしれない。

現　　状　No. 1　古墳と同様，荒廃している。

前方部先端は，本来の姿をとどめた段築が残存している数少ない場所であり，早急な保存策が望まれる。

問 題 点　段築の外面は，石垣状を呈し，しっかりとした面を持っている。本来の姿は現状とかなり異なる。

本墳は，墳丘形態からいって，近年注目を浴びている前方部が，バチ形に開く古墳の一変種の可能性がある。また他の要素から考えても，石清尾古墳群のなかでは，最古の古墳の部類に入るとしてよい。

No. 3　北大塚東古墳

立　　地　立地的には，北大塚西古墳，北大塚古墳と同じ。3基とも極めて近接している。

墳　　丘　方墳，積石塚

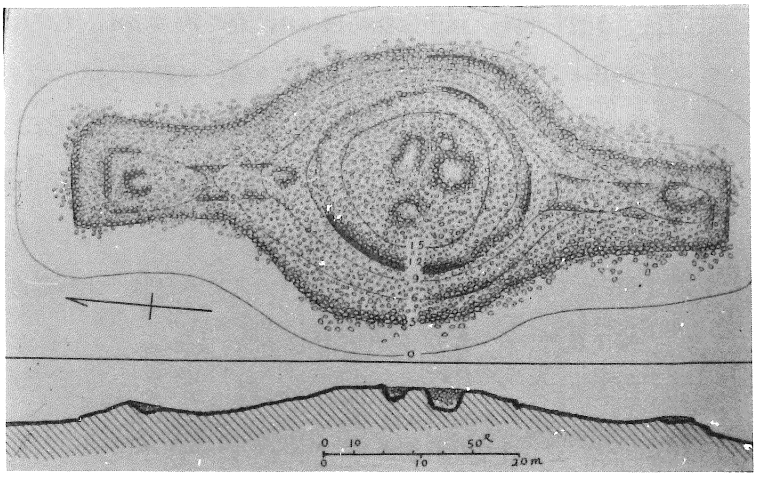
約10 m × 9 m，高さ約 2 m である。2段築造の古墳である。外表施設は不明。

内部構造　不明。

現　　状　前の古墳と同様尾根道が墳丘上部を通っていることと，盗掘を受けているため相当荒廃している。

問 題 点　立地的にみて，すぐ西側の北大塚古墳にあたかも従属するかの如くである。方墳という形態も，本古墳群中では，確認できているものは，本墳以外にない。方墳の性格をも含めて，北大塚古墳との関係は，今後の課題である。

No. 4　鏡塚（挿図第10図）



挿図第10図　鏡塚墳丘実測図

立　　地　北大塚古墳から南東に伸びる主脈上，標高 203 m に立地する。摺鉢谷東部の主脈上では，一番高地に位置する。海・摺鉢谷への眺望はともによい。

墳　　丘　双方中円墳　積石塚

全長約70 m，中円部径約30 m，高さ約 3.6 m，南側の突出部長約20 m，幅約 9 m 高さ約 2 m，北側の突出部長約20 m，巾約 9 m，高さ約 2 m である。主軸は尾根の方向と一致し，ほぼ南北方向をとる。地形に制約されているためか，南北の突出部は一直線上に並ばない。墳丘は中円部，突出部とも 2 段築成である。外表施設は不明。

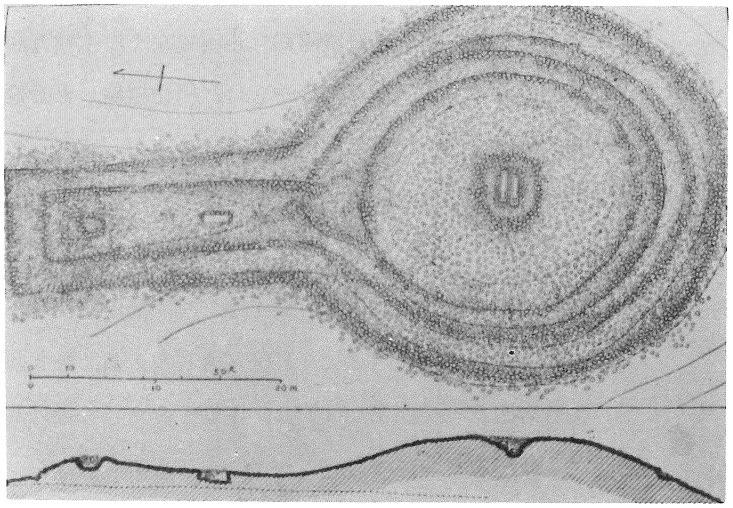
内部構造　墳丘上には，幾つかの盗掘坑が存在するが，構造物は見あたらない。おそらく，猫塚と同様，竪穴式石室が存在したと思われる。

遺　　物　一切不明

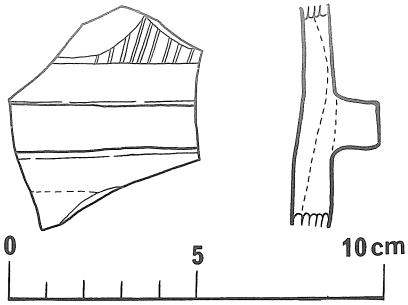
現　　状　本墳も，先の北大塚と同様な立地を示しているが，尾根道が古墳の東側を通っている。その道が，古墳の墳丘を削っているため，若干変形を受けている。

問 題 点　墳丘外表のほぼ全面に，コブシ大の河原石が散乱している。これは，石室の床面に敷いていたものが，盗掘などにより排出されたものと理解されている。しかし，これが墳丘全面にわたっていること，あまりにもその量が多いこと，石清尾の他の古墳に類例があること，積石の相当深いところにも存在することから考えて，大半はもともと積石の間に，あたかも葺石の如く存在したのではないかとの疑いもある。こうしたことは，この石清尾における積石塚の性格に重大な問題を提起するものであり，今後の意識的な調査が期待される。

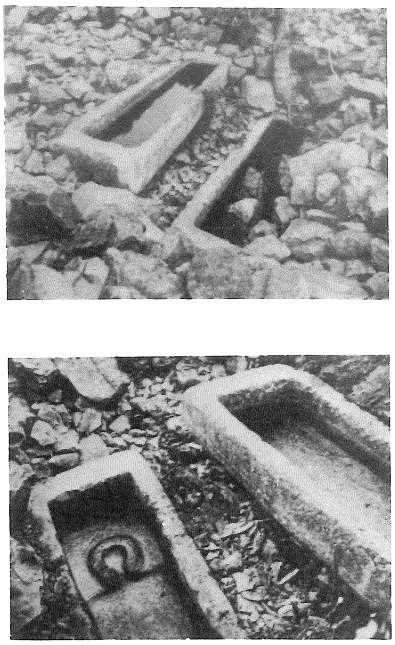
No. 5　石船塚（挿図第11・12・13図）



挿図第11図　石船塚墳丘実測図



挿図第12図　石船塚出土円筒埴輪略測図
（縮尺1/2）



挿図第13図　石船塚出土刳抜式割竹形石棺

立　　地　摺鉢谷の東方中央部鏡塚より南へ若干下った尾根上にある。また東部は，石清尾山と稲荷山をつなぐ栗林トンネルの鞍部へ，さらに南部は若干下って小塚～姫塚に至る。いわばこれら三方向の分岐点に位置する。後円部を高松南部の平野部に，前方部を鏡塚に向ける。

墳　　丘　前方後円墳　積石塚

全長約57m，後円部径約30m，高さ約 5.5m，くびれ部巾約12m，前方部長約27m，幅10m，高さ約 1.8mである。主軸は，鏡塚と同様地形に制約されてほぼ南北をとり，前方部を北に向ける。地盤が前方部の方が高いため，後円部には相当な量の石を積んでいる。また後円部は正円でなく，主軸方向に長い。後円部３段，前方部２段築成である。なお外表からは，円筒埴輪，土師器片が採集されている。円筒埴輪の樹立状況の復元は極めて困難であるが，通例の如く，全周をめぐっていたかどうかになれば疑しい。またその量も古墳の規模等に比較すればかならずしも多くない。

内部構造　後円部中心に刳抜式割竹形石棺１基，後円部中心より約６mのところに小竪穴式石室１基，前方部の後円部よりに竪穴式石室１基，計３基の主体部が確認されている。

割竹形石棺（挿図第13図）は，主軸と直交して後円部中央にあり，本墳の中心主体である。石室を伴っていたかどうかは不明であるが，京大報告では一応存在していなかったとしている。石棺の石質は，角閃安山岩（これより西方約８kmの綾歌郡

国分寺町石船に所在する鷲の山産）であり，棺身には，造り付けの馬蹄形をした枕がある。（石棺の詳細に関しては，京大報告を参照されたい）

後円部の小竪穴式石室は，この石棺の南西約４ｍ，主軸にほぼ平行して存在する。全長約1.78ｍ，幅0.44ｍ，深さ約 0.4ｍである。両短側壁は安山岩の１枚石を使用し，両長側壁は，１枚石～板状安山岩の３～４枚の小口積みである。天井石は，そのほとんどが長さ 0.9～ 0.7ｍ，巾 0.3ｍ程の細長い柱状の安山岩を使用している。石室内面は，全面にわたって赤色顔料が塗布されている。床面の詳細は不明。

前方部の竪穴式石室は，主軸に平行し，長さ約1.85ｍ，幅約 0.9ｍである。石室下半部は，四角い石塊を積み，上半部はやや持送り気味に板状安山岩を小口に積んでいる。天井石は不明。

遺　物　後円部の小竪穴式石室より，鏡（変形獣形鏡）一面出土が判明しているのみである。なお，墳丘外表部に存在したと思われる円筒埴輪片は，相当量が出土したらしいが，散逸して明らかにしえない。わずかに実見したもののうち一例を示せば次の通りである（挿図第12図）。外面は，タテ方向の「刷毛目」で調整されその後タガを貼りつけ，タガの上をヨコナデ調整されている。タガは，突出度の強いものであるが，端部はシャープさをやや失ってきている傾向は否めない。外面の「刷毛目」は巾１～１.5㎜もあり，かなりあらい。

施行単位は不明である。内面は，指ナデ調整を行なっているが，横方向の非常にあらい「刷毛目」が残存している。

焼成，胎土ともに良好である。京大報告では，方形の透しをもったものが存在したことが記されている。円筒埴輪のほか，朝顔形埴輪も存在したらしい。

土師器は，京大報告では，壺・高杯等が認められている。いずれも，硬く焼成されており，破片には厚さ６㎜程度で「刷毛目」を施したもの，ナデ調整のもの，丹を塗布したものもある。

現　状　本墳も鏡塚と同様，尾根道が墳丘東側を通っている。その際，前方部先端，後円部の一部が削られている。本墳は1934年（昭９）１月22日　国の史跡に指定された。最近になって，後円部の一部が盗掘を受け，小竪穴式石室が暴露され無惨な姿を露呈している。

問題点　本墳は，後円部に刳抜式の割竹形石棺を持ち，埋葬主体も別に２基持っている。また墳丘外表には，若干の円筒埴輪をめぐらせていたと推定され，何ら普通の古墳と変りない。特に刳抜式石棺は，讃岐のほとんどすべての各地域集団の首長墓の埋葬主体として採用されており，その時期も約半世紀に限定できる。そうしたなかで，

本墳のそれは，最も初期のものであり，被葬者の讃岐地方，特に西部地域で果した役割が注目される。

(ロ)No. 6 ～No. 8　双方中円墳，前方後円墳で構成されるグループである。主として，高松南部の平野部に面している。本古墳群も，(イ)と同様石清尾地域における首長集団を構成するものである。時期も，前期前半～中頃に比定できるものであって，5世紀中葉～後半には下らないと思われる。

No. 6　小塚

立　　地　石船塚の後円部から南へ若干下った姫塚に至る中間地点で，石船塚とほぼ同じ高さの所に立地する。海に対してというよりは，平野部に対して後円部を向けている。

墳　　丘　前方後円墳，積石塚

全長約17m，後円部径約10m，高さ約1m，前方部長約7m，巾5m，高さ約0.5mである。

後円部は2段，前方部は3段築成で，前方部は岩盤を利用している。主軸はほぼ南北を取り，前方部を北すなわち石船塚の方向に向ける。外表の土器等に関しては不明。

内部構造　不明。

現　　状　尾根道が，墳丘中央部を縦断しているため荒廃している。特に前方部は，その築造方法もあって，残存していない。

問 題 点　本墳も，小規模ながらも前方後円墳であり，一応何らかの形で首長系列に属すると考えられる。特に，立地からは，鏡塚―北大塚―石船塚の系列か，猫塚―姫塚の系列かは速断できないが，ここでは猫塚のグループに含めた。

No. 7　姫塚（挿図第14図）

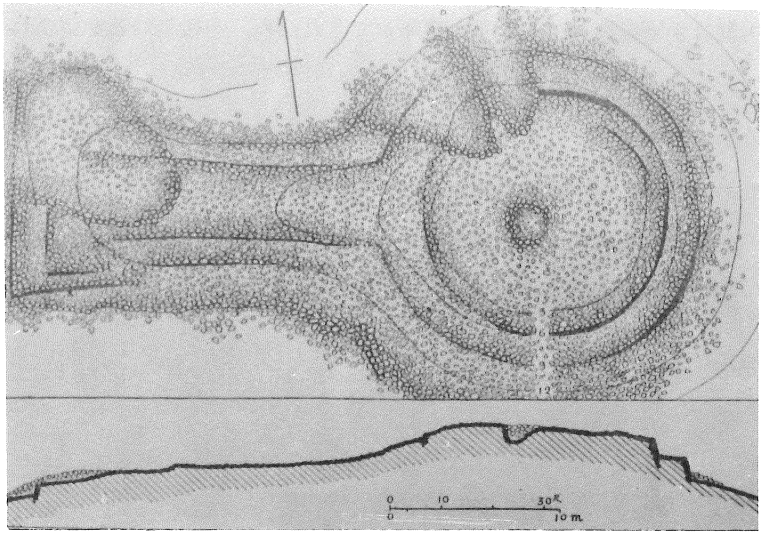
立　　地　摺鉢谷の東南隅標高 204mに立地する。西には猫塚が，北には小塚・石船塚が，南には鶴尾神社4号墳が存在する。ここも石船塚と同様3方向の分岐点にあたっている。海に対する眺望はよくないが，後円部を平野部に向けている。高松南部の平野部に対する眺望は良好である。

墳　　丘　前方後円墳　積石塚

全長約43m，後円部径約21m，高さ約 3.6m，前方部長約22m，幅約13.5m，高さ約2m，くびれ部巾約8mである。

主軸はほぼ東西を取り，前方部を西側に，すなわち猫塚の方向に向ける。

地盤が前方部にいくにしたがって下降しているため，墳形維持に相当の苦心を払っている。すなわち，後円部は2段築成であるが，その2段目が前方部の最上段に



挿図第14図　姫塚墳丘実測図

あたる。しかしそれだけでは墳形の維持ができないため，２段造りそえて計３段築成となっている。したがって，平面形としては，先の北大塚と同様先端部が左右両側に張り出した形となっている。往時は，石垣状の基壇を積み重ねた形を呈して，現状とはかなり趣を異にしていたらしい。

なお，墳丘外表には，石船塚と同様，円筒埴輪と土師器の存在が確認されている。

内部構造　後円部のほぼ中央に大きなくぼみがあり，河原石が散乱している。おそらく竪穴式石室が存在したと思われる。

遺　　物　鏡，刀剣，土器等が出土したとの伝承がある。特にこの鏡は，「伝世鏡」論の一つの根拠となった舶載の獣帯方格規矩四神鏡であると言われているものであるが，実は山麓の老人ホーム付近の古墳から出土したものらしい。

外表に存在した円筒埴輪のうち，実見したもののうち一例をあげれば次の通りである。外面は，タテ方向の「刷毛目」調整で，幅２～３㎜のかなりあらいものである。この「刷毛目」調整の後，かなり突出度の強いタガが取りつけられこのタガ部に対してヨコナデ調整が施されている。内面は指ナデ調整がなされているが，「刷毛目」が残存している部分もある。タガは，まだしっかりしており，端部は比較的シャープである。

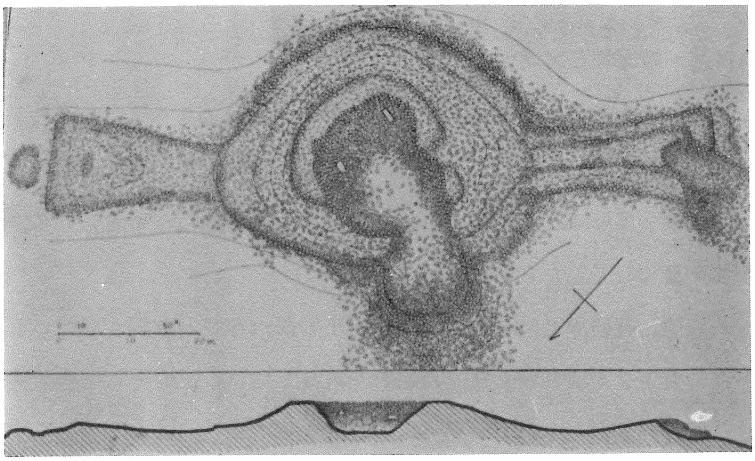
色調も暗褐色でよく焼きしまり，胎土も精選され，つくりはていねいである。土師器は，器台，壺等が報告されており，「刷毛目」調整を行なったもの，丹を塗布した破片も存在し，一般的に硬い良好な焼成である。

現　　状　ここも先の古墳と同様，尾根道が墳丘上を通っており，そのため変形を蒙っている。

また墳丘の石を登山者などが一ケ所に積み上げるため「現代版」ケルンができている。さらに前方部にすぐ近接して，新しい道路ができたため，今後の対策が望まれる。

問題点　本墳は，かなりの変形を受けているとはいえ，本来の姿を再現できる数少ない古墳であり，そのためにはこれ以上破壊されることは絶対避けなければならない。本墳は，このグループでは，猫塚に続く古墳と思われ，墳形からみれば北大塚と，円筒埴輪をもつことでは石船塚と共通するが，これら古墳相互の諸関係は明確にしがたい。

No.8　猫塚（挿図第15図）



挿図第15図　猫塚墳丘実測図

立　地　摺鉢谷の西南隅標高 200m，いわゆる御殿山山頂部に位置する。東はほぼ同じレベルで姫塚に至り北もほぼ同じ高さが若干続いていわゆる標高 214.4m の石清尾山頂に至る。亀命山山頂の西は急傾斜をなして，　鶴市から西春日に至る切り通しに達する。立地的には石船塚，姫塚と共通する。海に対する眺望はあまりよくないが，若干石清尾山塊の西側を通して香西方面の海が望める。

墳　丘　双方中円墳　積石塚

全長約96m，中円部径約44m，高さ約 5 m，北東側の突出部長約24.5m，前端部巾約14m，高さ約 1.8m，くびれ部巾約 8 m，南西側突出部長約27.5m，幅約15m，高さ約 2.4m，くびれ部幅約 9 m である。

主軸を北東方向に向けている。地盤が南西方向に下がっているため，南西側の突出部は反対側と比べて若干積石を多く行なっている。中円部と南西突出部は 2 段，北東突出部は 1 段の段築が認められる。なお北東突出部の先端より 1.5m 離れて，

径約 4.5m，高さ 0.8mほどの積石がある。これは，北大塚古墳とその前面に存する方墳との関係を想起させるものがある。

墳丘外表には，京大報告によれば円筒埴輪が存在したと言われるが，確認できていない。

内部構造　中円部に複数の竪穴式石室が存在する。両突出部には石室の存在は確認されていない。墳丘中央部付近に大きな竪穴式石室が，またそれを取りまくように複数の小竪穴式石室が存在したと推定されている。その正確な数については現在は確認できないが，石室総数5基の場合と9基の場合との可能性が大であり，今後の調査が期待される。京大報告では中円部に2基の竪穴式石室が確認されているが，現在露出しているものはそのうちでも北側のものらしい。露出しているものの崩壊が激しく，詳細は明らかでないが，石室床面付近で長さ約3.24m，幅1.18～1.10mをはかり，高さ1.73m以上である。側壁は床面より 0.5m位までは 0.2m四方の角ばった安山岩を3段積みにし，それ以上は板状安山岩を14～15段程度持送って小口積みにしている。石室の隅は，床面付近から 0.5m位までは直角に近いが，それ以上は構築の技法にいわゆる「三角持送り」的なものを採用しているため，隅丸となっている。取りたてて天井石というものは存在しなかったらしい。なお床面は盗掘を受けて徹底的に破壊されているため明らかにしえないが，赤色顔料を含んだ粘土質の土を一面に敷いていたらしい。河原石などの存在は確認できない。また石室内面の床面から 0.5m位までは，赤色顔料の塗布が顕著である。

遺　物　中央石室から出土した遺物は，次の通りである。

鏡5面（舶載の長宜子孫内行花文鏡・内行花文精白鏡・三角縁獣帯鏡・三角縁四獣鏡各1面・仿製鏡と考えられる三角縁三神三獣々帯鏡1面），碧玉製石釧1個，小銅剣（古墳出土例としては類例の少ないもの，鉄剣の青銅化と考えられている。）20口内外，筒形銅器3個，銅鏃（柳葉形）9個，鉄鏃4個，鉄斧1個，刀1口，剣4口，のみ1個，ヤリガンナ1個，土師器壺2個等である。

本古墳の築造年代の決め手となる土師器は，高さ33.5cm，胴部最大径約29cm，口縁部径約22.5cmの丸底壺である。色は茶褐色を呈し，厚さ7～10mmの比較的薄手である。外面の胴部上半部はタテ方向の「刷毛目」調整がなされ，下半部はタタキ調整の後タテ方向の「刷毛目」調整がなされている。また口縁部は横ナデ調整がなされている。口縁部と胴部は別々に作って接合したことが，内面に明瞭に表われている。さらに丸底の底部のやや一方に片寄って焼成前に穿孔された円孔が存在する。口縁部は，二重口縁ではない。

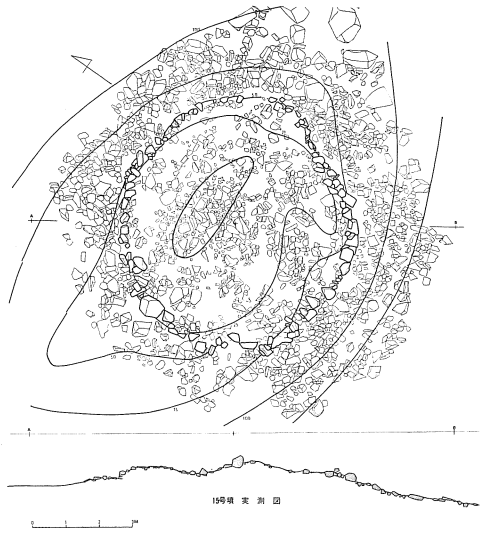
東瀬戸内地方で最古の土師器と考えられている「洒津式土器」より後出することは確実であろう。

現　　状　1910年（明43）の大盗掘によって中円部の墳形は大巾に変形したが，近年その石室がまた盗掘を受けて崩壊寸前にある。特に京都大学の調査によっても石室数，石室構造等が正確には把えられていない以上，今後の調査に期待されるわけである。貴重な資料は，当然保存されるべきものであり，早急な対策を構じる必要がある。また尾根道が，北東側の突出部の中程を横断しているため，積石が崩壊している。

問 題 点　墳形に関しては，鏡塚と同様全国的にみても類例の極めて少ないものである。また，内部主体に関しても，中央の大きな竪穴式石室を中心に複数の小竪穴式石室が存在していることから，いまだ弥生時代の伝統を受けついでいると考えられる。こうした点から在地における古墳出現の意味を探る重要な手がかりとなる。さらに副葬されていた土師器の型式からいっても，本墳は，石清尾における最古の古墳の一つとしてよい。それが，本古墳群中最大の規模を有する事実も問わなければならない。さらに，果してこの猫塚の墳形が従来言われてきたように双方中円墳かどうかも検討を要しょう。

(ハ)No.28～No.30　石清尾山の山頂から東に派生する尾根上にあり，海に対する眺望は極めて良好である。積石塚としては，海に最も近い。現存するものは3基であるが，京大報告では石清尾山山頂部に積石塚が存在したことになっている。現在は，その痕跡すらうかがうことができないが，土師器片が散在している。これを含めることができるならば，4基の積石塚で構成されていたことになる。いずれも，等質的な小円墳である。内部主体は判明していないが横穴式石室ではない。現在，石清尾においては前方後円墳と横穴式石室墳との間に時間的に大きな空白期があり，おそらく，こうした形態をもつ古墳がこの空白期を埋めるものと思われる。

No.29　石清尾山15号墳（挿図第16図）



挿図第16図　摺鉢谷15号墳実測図

立　　地　石清尾山山頂部から東方に伸びる尾根上に立地（高松市教委1972）

墳　　丘　円墳　積石塚

直径約 7.0m，高さ約 1.4m である。墳丘基底部は，比較的大形の石を積みあげている。墳頂部には若干の土砂が介在している。外表の土器等に関しては不明。

内部構造　不明。

遺　　物　不明

現　　状　崩壊が激しく相当荒廃している。中央部には盗掘坑らしいものが存在する。また，周囲に安山岩の露頭があるため，墳域を確定しがたい。

問 題 点　石清尾においては，5世紀代～6世紀前半の古墳が，ほとんど判明していない。本墳はその時期に含まれる可能性が強く他のこの時期と思われる古墳がほとんど消滅している現在，貴重な存在と言える。

(ニ)　北大塚から石船塚に至る主脈上から南側の斜面にかって10基以上の小円墳積石塚が存在した。現在は確認できない。これらは開墾によって失なわれたと思われ，更に最近の道路建設によって徹底的に破壊され，もはや調査することもできなくなってしまった。この積石塚のうち，内容の判明しているものは，径10～12m，高さ1m程度の小円墳で，内部主体は竪穴式石室に箱式石棺を内蔵するものであった。竪穴式石室は，全長約 2.4m，幅約1.38m あり，長さに比して幅の広いことが注目される。内部には，全長約1.71m のいわゆる組合式箱式石棺が，石室主軸と平行して一基存在した。遺物が判明していないので時期を決定することは困難であるが，(ハ)の古墳群と同様に5世紀代～6世紀前半に比定できる可能性がある。他の古墳も同様な内容をもつものと推定される。

(ホ)No.9 ～No.10

猫塚から東方 200m 内外の斜面に存在。内部主体が判明するものは少ないが，横穴式石室を主体とするものと思われる。そのほか峰山塚と呼ばれた一群がかって存在した。3基ほど存在したと言われ，そのうちの一基から，人骨，勾玉，管玉，鉄鏃，大刀等が出土したことが伝えられている（岡田唯吉 1928）。これらの古墳をも含めれば，かつては4～5基は存在したと思われる。石清尾の他の横穴式石室墳と同様な内容を備えたものと理解してよいだろう。

No.10　摺鉢谷　1号墳

立　　地　猫塚と姫塚のほぼ中間部の南に面した斜面に存在する。平野部に面する。

墳　　丘　円墳

長径約7m，短径約6m，高さ約2m である。

内部構造　横穴式石室？

墳丘中央部に横穴式石室らしいものが露出している。露出している部分は，長さ約 3.5m 以上，幅 0.8m，深さ 0.4m 以上，主軸を南北にとり，傾斜の方向と一致する。

遺　　物　不明。

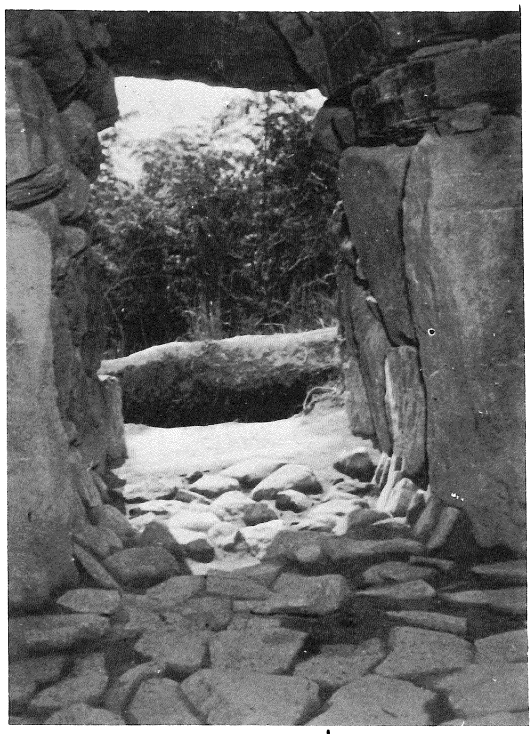
現　　状　天井石は３枚残存しているが，最北端のものが１枚取りのぞかれ，石室内には土砂が充満している。墳丘の盛土は，かなり流出しており，また最近建設された道路の路肩の部分に近接しているため，一部は道路の下になっている可能性もある。

問 題 点　摺鉢谷最南部の後期の古墳として残存している数少ない古墳である。

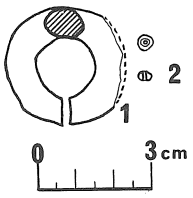
(ヘ)　No.11～No.18（注１）

摺鉢谷の北西部の南東に面するゆるやかな斜面一帯に分布する横穴式石室の群集墳である。現存するものは８基であるが，かっては10基以上存在したことが伝えられている。本古墳群の主要な古墳には，床面清掃と石室実測が行なわれたものがある。これらの調査結果によれば，およそ３群に分類でき，そのいずれもが６世紀後半～７世紀初頭に造られたものと考えられる。各支群，各古墳間には微妙な差異が存在するが，決定的な差異は存在しない。むしろ等質的な古墳群として把握できる

No.11　摺鉢谷２号墳　（挿図第17図・18図）



挿図第17図　摺鉢谷２号墳横穴式石室（玄室より望む）



挿図第18図 摺鉢谷２号墳出土遺物実測図（縮尺1/2）

立　　地　摺鉢谷の北西部の東に面した斜面にある。

墳　　丘　円墳，径約９ｍ，高さ約２ｍ，盛土は黄褐色小角礫混りの土であって，この山の各地に存在するものである。

周溝，外表施設等に関しては不明。

内部構造　横穴式石室，全長 657cm以上の両袖式石室であって，南東に向って開口している。玄室内部は，安山岩による床張りがあり，若干の胴張を示す。奥壁は１枚石を使用し，側壁は基底部に比較的大形の横長の石を据え，ゆるやかな持送りをみせながら天井石に達する。

遺　　物　古くから開口し，牛小屋などに利用されていたため遺物に関しては不明な点が多いが，床面清掃により玄室内から次の遺物が検出された（高松市教委　1971）。

須恵器〔(1)　坏身完形品，(2)　壺形土器口縁部破片（自然釉付着），(3)壺形土器胴部破片　(4)坏蓋破片　(5)台付壺　(6)高杯破片　(7)壺形土器胴部破片　(8)破片〕

①金鐶１個，長径 3.1cm

②ガラス小玉１個，直径約４mm

濃青紫色を呈する。

現　　状　現在，宅地の一部となっており，盛土も流出して天井石が露出している。また羨道部先端も破壊されて開口している。

問 題 点　本墳は，石清尾の積石塚と相違して墳丘の構成物は普通の土であり，時代的にも後出のものである。築造時期は，石室形態から考えて６世紀後半のものである。本来の副葬品がいかなるものであったかは不明であるが，残存していた遺物から推察すれば，この時期の横穴式石室墳として極めて一般的な姿を示している。

No.12　摺鉢谷３号墳（挿図第７図）

立　　地　２号墳の東方約10ｍ，立地的には２号墳と同様である。

墳　　丘　円墳，径約10ｍ，高さ約 2.5ｍの墳丘を持つ。周溝，外表土器等に関しては不明。

内部主体　横穴式石室，石室全長 597cm以上の両袖式石室であって，南東に向って開口する。石室は若干胴張を示し，床面には安山岩の割り石が敷かれている。石室の構築方法，規模とも石清尾山２号墳と類似する。

遺　　物　本墳も古くから開口していたため，遺物は本来の姿をとどめてはいなかった。床面清掃により，玄室内部，羨道部，前庭部の３ヶ所から検出された。玄室内部の遺物は，特に奥壁付近に集中していた（高松市教委1971）。

Ａ－瓶，甕（土師器），Ｂ－平瓶（須恵器），Ｃ－堤瓶，坏蓋・身(2)，大形壺（須恵器），Ｄ－大形壺（土師器），Ｅ－（土師器）

(1) 短頸壺 (2) 短頸壺 (3) 提瓶 (4) 鉄 (5) 鉄製品 (6) 鉄 (7) 刀子 (8) 鉄製品 (9) 鉄製品 (10) 鉄製品 (11) 小玉 (12) 小玉 (13) 小玉 (14) 小玉 (15) 金環 (16) 金環 (17) 土釜 (18) 土釜 (19) Aブロック (21) 鉄製品 (22) 鉄製品 (23) ヤリガンナ (24) 提瓶 (これらの番号は遺物分布図の番号と一致する)

①(16)—金環 長径 2.0m 短径18 1.85cm

②(15)—金環 長径3.15cm 短径2.85cm

③(11)—ガラス小玉

④(12)—ガラス小玉

⑤(13)—ガラス小玉

⑥(14)—ガラス小玉

⑦(B)—平瓶，口縁部は，漏斗状を示す。体部上面の中心よりはずれて接合している。器形は丸味を持っている。体部上面には小円形の粘土粘が貼付され，口縁部と共に「櫛描き列点文」をめぐらす。焼成はあまりよくない。

⑧(4)—鉄鏃 平根

⑨(6)—鉄鏃 平根

⑩(5)—鉄製品 湾曲する。木質部残存

⑪(8)—鉄製品 木質部残存せず

⑫(9)—鉄製品 木質部残存

⑬(10)—鉄製品 木質部残存 11・12と形態的に類似。鉄釘の可能性あり。

⑭(22)—鉄製品 タテ方向の木目を持つ木質部残存，鉄鏃の茎部か。

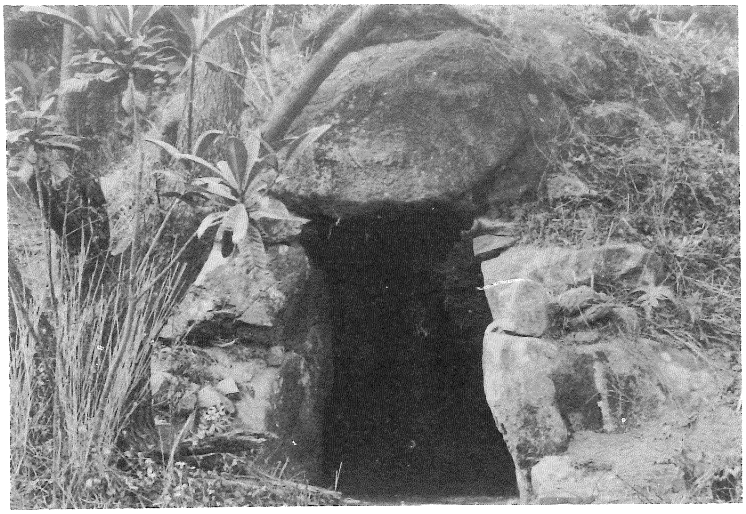
⑮(23)—鏃？ 刃部は失なっている。

⑯(7)— 刃子 現存長 5.7cm 推定刃部巾 1.3cm。

現　状　墳丘の土はかなり流失し，天井石が露出している。石室は羨道部先端が破壊されて開口している。墳丘半分を畑の境界につくられた石塁が横切っているため相当な変形を受けている。

問題点　本墳は，2号墳とともに一つのグループをなしているが，共に類似する点が注目される。また前庭部が調査された唯一の遺跡であり，当時の追葬，埋葬観念等を追究できる可能性を持っている。本墳も，築造時期は6世紀後半と推定されるが，須恵器の型式からは7世紀に入ってもその機能を有していたことが理解される。

No.13　摺鉢谷４号墳（挿図第19図）



挿図第19図　摺鉢谷４号墳横穴式石室（正面より望む）

立　　地　先の石清尾２・３号墳より北東に約 120ｍ，東面する斜面につくられている。

墳　　丘　円墳，墳丘は径約８ｍ，高さ約３ｍである。

内部主体　横穴式石室，石室の全長約 700ｍ以上，玄室長約 500cm，奥壁幅 197cm，中央部幅 237cm，高さ 260cm，玄門幅 111cmあり，羨道長約 200cm以上，幅 130cm，高さ 170cmの両袖形石室である。玄室にはいわゆる胴張りが存在する。石室は南東に開口している。石室構築方法は，先の２・３号墳と同様，奥壁は１枚石を使用し，側壁基底部には大形の横長の安山岩を用いている。そして，５～６段積みであり，持送りはきわめてゆるやかである。また天井石の長軸と石室主軸方向が一致し，普通の天井石架設方法とは異なっている。石室内の一部根石に円形の刻線が見られるが刻まれた時期は明らかにしえない（高松市教委1972）。

遺　　物　祭壇として利用されていたため床面が掘り下げられ遺物はほとんど失なわれていた。床面清掃により，須恵器片，土師器片，堤瓶１が検出された。

現　　状　大正時代に上方にある５号墳と共に稲荷信仰に利用されたため，奥壁は取り除かれ，床面にはコンクリートが敷かれ，側壁にはコンクリートの目ばりが施こされていた。また天井石も露出し，羨道部先端は破壊されている。

問 題 点　本墳は，現在判明する限りで，摺鉢谷古墳群の横穴式石室としては，最大規模を有している。また石室が胴張を有する点で注目される。本墳は石清尾５号墳と共に一グループを形成するものと思われる。築造時期は石室形態から判断して，６世紀後半～末年に比定できよう。

No.14　摺鉢谷５号墳（挿図第20図）

挿図第20図　摺鉢谷５号墳横穴式石室（正面より望む）

立　　地　４号墳の西方約10ｍに存在し，立地的には４号墳と同じ（高松市教委1971）。

墳　　丘　円墳，墳丘の直径約８ｍ，高さ３ｍである。外表施設等は不明。

内部構造　横穴式石室，石室全長約 485cm以上，玄室長 215cm，幅約 197cm，高さ約230cm，羨道部長 270cm以上，幅 140ｍ，高さ 170cmである。石室は南東方向に開口する。奥壁は安山岩割石を積み重ね，側壁も比較的小形の割石を５～７段程度持送り気味に積み上げている両袖式石室である。玄室幅と長さにあまり差がなく，高さも高く，石清尾の他の横穴式石室とその石室形態の傾向を異にする。

遺　　物　若干の遺物が出土したことが伝えられているが，詳細は不明。

現　　状　盛土は若干残存し，天井石は露出はしていないが，４号墳とともに稲荷の祭壇となっていたため天井部を除く石室内面にコンクリートが塗り込められている。また羨道部は先端が破壊されて開口している。

問 題 点　出土遺物は不明であるが，石室形態が他の古墳と若干相違しており，時期的には朔りうる可能性を有する。

その他，この附近より須恵質陶棺が発見され，その近くから勾玉２，管玉２，斧２，刀身２，坩２，堤瓶１，「偏口壺」１，土師器高杯１，小形内行花紋鏡１面等発見されたことが報ぜられている（長町彰1912）。

No.15　摺鉢谷６号墳（高松市教委1971）

立　　地　４・５号墳の北方約30ｍ，東面した緩やかな斜面に立地する。

墳　　丘　円墳，墳丘直径約６ｍ，高さ約２ｍである。

内部構造　横穴式石室，建物のため計測は困難であるが，推定玄室長約 310cm，幅 146cmであ

る。石室は南東方向に開口する。片袖は残存しているが，建物のため片袖式かどうかは判明できない。石室構築方法は２・３号墳と同じ。

遺　　物　不明。

現　　状　盛土はほとんど流出し，天井石が露出しかかっている。内部は不動信仰の祭壇となって，かなり加工されており，また石室を建物のなかに取り込んでいるため，詳細な検討ができない。

問 題 点　本墳は，後出する摺鉢谷７・８・21号墳と消滅した古墳を含むおよそ数基の古墳群の中核として存在している。

No.17　摺鉢谷７号墳（挿図第８図）

立　　地　６号墳のすぐ北に存在し，立地的には同じ。

墳　　丘　円墳，墳丘直径約６ｍ，高さ約１ｍである。盛土は，付近の土と同じ安山岩角礫混りの土である。

内部構造　横穴式石室，石室全長 414cm以上，奥壁幅 107cm，中央部幅 121cm，残存奥壁高さ 130cmである。

南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。床面には，安山岩割石が敷かれている。奥壁は一枚石を使用している。側壁は横長の安山岩を基底に据え，上部にいくに従って小形の石を積む。これまで説明してきた古墳に比べて，石材が小形化してきており，玄室と羨道の区別もほとんど無い。わずかに，奥壁より 375cmの根石が玄門の役目を果しているにすぎない。天井石は残存していなかったので，形状・規模を明らかにしえない（高松市教委1971）。

遺　　物　床面清掃によって開口部付近より(1)刀子，(2)台付坩（台），(3)台付坩（坩）が検出された。

１），（２・３）の台付坩は，器高13.2cm，口径 9.7cmをはかる。口縁はゆるく外反している。口縁部から胴部上半にかけては，カキ目調整が施こされている。また胴部最大径付近には，にぶい凹線を一条めぐらす。坏部は若干いびつで透しを持たない。焼成はよくない。

２），(1)先端部欠損している。かなり小形の製品である。

現　　状　開墾，水道工事等のため，墳丘は失なわれ，石室先端部も破壊され，わずかに奥壁と側壁の一部を残すのみである。

問 題 点　石室形態からみれば，摺鉢谷古墳群における最も新しい部類に入る横穴式石室と思われる。

No.18　摺鉢谷８号墳（挿図第８図）

立　　地　７号墳のすぐ東にあり，立地的に同じ（高松市教委1971）

墳　　丘　円墳。墳丘直径は約７ｍ，高さ約１ｍである。盛土は付近の地山の土を利用してわずかに盛っているにすぎない。

内部構造　横穴式石室，石室全長 272cm以上，幅 145cm，高さ 119cm以上である。石室は南東方向に開口し，主軸は傾斜方向と一致する。奥壁は一枚石を使用し，側壁の構築方法は７号墳と同じ。床面には安山岩の板石，割石を敷いている。袖の有無に関しては不明。

遺　　物　床面清掃により(1)土師器皿１，(2)（第８図の３）鉄製品１が出土した。

現　　状　開墾のため，墳丘は大半が削平され，わずかに石室の基底部を残すのみ。

問 題 点　６～８号墳のグループのなかでは，７号墳とともに新しい部類に入るものと思われる。

その他，この８号墳の北東部には，かつて横穴式石室が存在したらしい。今その痕跡らしきものがうかがえるが，詳細は不明である。

(ト)　No.20～No.22（注２）

摺鉢谷の北西部，石清尾山２号墳から北西へ約 300ｍ，亀命山の東斜面に立地している３基程の群集墳である。いずれも，横穴式石室を主体とする小円墳である。規模もほぼ同じであり，築造時期も大差ない等質的群集墳と考えられる。

No.20　石清尾山10号墳（挿図第21・30図）

挿図第21図　摺鉢谷10号墳遺物出土状況

立　　地　東向きの斜面に立地（高松市教委1972）

墳　　丘　円墳，墳丘直径約６ｍ，高さ約２ｍである。盛土は，地山の土を利用している。

内部構造　横穴式石室，石室全長 455cm以上，玄室長約 267cm，幅約 146cm，高さ 134cm，羨道長 188cm以上，幅 105cm，高さは不明である。

奥壁に一枚石を使用し，側壁は横長の安山岩を最基底部に据え，緩やかな持送りをみせながら３段程積み上げている。石室は南東方向に開口し，地形の傾斜方向に対して直交する片袖式石室である。床面には若干の敷石がある。

遺　　物　床面清掃の結果，特に奥壁付近に集中して検出された。図示できるものは，須恵器坏蓋1，高坏1，甕1，金環３，鉄製品７が出土した。（カッコ内の番号は遺物分布図と一致）

①⑯―須恵器蓋，口径13cm，高さ 4.8cm。灰白色で焼成普通。天井部回転ヘラ削り仕上げ。この範囲は狭く，全体に小形化の傾向にある。

②㉕須恵器甕口径19cm，暗灰色で焼成堅緻，広口の外反する長い口頸部を持ち，２条の凹線で３段にわけ，上段，中段には櫛描き波状文をめぐらす。

③⑬―須恵器高坏，高さ13cm，坏部口径11.5cm，脚部下端径10.9cm，坏部は浅く，口縁部は外反し口縁部と底部との境界に段がつく。文様は施されていない。脚部は細長い２段となっており透しはない。裾部は大きく広がり，脚端部は端面がのびて段をなす。暗灰色を示し，焼成は良。自然釉がかなり広範囲に付着する。

④㊸―金環　長径 2.8cm　短径 2.7cm

⑤㊺―金環　長径 3.0cm　短径 2.8cm

⑥㊹―金環　長径 3.1cm　短径 2.9cm

⑦㊻―鉄製品　タテ方向の木目を持っ木質部付着

⑧㊼―鉄製品　木質部残存

⑨㊽―鉄製品　木質部残存

⑩㊿―鉄製品　木質部残存せず

⑪(51)―鉄製品　木質部残存

⑫(52)―鉄製品　木質部残存

⑬(53)―鉄製品　タテ方向の木目を持つ木質部残存

現　　状　墳丘は大半を失い，石室も奥壁付近を残しては側壁の基部が残るにすぎない。

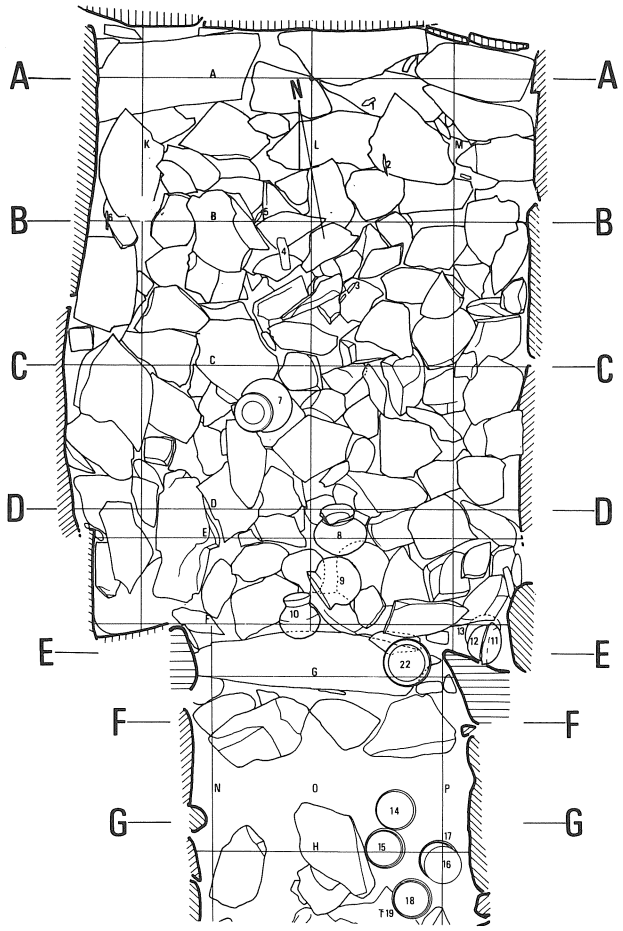
問題点　遺物からみれば，相当攪乱を受けている。したがって，須恵器の示す年代が築造時期を示すものかどうかは不明であるが，今は，これしか手がかりがない。讃岐地方の須恵器の編年体系が，確立していない現在，時期比定にはかなりの困難性を有す

る。この限界性を承知したうえで，あえて時期比定を試みるならば，陶邑編年におけるＴＫ209型式とＴＫ217型式の中間に比定できる（田辺昭三1966）。 絶対年代については，諸説があるが，今は７世紀初頭説を取っておきたい。従ってすくなくとも古墳としての機能を７世紀に入っても確実に有していたことになる。本墳は，摺鉢谷古墳群中，須恵器で築造年代～追葬期間を推定できる古墳としては，最も新しい部類に入る。

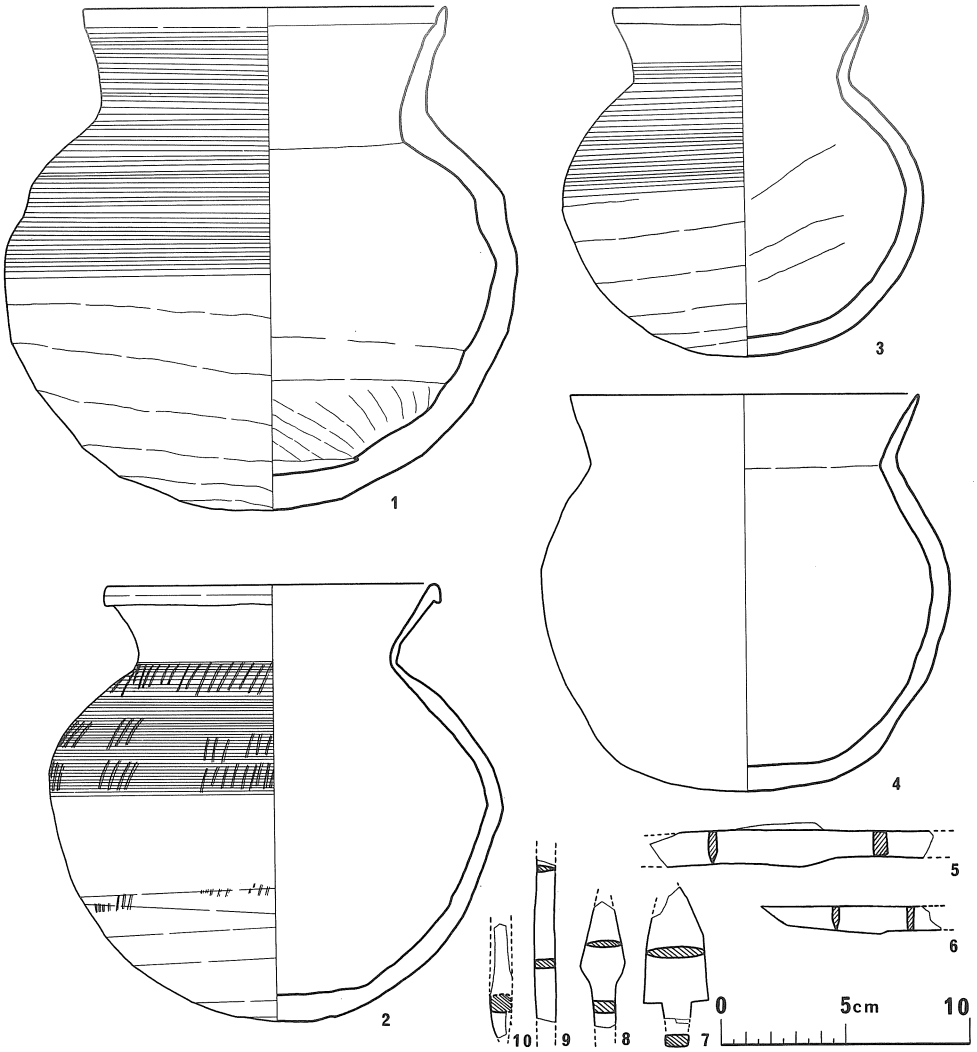
(チ) No.23～No.27（注３）

標高 232.8ｍの石清尾山山頂付近から南西方向に傾斜する緩やかな斜面に，現在５基ほど確認できる。内容の判明している古墳は１基しかないが，立地，墳丘等を考慮すれば，規模，内容ともそれほど大差ないと予想される。本古墳群もおそらく，今まで記述してきた後期古墳群と何ら変りがないと推定される。

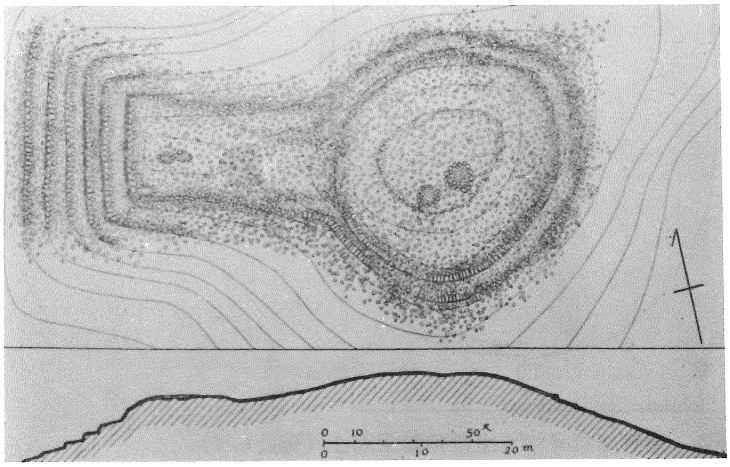
No.27　摺鉢谷13号墳　（挿図第22・23・25・26図）



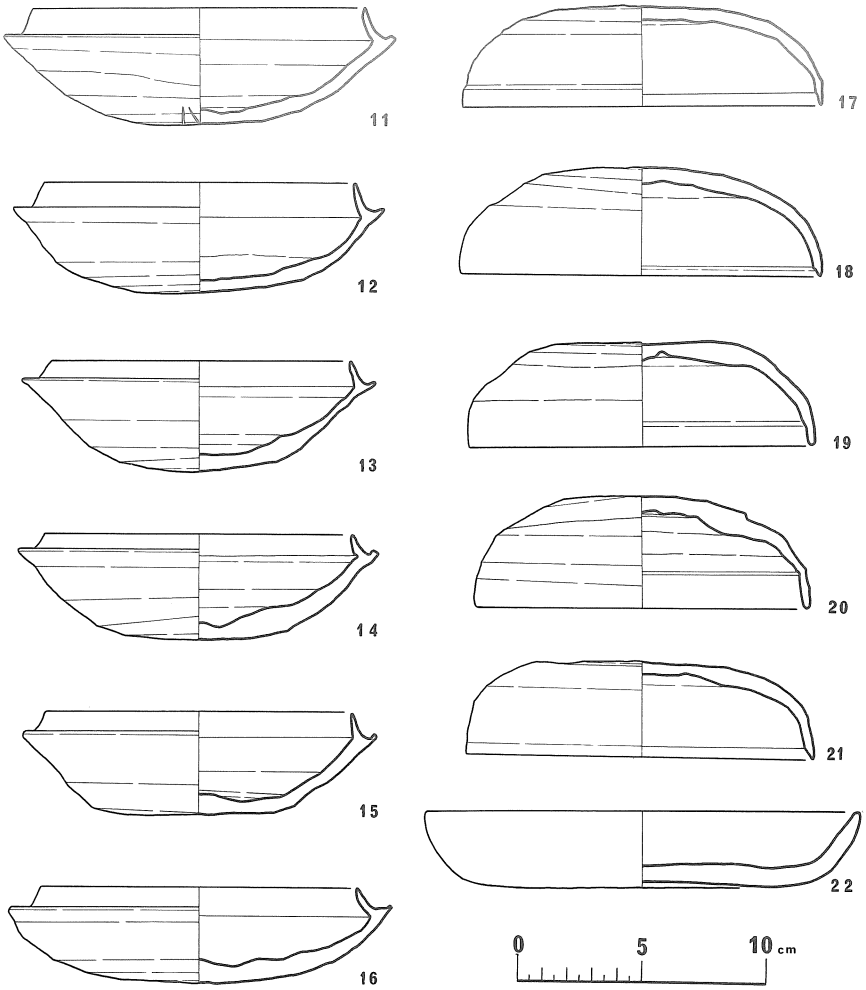
挿図第22図　摺鉢谷13号墳遺物分布図



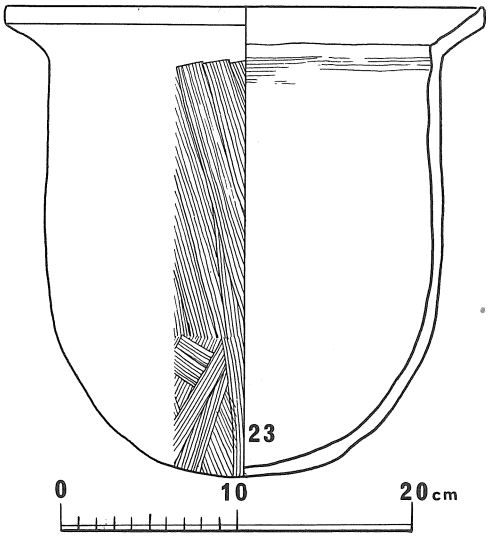
挿図第23図　摺鉢谷13号墳出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）



挿図第24図
稲荷山姫塚墳丘実測図



挿図第25図　摺鉢谷13号墳出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）



挿図第26図　摺鉢谷13号墳出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）

立　　地　石清尾山山頂部からゆるやかに南に向って伸びる舌状突端部に立地する。（高松市教委1972）

墳　　丘　円墳，墳丘直径は約９ｍ，高さ約 1.5ｍである。

内部構造　横穴式石室，石室全長 420cm以上，玄室長 210cm，玄室幅 150cm，高さ 118cm以上羨道幅90cm，高さ 130cm以上である。ほぼ南に開口する両袖式石室である。石室の構築方法は，奥壁には一枚石を使用しているが，この石だけでは，幅・高さとともに不足したらしく，両側と上部に相当な量の安山岩割石で補われている。

側壁は着通の構築方法である。石室形態は，先の摺鉢谷10号墳とは若干相違し，２・３号墳に類似する。

遺　　物　遺物は，床面清掃の結果，あまり攪乱を受けず残存していた。

須恵器―壺(7)(8)(10)，蓋(13)(14)(16)(19)(20)(12)，坏(11)(13)(15)(17)(18)(21)，土師器―壺(9)，皿(22)，甕( )，鉄製品―刀子(2)(4)，鉄鏃(1)(5)，その他(3)(6)。

①(7)―須恵器壺，口径14.7cm，高さ20cm，体部最大径20.7cm

暗灰色を呈し焼成は良好，口頸部はゆるく外反している。器壁はかなり厚い。体部にはかなりの凹凸がある。口頸部から体部上半にかけてカキ目調整が，下半部には回転ヘラ削り調整がかなり丁寧に施されている。

②(8)―須恵器壺，口径13.6cm，体部最大径18.1cm，器高17.5cm，暗灰色で焼成堅緻。口頸部はゆるく外反し，端部はまるくおさめられている。体部上半はカキ目調整が施されているが，処々に平行タタキ目文が残存している。また下半部は，かなり丁寧に回転ヘラ削り仕上げがなされているが，一部平行タタキ目文が残存している。また内面も，同心円タタキ目文が，わずかに残存している。

③(10)―須恵器壺，口径15.2cm，体部最大径14.6cm，器高14cm。

灰黄色の生焼けの須恵器である。体部上半から頸部にかけてはカキ目調整，底部は回転ヘラ削り仕上げがなされている。内面はナデ調整。

④(9)―土師器壺，口径14 cm，体部最大径16.6cm，器高15.9cm。

黄褐色で，焼成は悪い。器壁は凹凸が激しい。口頸部外面は横ナデ，体部外面はタテ方向の「刷毛目」調整が施されている。

⑤(2)―刀子，現存長 7.2cm，刃部長５cm，厚さ 0.4cmである。

⑥(4)―刀子？，両端を欠く，現存長11.3cm，刃部長不明，厚さ 0.4cm。

⑦(1)―鉄鏃　平根式に属する。

⑧(5)―鉄鏃　平根式有茎。

⑨(6)—鉄鏃？尖根の鉄鏃か。

⑩(3)—鉄製品，鉄釘か。

⑪(11)—坏，口径13.8cm，外径15.8cm，器高 4.6cm，立ち上がりは低くなり，内傾の度合が大きい。ヘラ削りも粗くなってきている。なお，底部に3本の沈線で構成されたヘラ記号が存在する。

⑫(13)—坏，口径12.6cm，外径14.9cm，器高 4.5cm，灰白色で焼成は不良，内面は赤味がかる。底部は回転ヘラ削り仕上げ。

⑬(15)—坏，口径12.1cm，外径14.4cm，器高 4.4cm，たちあがりは低く内傾度大，暗灰色で焼成堅緻。底部は回転ヘラ削り仕上げ。

⑭(17)—坏，口径12.7cm，外径14.6cm，器高 4.3cm，たちあがり低く内傾度大。暗灰色で焼成良好器壁が厚い。(16)とセット関係か。

⑮(18)—坏，口径12.1cm，外径14.3cm，器高 4.1cm，暗灰色であるが少し青味を帯びる。焼成は普通，底部回転ヘラ削り仕上げ。

⑯(21)—坏，口径13.1cm，外径15.7cm，器高 3.7cm，暗灰色で焼成良好。底部の回転ヘ削りの範囲は広い。(20)とセット関係か。

⑰(12)—蓋，口径13.9cm，器高 4.1cm，灰白色で焼成不良。天井部と口縁部をわける凹線は存在しない。天井部は回転ヘラ削り仕上げ。(11)とセット関係か。

⑱(13)—蓋，口径14.6cm，器高 4.2cm，灰白色で焼成不良。天井部回転ヘラ削り仕上げ。

⑲(16)—蓋，口径14.0cm，器高 4,2cm，暗灰色で焼成良，天井部は回転ヘラ削り。

⑳(19)—蓋，口径13.4cm，器高 4.6cm，暗灰色で焼成堅緻，天井部は丁寧な回転ヘラ削り仕上げ。(18)とセット関係。

㉑(20)—蓋，口径14.2cm，器高 3.8cm。暗灰色，少し赤味を帯びる。焼成はやや不良。底部の回転ヘラ削りの範囲はかなり広い。(21)とセット関係。

㉒(22)—土師器，皿，口径17.9cm，器高 3.1cm，赤褐色で胎土はかなりの石英粒を含む。使用されたためか表面は黒褐色を呈する。内外面ともナデ仕上げ。

㉓ —土師器甕，口径27.4cm，器高26.6cm，色調は淡い赤褐色で，胎土に砂粒を多量に含む。口縁は短く外反し，胴部の張りが口径より小さく直立気味である。外面上半部は，「刷毛目」を縦方向に，下半部は横方向～斜方向につける。内面はナデ仕上げである。底部は丸底であって，使用されたためか外面～口縁内面付近には，黒色有機物の付着が認められる。

現　状　境界にあたるため，石室の石が抜き取られている。石清尾の横穴式石室では保存の

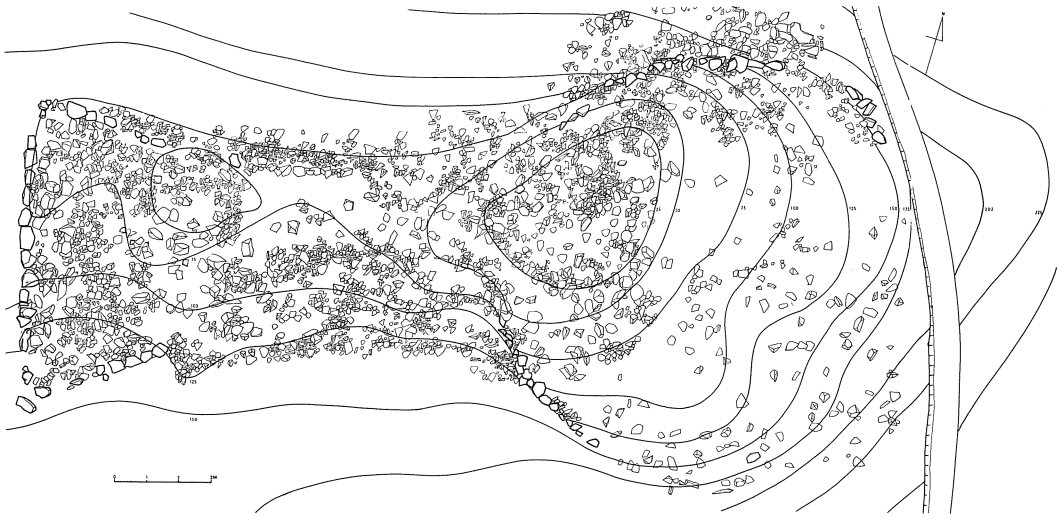
良い方。

問 題 点　本墳は，須恵器からその築造年代を推定できる数少ない古墳の一つである。須恵器のうち，玄室内部と羨道部のものとには若干の差がありそうである。しかし坏・蓋の型式から言えば同一型式に属すると思われる。全体としては，陶邑のＴＫ 209（田辺1966）に比定でき，およその年代を６世紀末年～７世紀初頭頃に求められよう。先の10号墳よりは若干古い。

その他，摺鉢谷古墳群にはNo.19とNo.31の古墳が存在する。両者とも，現在は一見孤立した感がある。

No.19　摺鉢谷９号墳（挿図第27図）

挿図第27　摺鉢谷９号墳実測図



立　　地　摺鉢谷が馬蹄形にめぐる北西部の最突端に立地する。東部はすぐ急傾斜をなし谷を隔てて北大塚と相対する。後円部を谷間に向けている。谷間からは，海を望むことができる（高松市教委1972）。

墳　　丘　前方後円墳，積石塚

全長約27.4ｍ，後円部径約13.1ｍ，高さ約 1.2ｍ，前方部長14.3ｍ，幅約10ｍ，高さ約0.95ｍである。主軸をほぼ東西に取り，前方部を西に向ける。墳丘は最基底部に長さ40～50cmの比較的大形の安山岩を据え，墳域を確定している。後円部は２段，前方部は１段築造であったと思われ，後円部頂上付近には若干の土砂が介在している。また後円部の形態は完全な正円でなく，多角形的様相を示す。本来は正円を意識していたが，用材，地形などに制約されたものと考えられる。前方部はくびれ部から次第に開いていく形態でなく，途中で角度を換えて開く傾向にある。今後の検討をまちたい。なお墳丘外表には，土師器片が散在している。

内部構造　不明。

遺　　物　不明，外表に散在する土師器は，細かな破片ばかりで器形を識別することができない。破片には，外面を「刷毛目」調整，内面をそれに直交する方向にヘラ削りされたものが存在する。壺形土器の破片かもしれない。

現　　状　前方部，後円部ともに相当変形を蒙っている。かつては畑の境界の石塁が後円部の一部を横切っていたこともあり，さらには墓石も存在した。また，後円部の一部を尾根道が横断しているため削られている。

問 題 点　本墳は，他の石清尾の主要な積石塚とは，立地的に孤立している。積石塚のなかでは小形に属するとはいえ，前方後円墳であり，形態から言っても前期でも前半の時期に比定できる可能性がある。

No.31　摺鉢谷23号墳

立　　地　摺鉢谷の入口の山麓の小台地に立地する。

墳　　丘　円墳，積石塚，崩壊激しく判明しない。

内部構造　竪穴式石室，かつて長さ 180㎝弱，幅45㎝，高さ30㎝程の竪穴式石室が存在した。両短側壁に一板石を使用し，側壁の一部にも使用している。したがって構造的には，箱式石棺と共通するものがある。

遺　　物　不明。

現　　状　付近には自然の安山岩露頭が広く散布しているため，どれに当たるか判明仕難い。推定されるものは，崩壊が著しい。

問 題 点　本墳は，石室構造からは，石船塚の後円部にある小竪穴式石室に類似する。

B　峰山墓地古墳群　(No.32)

摺鉢谷から山裾に流れ出た溪流の北側斜面に存在する。石清尾山山麓の東側斜面にあたる。現在の老人ホーム付近には，かって，小円墳が数基ほど存在した。現在存在するものは，一基にすぎない。他の古墳がいかなる内容を備えていたかは明らかにしえないが，普通の盛土墳であったことは確実である。現存する古墳は，横穴式石室墳であり，石清尾の他の例を参考にすれば，消滅した古墳も横穴式石室墳であったと推定できよう。ただ，「伝世鏡論」の一根拠となった「方格規矩四神鏡」が，この老人ホーム付近から出土したと言われている(小林行雄 1955)。この鏡が横穴式石室墳から出土した可能性もある。古墳出土の鏡とすれば，これらのごく一般的な古墳と内容を異にする古墳が存在したことになる。しかし今は，明らかにすることができない。この古墳群の大部分が，後期の群集墳と考えることができるならば，その盛行時期はおそらく，この石清尾地域の後期群集墳と規を一にしていたと推定される。

No.32　峰山墓地内１号墳

立　　地　南東に面した傾斜地

墳　　丘　円墳，径８ｍ，高さ２ｍ。墳丘の土は付近の地山の土と同じ。

内部構造　横穴式石室，石室全長300㎝以上，玄室巾157㎝，高さ130㎝以上，石室は南東に開口している。奥壁も基底部に若干大形の石を据え，ほとんど持送りをせずに積む。石が他の古墳と比べて小形化の傾向にある。現状では，無袖式と考えられるが，先端が破壊されているため断定はできない。

遺　　物　不明

現　　状　墓地内にあり，盛土は流出し，奥壁付近，石室先端が破壊されている。

問 題 点　遺物が判明していないので，築造時期は不明である。石室形態からは，ただ後期も終り頃の所産としか言えない。

C　西方寺古墳群　（No.33～35）

石清尾山（西宝寺山）から北に向って伸びた尾根が最も海に接近した山麓の北面する緩やかな傾斜地に存在する。現在するものは，３基程であるが，いずれも確信を持って古墳と断定しがたい。ただ，墳丘らしきものが存在し，石材も散乱しているので，一応古墳としておく。いずれもおよそ，径10ｍ弱の小円墳で，内部主体は不明である。本古墳群の時期比定は，現段階では不可能である。

D　木里神社古墳群（No.36）

石清尾山山頂より北西約300ｍの中腹台地にある。この付近の傾斜は極めて緩やかである。かっては，この付近には，かなりの数の古墳が存在したらしい。現存するものは，木里神社の社殿の下になっている横穴式石室墳だけである。その北方の山林中に，残骸らしきものが見受けられる程度である。本古墳群も，おそらく他の横穴式石室墳群と類以した内容を持っていたと推定される。

E　御殿神社古墳群（No.37）

石清尾山（いわゆる亀命山）の西側山麓の御殿神社付近に，かって横穴式石室墳が４基ほど存在した。現存するものは１基にすぎず，それにも家が建って横穴式石室であったとしか判明しない。さらには神社南西の御殿貯水地の池中に水没している横穴式石室墳があるらしい。しかし，水没しているため実見できない。したがって，今は，その内容を明らかにしえない。石清尾の他の例から考えれば，今まで述べてきた後期の横穴式石室墳とほぼ同様であろうと言えるのみである。

また，これらの古墳群の南方約400ｍ程の所に，３基ほど円墳が存在していたらしい。現在は果樹園ないし貯水池となっているため確認できなかった。おそらく消滅したと考えられる。

F　北山浦古墳群（No.38～39）

石清尾山（御殿山）の南側山麓の緩斜面に存在する。かっては，３基ほど分布していたらしいが，現存するものは１基のみである。横穴式石室の群集墳であり，石清尾の各地に見られるものと変わりない。

北山浦１号墳（No. 38）

立　　地　南面した傾斜地の小丘陵上

墳　　丘　円墳，径約10ｍ，高さ約2.5ｍ

内部構造　横穴式石室，全長約775㎝以上玄室約395㎝，幅約160㎝，高さ約180㎝，羨道長380㎝以上，幅105㎝の両袖式石室である。石室は，南東方向に開口している。奥壁・側壁とも基底部に横長の大形安山岩を据え，その上部は安山岩割石を５～６段程積みあげている。特送りは極めて緩やか。床面には，安山岩割石が敷かれている。床面平面形は若干の胴張を有する。

遺　　物　不明

現　　状　宅地内にあり，そのため墳丘は削平され，奥壁付近，羨道は破壊されている。

問 題 点　石室規模として石清尾では比較的大形の部類に入る。遺物が判明していないので時期比定は困難である。ただ石室形態から，石清尾における横穴式石室としては新しい要素を持っていると言えるのみである。

G　鶴尾神社古墳群（No.40～44）

姫塚から南東に向って高松南部の平野部に突出する尾根がある。今，その尾根上に，前方後円墳一基を含む約５基の積石塚群が存在する。群としては，猫塚一姫塚系列に入る可能性もあるが，今は一応独立するグループとして取り上げた。内容の判明している限りでは，内部主体は竪穴式石室のみであって，いわゆる「群集墳の盛行する時代」以前であることは確実である。立地的には，平野部をかなり意識している。おそらく，猫塚一姫塚系列の中にあって，若干後出的なものであろう。本古墳群の小円墳は，先の摺鉢谷古墳群の㈡の小円墳積石塚群と同様なものかもしれない。

立　　地　姫塚より南方に下る馬の背状の尾根が，途中でテラス状に延びる先端にある。標高約100 ｍ余り，眼下には旧香川東の形成する高松平野が一望の下に開け，遠く阿讃連山が望める。北方は石清尾山・稲荷山の鞍部から，瀬戸の海がわずかに展望できる。後円部を平野部に向け，平野部から巨大な姿を望めるように立地する。

墳　　丘　前方後円墳，積石塚，全長約47ｍ，後円部径東西20ｍ，南北約30ｍ以上，前方部長約17ｍ，前方部と後円部の高低差約１ｍ（後円部の方が高い）である。本墳は，京大報告では，土居の宮後丘上の石塚として紹介されているが，墳形に関しては円墳と理解されている。それは，前方部の積石が少ないこと，そして前方部中央部に巨

挿図第28図　鶴尾神社４号墳石室（No.43）

大な安山岩の自然露頭がそのまま放置されていることなどによって，前方部と後円部が別々の古墳と考えられていたからであろう。しかし，本墳は，墳丘測量の結果まぎれもなく前方後円墳であることが判明した。それは，積石の間に直径５～15cm程度の砂岩質の円礫及び土師器片が散布しており，これらの分布範囲は，前方後円墳と考えられる範囲と一致することからも理解される。墳丘基底部は，等高には巡らず，後円部南端では約5 mの高さがあるが，前方部に向って高くなっている。このため後円部は，下方より望めば巨大な姿を露呈する。前方部の前端は，底の巾１m程度の尾根に直交する溝によって墳丘外と区別されている。以上のように本墳は，積石の少なく長い前方部と，巨大な後円部とによって特徴づけられる。段築については不明。

内部構造　竪穴式石室

後円部中心より南に扁し，主軸にほぼ直交して，１基の竪穴式石室が露出している。早くより盗掘を受けていたらしく，現在，石室上部付近は全く残存しない。わずかに，東壁，南壁南東部が観察可能である。石室長約 4.5m，東端部幅 0.9m，西端部幅1.15m，高さ0.9m程度である。石室の構築方法は，東南隅で観察した限りでは，床面付近より上部に至るまで，３段程度の壁面の変化が見うけられる。床面より上部へ30cm余は，板状安山岩の小口面を利用し，面をきちんとそろえて整然と垂直に積み上げている。平面プランのコーナは，直角に近い，その上部は，板状安山岩の小口面は整然とはそろっておらず，雑然としてやや持送り気味に積みあげられている。石室コーナは，いわゆる隅丸であって，これが30cm程続く。その上部は，

板状安山岩を持送って小口積みにしている。また普通に見られる竪穴式石室の如く巨大な天井石が存在していたかどうかは，速断できないが，付近に天井石に相当する石が見あたらず，さらにはその急激な持送り技法を見る時，板状安山岩で閉じられた可能性が最も強い。なお床面の状況は観察できなかったが，最下段付近には，特に赤色顔料の塗布が顕著であった。こうした石室の構築方法は，猫塚のそれと極めて類似する。また，石室の位置関係から更に後円部の北側に，同様な竪穴式石室の存在が予想される。

遺　　物　外表に散在する土師器片が知られているだけである。小破片で，復原できるものはないが，壺，高杯等が確認できる。赤褐色を呈し，胎土には多量の雲母を含む。焼成は良好である。厚さ6～4㎜で，内面へら削りしたものがある。外面は指ナデに近い。赤色顔料を塗布するものもある。

現　　状　周囲は，安山岩の自然露頭が著しい。墳丘の積石は，崩壊が激しく本来の姿を留めていない箇所もある。後円部の石室は盗掘を受け無惨な姿を現わしている。

問 題 点　本古墳は，石清尾古墳群中最南端，最下部に存在する前方後円墳・積石塚である。京大報告以来，石清尾古墳群とは，稜線上をめぐる積石塚をさす代名詞となってしまった感がある。そして，その性格は，海上交通を意識した集団の，しかも積石を利用した特殊な集団の産物とされてきた，それは，その集団の性格を，在地勢力が発展したものでなく，異質な集団が造ったと考える根拠にもなってきた。しかし，本古墳を石清尾古墳群の一つに加えることにより，在地勢力の築造したものである可能性が更に強くなったと考えられる。しかし，本墳も，尾根の下方 200ｍ余の砕石場の拡張いかんでは消滅の可能性もある。他の積石塚がいずれも半ば公有地的な性格の土地に立地することを考えるならば，民有地に立地する本墳の保護が急がれる。

鶴尾神社5号墳（No. 44）

立　　地　平野部に突出する尾根の突端から約30ｍ程下った尾根の斜面に立地。

墳　　丘　円墳，積石塚，墳丘は長径約8ｍ，短径約6ｍ，高さ 1.5ｍ，崩壊が激しいが，段築はなかったらしい。

内部構造　竪穴式石室，墳丘中央部に，主軸をN－68°－Eに向けた，長さ 200㎝以上，幅 100㎝，深さ60㎝以上の竪穴式石室が露出している。天井石は不明，竪穴式石室の残存側壁は，小さい安山岩石塊が用いられており，あまり持送りが顕著でない。

現　　状　この付近一帯には，安山岩の自然露頭が広がっているため，墳域を確定することは困難である。また，墳丘中央部に大きな盗掘坑があり，竪穴式石室が露出している。

さらに，近くまで砕石作業が迫っており，工事の進行次第では，近々破壊される恐れもある。

問題点　小円墳積石塚で，内部主体が判明し，しかも残存している古墳は本墳しかない。そうした意味では，貴重な存在である。

H　奥の池古墳群（No.45～49）

姫塚の南東斜面，すなわち，現在の栗林トンネルの南にある奥の池の北西斜面に分布する。かつては，この付近の斜面一帯に，約20基程の古墳が存在した。現在確認できるものは，そのうち5基にすぎない。内容の判明するものは，すべて横穴式石室墳であって，残るものもそうらしい。したがって，本古墳群はいわゆる後期の群集墳と考えられる。時期は石室形態より判断するしかないが，摺鉢谷一帯に存在する古墳とそれほど大差ないと思われる。おそらく，6世紀後半～7世紀前半にかけて，この地域に古墳としての機能を果したものと考えられる。

奥の池2号墳（No. 46）

立　　地　山麓の南東に面する斜面に立地する。

墳　　丘　円墳。墳丘の直径約11m，高さ約 1.5m，盛土は付近の地山の土と同じ。

内部構造　横穴式石室。全長 650m以上，玄室長 450cm，幅 185cm，高さ 160cm以上，羨道長 200cm以上，幅 110cm，高さ95cm以上の両袖式石室である。ほぼ南（主軸方位N－12°－E）に開口し，主軸方向は等高線の方向と一致する。奥壁は安山岩の割石を積みあげ，側壁は最基底部に比較的大形の安山岩を据えてはいるが，他の古墳と比べれば小さい。緩やかな持送りをなして，天井部に到る。平面形は，若干の胴張を呈する。玄室天井石は4枚使用されている。

遺　　物　不明。

現　　状　周囲は果樹園となっている。そのため，墳丘の周囲は削られ，天井石は露出し，奥壁・天井石1枚を失い，羨道部先端も破壊されている。また石室内部の側壁もくずれを見せており，危険な状態である。現在は，物置として利用されている。

問題点　遺物が判明していないので，築造時期は明確にできないが，石室形態から見れば，おそらく6世紀後半～末年頃に比定できると思われる。

Ⅰ 稲荷山古墳群（No.50～55）

いわゆる石清尾山の東にある稲荷山の尾根上に存在する積石塚群である。前方後円墳一基を含む。これら個々の古墳の内容は全く判明していないが，おそらく先の摺鉢谷古墳群の(イ)，(ロ)の積石塚群と並ぶ石清尾地域における前期古墳時代の首長集団を構成する一系列と考えられる。

No.50　稲荷山３号墳

立　地　稲荷山と石船塚をつなぐ鞍部中間。現在の栗林トンネルの東側尾根上。海・平野共に眺望は良い。

墳　丘　円墳，積石塚，直径約９ｍ，高さ１ｍ。

内部構造　竪穴式石室

遺　物　かって，土師器が出土したと伝えられた（長町彰1920）。京大報告に図が載っている。それによれば，壺・高杯等が存在した。しかし，実見できないので詳細は不明。

現　状　採石されたとのことで，今はその跡を留めるにすぎない。

問題点　積石塚の形態を取る小円墳のうち，その出土土器から年代の推定できる貴重な古墳である。この土器の時期は，猫塚出土の土師器よりは後出するものと思われる。

No.52　稲荷山１号墳

立　地　稲荷山姫塚から標高200ｍの紫雲山に至るほぼ中間地点に位置する。屋根の鞍部に存在し，海に対する眺望はよくない。

墳　丘　円墳，積石塚，直径18ｍ，高さ２.５ｍ。石塊の移動が著しく，原形を留めていないので，墳形は確定できないが，今は円墳としておきたい。京大報告では前方後円墳としているが，「前方部」は現状では地山の露頭としか理解できない。現段階では前方後円墳とすることは困難である。今後の発掘調査によって確定すべきである。

内部構造　不　明

遺　物　不　明

現　状　尾根道が墳丘を横断しており，また盗掘を受けたらしく，石塊の移動が激しい。

問題点　本墳が前方後円墳か円墳かで本古墳群の理解の仕方が相違してくる。そうした意味では，今後十分な検討を要する。

No.54　稲荷山姫塚（挿図第24図）

立　地　栗林公園の借景紫雲山のほぼ中間地点，いわゆる稲荷山と室山の境界上に位置する。それは同時に栗林トンネル上部の鞍部より東に登った最高位であり，いわば３方向の分岐点にある。

墳　　丘　前方後円墳，積石塚，全長約58m，後円部径約27m，高さ約4m，前方部長約31m，幅約18m，高さ約3.5mである。地形に制約されているためか現在みるかぎりでは，後円部は完全な正円ではなく，北東方向に歪んだ形状を示す。また，地盤が西方，すなわち前方部に向かって傾斜しているため，後円部からみれば前方部は低く狭長である。また，墳形維持のため非常な努力を傾むけている。特に前方部先端は後円部が2段，前方部の途中までは2段築成であるのに比べて，少なくとも6段階段状に積みあげられている。こうした構築方法は，姫塚と類似する。

なお，外表部特に南側のくびれ部付近に土師器片が散在していたことが京大報告に記されている。

内部構造　後円部に竪穴式石室の痕跡らしきものが見られるが，詳細は不明。なお前方部にもかって主軸と平行して小竪穴式石室が存在していたと言われているが（笠井新也1933）確認できていない。

遺　　物　不　　明

現　　状　尾根道が後円部の一部を横切っているため墳丘が削られている。また前方部付近の段築が崩壊しかかっている。

問 題 点　本墳は，このグループ内においては現在判明する限りでは最も古いと思われる。しかも，前方後円墳という墳形を有しており，先の猫塚等と共に石清尾における首長集団を構成する，有力な集団の中核として存在している。また前方部先端の段築は今もその面影を留めており，今後とも絶対に保存されなければならない。

No.55　稲荷山北端古墳

立　　地　稲荷山の最北端の尾根上に位置し，かっての海に面している。

墳　　丘　円墳，積石塚，長径約28m，短径20m，高さ2.5m。墳形は石塊の移動が激しいため明らかでないが，現状は円形というより多角形的形状を示している。これは円墳の両側に小さな造り出しが付いたため，このような形態になったとも考えられるが決め手がない。こうした墳形が地形の制約によるものか，あるいは意識的に定められたものかについては今後の課題である。埴輪・外表の土器等については不明。

内部構造　不　　明

遺　　物　不　　明

現　　状　尾根道が墳丘を横切っている。また盗掘坑も存在し，段築も崩壊している。

問 題 点　この石清尾地域内にある円墳としては，最大規模を有している。その墳形とともに注目すべきものである。

なお，この古墳と稲荷山姫塚の間にも２，３の積石塚が存在したらしい。現状では確認できなかった。さらに栗林トンネル鞍部のNo.50古墳から西へ100ｍ程の尾根上に土師器片の集中的に分布する個所があり，かっては，ここにも積石塚が存在したらしい。

Ｊ野山古墳群（No.56～59）

本古墳群は，積石塚群と横穴式石室墳群とに大別できる。本来ならば，当然別個の古墳群として把握すべきであるが，記述の便宜上一括した。積石塚は，猫塚から西に急斜面を下った尾根鞍部西側に存在する。かっては，３基存在したが残存するもの１基のみである。内容の判明しているものは小円墳であって，内部主体は竪穴式石室である。遺物が判明していないので時期は明らかでないが，摺鉢谷古墳群の(ハ)，(ニ)等に類似するものと考えられる。

横穴式石室墳群は，この積石塚の南の小台地に存在する。かっては８基ほど存在していたらしいが，残存するものは３基である。石室の形態は，石清尾における一般的なものである。この古墳群も，内容的には，これまで紹介してきた石清尾における後期群集墳と同様なものとすることができる。

No.56　野山１号墳

立　地　東面した傾斜地の小丘陵上。

墳　丘　円墳，径約12ｍ，高さ約3.5ｍ，盛土は地山の土と同じ。外表施設は不明。

内部構造　横穴式石室，石室全長635cm以上，玄室長310cm，巾210cm，高さ200cm以上，羨道長325cm以上，羨道巾85cm，高さ105cm以上の片袖式（右袖－玄室から羨道部に向かって）石室である。奥壁は，一枚石が使用されているが，大きさが不足しているため両側に安山岩割り石をつめこんでいる。側壁は，横長の安山岩を基底部に据え，ほとんど持ち送りをせずに５段程積みあげている。玄室天井石は２枚，羨道部は残存天井石３枚を使用，石室は南に開口し，主軸（Ｎ－16°－Ｅ）は等高線方向と一致する。

遺　物　不　明

現　状　果樹園の中にあり，そのため墳丘は削平され，羨道部先端・奥壁付近が破壊されている。

問題点　遺物が判明していないので時期比定は困難であるが，石室形態から言って，石清尾における一般的な姿として捉えられる。

No.58　野山４号墳

立　地　石清尾山（御殿山）から浄願寺山に至る鞍部切り通しの西側尾根の傾斜地。

墳　丘　円墳，積石塚，長径７ｍ，短径５ｍ，高さ約1.2ｍである。

内部構造　竪穴式石室

遺　　物　墳丘外表に土器片が散在。厚さ1cm～0.6cmあり，外面はへら磨き，内面はへら削り～指整形が施され，赤褐色を呈する。焼成胎土ともに良好。大形の壺の一部であろうか。

現　　状　畑地化によって若干積石が削られている。また，中央部に大きな盗掘坑が存在する。

問 題 点　主要な前方後円墳・双方中円墳に続く時期の所産と思われる。なお，本墳から尾根東に30m程下った所に積石塚の痕跡らしきものがある。これがどうやら，京大報告で竪穴式石室が図示されている古墳に当たるらしい。

K浄願寺山古墳群（No.60～No.116）（挿図第29図）

主要な積石塚が分布する摺鉢谷をめぐる山塊の南に，標高239.67mの浄願寺山が存在する。浄願寺山は，北より標高208.1mの野山，標高239.67mの浄願寺山，標高166.9mの小山の三つの山塊よりなっている。このうち，古墳は主として中央部の標高239.67mの浄願寺山の山頂部の斜面一帯に分布するが，浄願寺山と小山とを結ぶ標高150m～160m程の尾根鞍部にも若干存在する。外表からの表面観察によれば，これらの古墳のほとんどは，径10m前後の小円墳であり，内部主体は横穴式石室である。特に浄願寺山山頂部付近に群集する古墳（No.61～No.109）は，判明する限りでは，すべて円墳であり横穴式石室を持っている。墳丘・石室・規模等には，若干の格差が認められるが，墳形上の差異は存在しない。遺物が全く判明していない現在，これら古墳相互間の質的差異を明らかにすることはできず，築造時期・追葬期間を限定することも極めて困難である。わずかに露出する横穴式石室の形態から，六世紀後半～七世紀前半にかけて，この山頂部に古墳としての機能を果たしていたと，漠然と推定する以外にない。この239.67m付近に存在する古墳は，およその数50基，それらは極めて近接して造られており，墳丘が累々と横たわっている。これらの古墳は群として一括して把握できるが，そのうちでも若干のグルーピングが可能である。しかし，現段階では，何も言えない。古墳の分布にも，何らかの規制がなされているかの如く馬蹄形にめぐり，中央に空地を残す。ともかくも，本古墳群は，平野部からの比高200m余の所に立地し，後期の群集墳の一般的在り方と傾向を異にする。石清尾山古墳群中でも，山麓の後期群集墳とは立地において際立った対照を見せている。しかし，その他の内容になれば，ほとんど同じである。このような高地に築かれた理由は，今後の究明課題である。

浄願寺山古墳群には，先に若干述べたように中央部山麓の山頂付近に分布する50基程の群集墳のほかに，これら古墳群の南部に若干の古墳が存在するが，その内容は明らかでない。

浄願寺山古墳群の特徴の一つに，そのまとまりの良さがあげられる。特に50数基の殆んどが

盗掘を受けているとはいえ，かたまって墳丘まで残存する古墳群は，香川県ではほとんど存在しない。こうした意味でも，貴重な存在と言わなければならない。

No.69　浄願寺山10号墳

立　　地　山頂平坦部の南面する緩やかな斜面。

墳　　丘　円墳，長径11m，短径8m，高さ2.7m。なお墳丘の周囲に空掘らしきものが見受けられる。

内部構造　横穴式石室，石室全長740cm以上，玄室長355cm，幅160cm，高さ160cm，羨道部巾100cm，高さ110cm以上の片袖式石室である。石室は，南方向（石室主軸N－16°－W）に開口している。奥壁は，1枚石を使用し，側壁には横長の安山岩を基底部に据え，その上段は，小形の割石をほとんど持ち造りせずに積みあげている。床面には，安山岩割石が敷かれている。

遺　　物　不　　明

現　　状　羨道部先端部が破壊され，石室内に土砂が若干入り込んでいるが，その他は保存が良い。

問 題 点　50基程の群集墳中の1基である。本墳は，保存度の最も良い古墳の一つである。石室形態からは，群集墳の盛行する時期の所産としか言えない。他の古墳も多少の差異は存在しようが，本墳と類似するものと推定される。

L　がめ塚古墳群（No.117）

浄願寺山山塊の最南端部に位置する。現在は，そのほとんどが国立学校の校地内にあり，消滅して確認できないが，小形の前方後円墳1基を含む数基の古墳が存在したらしい。前方後円墳以外の古墳は円墳であって，立地から考えれば，後期の横穴式石室墳であった可能性が強い。したがって，この時期にまでは下るとは考えられない前方後円墳との間には，大きな空白期が存在するわけである。この古墳群の内容については，明らかにしえない。

No.117　が め 塚

立　　地　浄願寺山山塊の最南端よりやや西。現在の香東川に面して標高52mの小丘陵がある。本墳は，かってこの地に存在した。

墳　　丘　前方後円墳，全長約25m，後円部径約15m，高さ2.5m，前方部の巾約9m，高さ1mの前方部のあまり発達しない前方後円墳であったらしい。外表の施設は不明であるが，葺石は存在しなかったらしい。前方部を南に向けている。

内部構造　不明。破壊された時石が全然見あたらなかったと伝えられており，あるいは粘土槨のようなものであったかもしれない。

遺　　物　不　　明

現　　状　かっては原形を留めて存在していたが，学校の給水塔建設用地となり，墳丘が削平されてしまった。現在，墳丘の基底部がわずかに残存している程度で，内容が把握されないまま破壊された。

問 題 点　石清尾古墳群中，最南端最下位の前方後円墳であり，唯一の盛土前方後円墳である。内容が判明していない現在，時期比定は困難である。

M　片山池古墳群（No.118）

浄願寺山の山頂部と標高166.9mの小山とが連なる鞍部東側の小さな谷間に存在する。その小谷間の北東に面した傾斜面に，かつて3～4基の古墳が存在したらしい。現在，かろうじて確認できる古墳は，1基にすぎない。この古墳も破壊の度合が著しいが，横穴式石室墳と推定される。他の古墳もおそらく同様な内容を持っていたと予想され，全体としては，この石清尾山塊の山麓に分布する後期の群集墳と変わりないと推定される。なお，この古墳群のすぐ東には坂田廃寺がかって存在した。

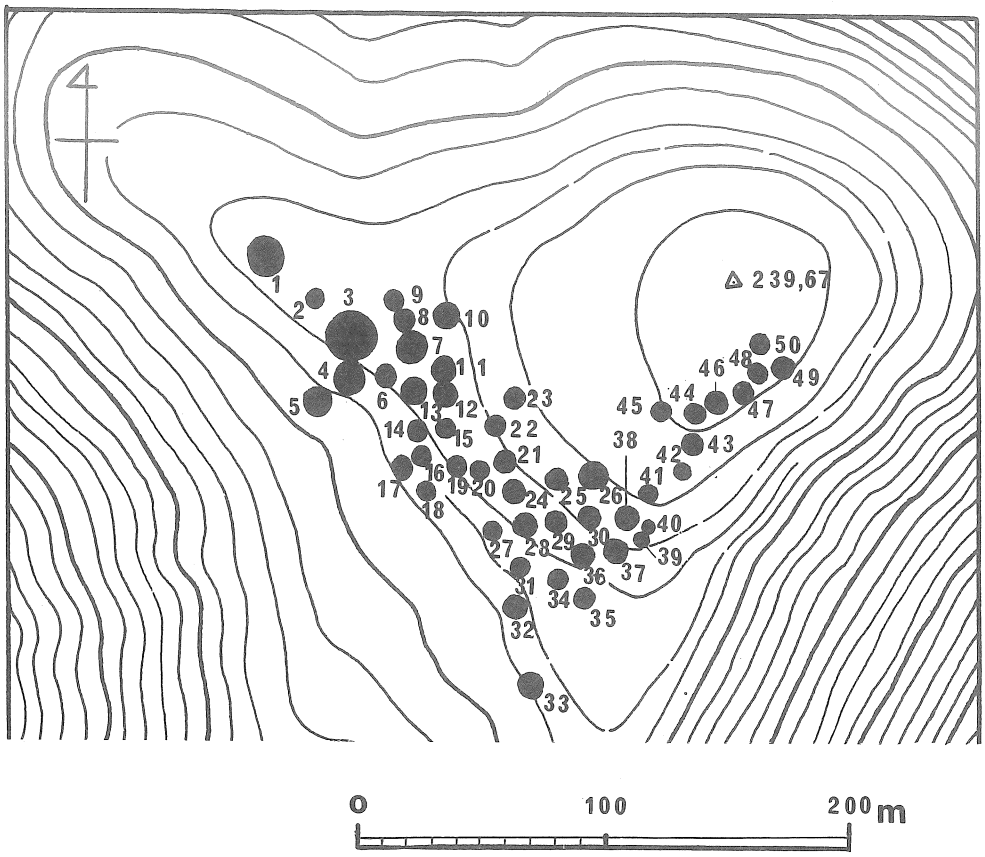
注

1．本古墳群中，No.11・12・14・17・18号墳は，床面清掃と石室実側がなされた。その調査結果は，高松市教育委員会から発表されている（高松市教委1971・1972）。それは，概報であって，本報告ではない。

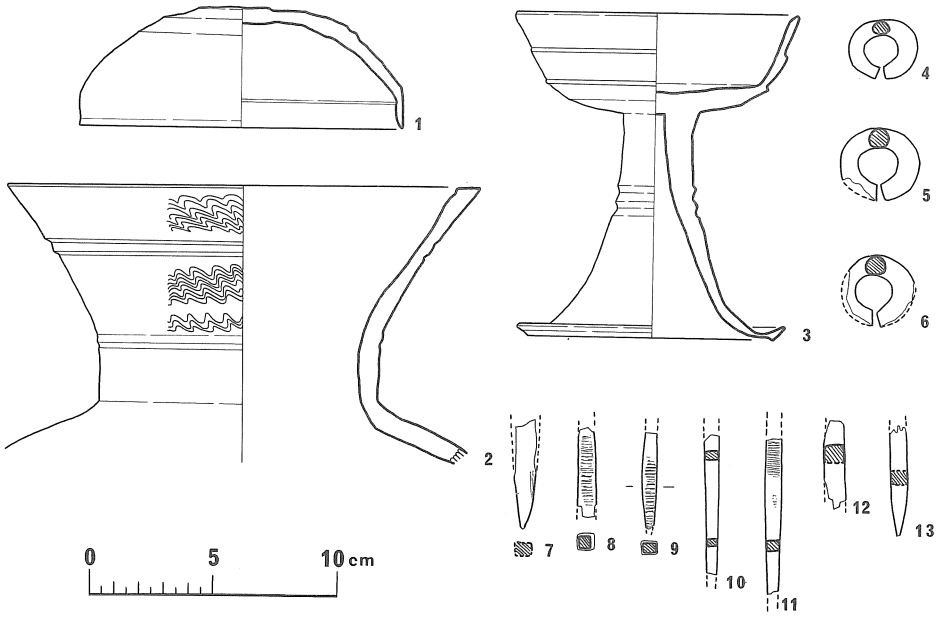
本書は，あくまでも分布調査の報告書であって，個々の古墳の詳細な報告は不可能である。したがって，本書の記述は，これら古墳の本報告が出るまでの中間的なものである。

2．本古墳群中，No.21号墳は床面清掃，石室実測がなされ，その調査結果の一部は公表されている（高松市教委1972）。この場合も（注1）と同様，本報告が出るまでのつなぎとしての性格を有している。

3．No.27号墳は床面清掃，石室実測がなされ，その調査結果は公表されている（高松市教委1972）。この場合も（注2）と同じ。



挿図第29図　浄願寺山古墳群分布略図（約1/3,500）



挿図第30図　摺鉢谷10号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

4．石清尾山古墳群の提起する若干の問題―小結にかえて―

(1) はじめに

石清尾山古墳群は，古墳時代の始めの頃から終末頃まで，ほとんどすべての時期の古墳を含んでいる。そして，それらの古墳は，土で墳丘を築いた普通の「盛土墳」と，土の代わりに石塊を用いた「積石塚」とに大別できる。また墳形も，前方後円墳・双方中円墳・円墳・方墳といった多様な形態をとっている。さらに，これに呼応するように，死者を埋葬する施設として，竪穴式石室，横穴式石室，刳り抜式石棺，箱式石棺，木棺，陶棺などが存在する。ここには，古墳のほとんどすべてが出そろっているといってよい。これらの古墳は，いずれも，高松平面の北部に住んだ人々の墳墓であったに違いない。石清尾山塊一帯は，この山付近に居住した人々の古墳時代全時期を通じての「墳墓地帯」であった。これらの古墳は，一つのまとまった単位として，この地域に生活した人々の古墳時代の歴史的な動きを把える上で，我々に豊富な材料を提供してくれる。

石清尾山古墳群を全国的に有名にしたのは，何と言っても1931年（昭６）の京都帝国大学による調査によってであった。そこでは，石清尾山古墳群についての極めて「実証的」な研究・調査の上にたって，本古墳群の一つの特質とも言うべき「積石塚」の性格が論じられたのである。それ以後，石清尾山に関して語る時は，すべてこの「京大報告」に依っている。そして調査されて以後約40年間，これに匹敵するような研究・調査は行なわれていない。しかし，第二次大戦後，古墳時代の考古学も幾分なりともその研究成果をあげてきた。したがって，当時の問題意識で処理されたものが，すべて現在に通用するということは，ほとんどありえない。当然，新たな再検討がなされなければならない。なかでも「京大報告」に最も欠落している観点，すなわち在地の歴史のなかに石清尾山古墳群を位置づける試みが中心となるべきであろう。しかし，現在の香川県の研究水準・研究体制では，全面的にこうした作業を遂行することは，困難である。ここでは，今後の石清尾山古墳群の研究にあたって，特に問題となる点をあげておくに留めておきたい。具体的資料を使用して，この地域の歴史的動態を明らかにすることは，すべて後日に期せざるをえないのである。

(2) 石清尾における古墳の発生

石清尾山古墳群中で最古の古墳は，現在判明する限りでは猫塚である。中円部の中心竪穴式石室に副葬されていた土師器壺を手がかりにすれば、４世紀でも前半に近い頃築造されたと思われる。しかし，この猫塚は，香川県では最古の古墳ではなく，先進地域で古墳が発生して一定の期間を経た後のものである。今のところ，香川県最古の古墳は，これより南東約20kmの大川郡（旧寒川郡）寒川町に存在し，別個の集団に属すると考えられる奥３号墳（ゴルフ場埋蔵文化財調査団1972）であって，石清尾には現在までのところ，この時期の古墳は確認されていな

い。しかし，高松平野（ここでは西は旧香川郡，東は旧山田郡までに限定）における各集団（注１）のなかでは，最も先頭を切って古墳を出現させている。そして，香川県内でこの猫塚とほぼ同時期かと思われる古墳は，先の奥３号墳と同一集団に属する考えられる大川郡大川町古枝古墳（六車恵一1967ａ，1972ｂ）しか判明していない。他地域，たとえば善通寺市，坂出市，丸亀市などではその候補としてあげられる古墳も存在するが，今一つ明確でない。ともかく，この猫塚が出現した時期に，香川県内で古墳を出現させていた集団は，極めて限定されていた。高松平野に限って言えば，猫塚の時期には，他集団，たとえば高松東部地域の集団では，高松市茶臼山古墳前方部前面で発見された土坑墓（香川県教育委員会1970)。高松南部地域の集団では高松市西植田町の円養寺遺跡（松本豊胤1971）で発見された壺棺墓ないし墳丘を持つ「特定基」のように，いまだ「古墳」としては定形化していない墳墓を持つ段階であったらしい。石清尾地域においても，猫塚出現以前にこうした形態と内容を持つ墳基の存在することが予想されるが，今は明らかでない。

また，石清尾地域で，これ以前の遺跡と言えば，前章で明らかにした如く，弥生時代中期後半のいわゆる「高地性集落」と，山麓の時期不明の集落跡，２本の銅鉾を出した遺跡しか判明していない。特に，「高地性集落」は，各地域の集団間の抗争の反映であると言われている。初期の古墳を造った集団も，こうした集団間の抗争を勝ち抜いてきたことはまず確かであろう。しかし，石清尾での古墳の発生と「高地性集落」の時期との間には約２世紀という空白期があり，越え難い断絶がある。この「高地性集落」と古墳との関係は，古墳の成立基盤・性格を究明する上で重要な手懸りとなるものであり今後の課題である。このように，猫塚出現以前の墳墓については今日我々はまったく知識をもっていないのであるが，平地ではなく高地に立地するであろうことは，他地方の諸例から推して予想される。今後の意識的な追求が期待される。

石清尾においては，４世紀前半頃には古墳は成立した。それは，猫塚（おそらく鏡塚も）のように双方中円墳という近畿地方の先進地域において主流となりえなかった墳形であった。しかも，その築造用材が石塊であって土でないということも，主流とは，相違している。また，中円部には，中心の大竪穴式石室の周囲に複数の小竪穴式石室が存在したと言われており，いまだ集団墓的様相が残存している。他の発生期の古墳の埋葬主体は単数ないし２基程度が多いことを思えば，猫塚の一つの特徴とすることができよう。こうしたことは，副葬品にも，古墳出土品としては，類例の少ない小形の銅剣などの青銅器類が主体なっていることからもうかがえる。鉄器も少数の武具か生産用具に限定されており，一般的に言われるように副葬品をみるかぎり権力の誇示的側面は弱い。このように，石清尾集団が最初に築造した古墳が猫塚であるとの前提に立てば，副葬品の量的寡少さにもかかわらず最初に最大の規模をもつ古墳が出現したことになり，その特異性が注目されるのである。通例を破って石で墳丘を築いたということ

は，この石清尾集団の持つ主体性として評価できるだろう（春成秀爾1970）。その基盤の一つは，おそらく普通言われる如く，この付近の瀬戸内海の海上交通権を掌握していたことに求められよう。石清尾における古墳の発生が，香川県の他地域と比べれば，比較的早かったのも，古墳築造いう祭祀的行為を通して自己の勢力を拡大していた「近畿地方の諸勢力」との利害が他地域よりもいちはやく一致する状況があったことが考えられる。「近畿地方の諸勢力」にとって，瀬戸内海の海上交通権を掌握することは極めて重要なことであった。石清尾集団も，新しい技術など（たとえば主要な生産用具の材料となる鉄一つを取ってみても自己の領域内ですべてを生産することはできず，その大部分を他地域から入手しなければならなかった）を導入するのに，より高次な集団の系列下に入ることは都合のよいことであった。こうして，石清尾にも古墳は出現したが，この近畿の有力集団との関係は最初から完全に対等ということではなく，さまざまな契機を通じて，次第にその従属の度合を深めていくことになる。このことは、石清尾の集団内部の諸関係と密接に関連している。猫塚の石室形態，遺物から見れば，十分その基盤が成熟していなかった段階で，古墳に転化している。集団を代表し，神との媒介を果す役割を荷った首長と，一般の人々との間に存在する対立関係は，他の先進地域と比べれば，相対的に緩やかであったと考えられる。しかし，首長は，古墳の築造という旧首長の首長権を新首長が継承するというすぐれて集団的な葬送儀礼を一つの足がかりとして，一般の人々との格差を広げていく。

ともかくも，石清尾の集団は，高松平野に限定して言えば，最も初期の古墳としての猫塚を，山上高く築造したのである。

(3) 石清尾における前方後円墳の時代

猫塚が造られて以後，摺鉢谷を形成する尾根上や，その東の稲荷山に，続々と古墳が造られた。今，首長墓と考えられる前方後円墳・双方中円墳を抽出し，立地形に依ってグルーピングすれば，およそ３～４個の支群が設定できる。第３節で詳述したように，鏡塚―北大塚―石船塚，猫塚―姫塚，稲荷山姫塚，鶴尾神社４号墳等を中心とした支群である。今かりにそれらをそれぞれ鏡塚グループ，猫塚グループ，稲荷山グループ，鶴尾神社グループ（猫塚グループに入る可能性もある）と呼んでおきたい。これらは，いずれも，尾根上に立地する積石塚であって，４世紀前半～中葉頃に始まり，５世紀初頭（または５世紀前半）頃までの間に順次築造されたものとすることができる。ただ，これらの古墳の築造年代の決め手となる資料が，存在しないか不確実なために，下限がどこまで下るかについては，現段階では確定できない。今は，漠然と，５世紀初頭～前半頃と考えておきたい。

各支群の内容を若干検討すれば，猫塚グループがまず最初にこの石清尾地域に古墳を出現させた。それ以後の古墳については，資料が不確実で確定できないが，その一つの候補として鏡

塚グループのうち鏡塚があげられよう。さらに，稲荷山グループも，鶴尾神社のグループも，やがて古墳を出現させたと考えられる。ただ，猫塚，鏡塚などが造られた時期に，稲荷山グループなどに前方後円墳でない円墳などが築造された可能性もある。そして，これら4(3)個のグループがより高次な集団を形成し，この石清尾の地域に古墳を築いていったと考えられる。

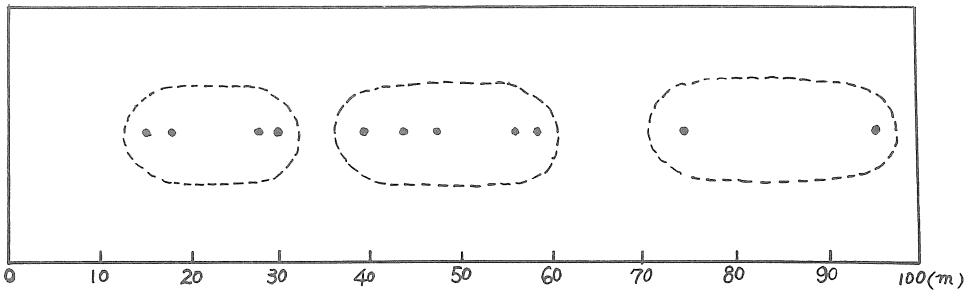
各支群の古墳の変遷をたどれば双方中円墳から前方後円墳に移行するグループ，前方後円墳から円墳に移行するグループなど様々な変遷形態を示している。また，それら古墳の規模，内容に若干の差異が存在する。これらのことから，各支群を形成した集団が自己の首長権をそのままに残存させながらも，それらの上位に立った石清尾の大首長とも言うべき首長を，各集団から輪番的に出していたのではなかったかと推定される。たとへば，猫塚の中心被葬者は，猫塚グループの首長でありまた同時に石清尾地域全体の首長でもあったと考えられる。しかし，各集団は，完全に平等な立場で大首長を出していたのではなかった。そこにはおのずから優劣関係が存在するのであるが，猫塚，鏡塚グループが優位に立っていたと考えられる。（注２）

このように，石清尾の地域集団は，石清尾地域にその積石塚という特異な古墳を，比較的短期間のうちに多数築造したのであるが，こうしたことは、高松平野部では異質な様相であった。県内で，この石清尾と類以する様相を示す集団は，先の奥３号墳を出現させた集団を統括し，大川郡津田町の津田湾沿岸部に多数の前期古墳を出現させた集団であろう。今のところ，香川県では前期でも畿内の先進地において主要な古墳がその巨大化のピークに達する時期以前の古墳群としては，この石清尾集団と，「寒川」グループとが群を抜いている。

石清尾集団が，このようにその特異な展開を遂げることができた基盤の一つは，やはり海上交通権に関与していたことに求められよう。石清尾のこの時期の相対的地位の上昇は，対先進地との関係によるところが大であったと考えられる。さらに，通例を破って石で墳丘を築き，ここでなければならないという立地をしているところに，在地における集団の強烈な意識を読み取ることができよう。在地における与えられた条件を最大限に利用することで，逆にその不利な状況を有利な状況に転化させようと試みたのではなかろうか。それが，具体的には積石塚として出現したものと考えられる。しかし，石船塚，姫塚に端的に見られるように，執拗に普通の土盛墳と同様な内容を備える努力をしている点で，その強烈な意識のなかに中央勢力に頼らざるをえなかった弱さを露呈している。たとえば，石清尾集団は，最初特異な墳形としての双方中円墳という積石塚を出現させ，以後独自な展開を示すかに見えた。しかし，出雲の古墳が，後期まで一貫して前方後方墳・方墳という墳形を維持したのに対して，石清尾では双方中円墳はすぐに前方後円墳に転化して普通の一般的な土盛墳と本質的には同一の内容を有する点で，すぐれてその異様な外観に比較すれば，独自性を内容にまで貫徹できていない側面を持っている（注３）。　さらに，石清尾の前方後円墳・双方中円墳は，猫塚の全長96ｍ，鏡塚の70ｍ

（挿図第30図の(1)）を除けば，40～60ｍの前方後円墳（挿図第30図の(2)），20～30ｍの小形の前方後円墳（挿図第30図の(3)）であって初期に造られた古墳が最大であり，以後次第に小規模化していく傾向にある。

挿図第31図　前方後円墳の規模（双方中円墳を含む）



ｍ標示は墳丘の長さ　●印は　墳丘の数

この規模は，たとえば，対岸岡山県の同様な性格を持つと考えられている一連の大形前方後円墳が，150ｍ前後の規模であることを思えば，かなりの小形である。また副葬品その他にも，セットとしては一応揃ってはいるが，量的には少なく，たとえば，石船塚の外表に存在していた円筒埴輪も，この時期の古墳としては量が非常に少なく，はたして通例の如く全周をめぐっていたかどうか疑われるのである。このように，香川県内では有力な集団として高松北部地域にその勢力を誇っていたが，県外の主要地域と比較すれば，規模・内容共に貧弱の感は免がれない。これは，香川県の古墳の一般的傾向でもある。

石清尾における前方後円墳は，遅くとも５世紀前半に消滅する。以後この地域で，前方後円墳を見ることはできない。このことは，香川県の他地域と比較しても時期的に早い。全国的にみても，主要地域では前方後円墳の巨大化の頂点となる時期であって，それ以後に衰退していく傾向にあるのに対して，石清尾の場合は，若干傾向を異にすると言わなければならない。首長権がこの地を離れて，どこかの集団に移動したことも考えられよう。すなわち，石清尾集団の一定の自律性は持ちながらも，讃岐地方の他集団に対して，政治的に従属する状況があったのではなかったかと思われる。その一つの候補として，先の「寒川」グループに属する，大川茶臼山古墳があげられよう（注４）（六車1972ａ）。しかし，その実態は不明である。この石清尾集団の相対的地位の下降は，おそらくこの集団の持つ重要な基盤の一つとしての港湾管理者的側面を欠落させつつあったことに求められよう。こうした傾向は，先述した「寒川」グループにおいても見られ，津田湾沿岸部に進出していた古墳は，次第に衰退していき，５世紀中葉頃，内陸部に，周濠と周庭帯を持った大形の前方後円墳大川茶臼山古墳を出現させている。また，香川県の沿岸部を飛び石的に連なって存在する積石塚も，そのほとんどはこの時期以後は消滅している。このように，香川県内で海上交通に関与していた集団に，５世紀前半頃大きな変動が生じており，このことが何を意味するかは，今後の課題である。

また，石清尾における石船塚の築造された時期には，確実に高松平野で古墳は出現している。特に，東８kmに存在する高松市茶臼山古墳（香川県教委1970）との関係が注目される。高松市茶臼山古墳は，全長75ｍでこの時期の高松平野部の古墳としては最大であり，副葬品に碧玉製鍬形石２個を含み，中央勢力との密接な関係が予想される。しかも，この古墳の性格は，古墳時代にはその山塊の北側まで海が入っていたことが言われており，石清尾集団と同様海上活動との関係を持っていたことが考えられる。この４世紀後半に築造されたと思われる古墳の属する集団と石清尾集団とが，その性格を同一にすることは注目に値する。

石清尾においては，ついに積石塚の前方後円墳を普通の土盛墳に転化することはしなかった。このことに，石清尾集団の持つ強烈な主体性とその限界性が秘められていようが，今は明確にすることができない。約１世紀間，石清尾の地に順次築造された前方後円墳は，その一般的性格として首長を中心とする集団的葬送儀礼として把握できる（近藤義郎編1960）。 そのなかでも，次第に，集団を代表する首長の力が増大することは，当然であるが，いまだ首長の拠って立つ基盤は弱く，集団的規制力の前に，その力はとじこめられていたと考えられている。衰退するということは，一般的に言って，こうした集団的葬送儀礼が解体していくことの反映であるが，石清尾の場合は，高松平野部に限って言えば，時期的にいささか早い。おそらく，本地域の場合は，集団の政治的地位の相対的下落が主要な要因であって，集団内において，階層分化が広範に起って，集団的葬送儀礼が営みえなくなったとは考えられない。

石清尾の場合，こうした共同体の変化が，香川県の他地域と比べれば，最も初期に始まったとすることはできようが，本格的には，やはり，横穴式石室墳が，爆発的に築造される時代を待たなければならなかった。しかし，ともかくも石清尾における前方後円墳の時代は終りをつげたのである。少なくとも，本地域においては，巨大な即物的な標識を通して，集団の維持と発展を図ろうとした時代は，終りに近づきつつあったと言える。

(4) 石清尾における古墳時代の変質

石清尾において，前方後円墳が消滅して以後の動きは，不明確な点が多い。特に５世紀後半～６世紀前半頃の古墳を，明確に確認できていないのが実情である。したがって，首長墓を抽出することも困難である。しかし，少なくとも，ほとんど過去に破壊され現在わずかに残存している小円墳積石塚のうち，どれかはこの時期の所産と考えることはできる。この時期の普通の盛土墳は，全く確認されてない。おそらく，「群集墳の盛行する時代」以前には，石清尾地域では，一般的な盛土墳は築造されていないと思われる。

このように，以前には，高松北部地域にその勇姿を誇っていた古墳群が，現象的に突然の衰退を示すのである。こうした現象は，香川県地方の一般的傾向ではない。高松平野部に限っても，５世紀後半～６世紀前半の前方後円墳は，確実に存在しており，これらの集団と比較して

も，その劣勢は覆うべくもない。また香川県西部の善通寺の地域集団が，一貫して首長墓に前方後円墳を採用したのに比較すれば，あまりにも対照的である。今まで栄華を極めた者が一挙に没落する如く，石清尾集団は，この時期の古墳に見るべきものがない。こうした突然の衰退は，いかなる理由によるものかは，今後の課題であるが，一つには，先の特異な展開を遂げた基盤が，豊富な生産力（農業生産あるいは特産物）に支えられただけではなかったことを示唆している。中央勢力との関係が一変すれば，それがそのまま古墳の大巾な変化に表現される所に，この石清尾集団の弱さが表われている。たしかに，首長墓としては最も上位の即物的な標識としての前方後円墳を通さずとも，集団関係がある程度維持できるという点で，少なくとも高松平野部では最も「先進地」という評価を与えることはできよう。しかしそれはそのまま中央政権により深く従属していることを意味していると考えられる。おそらく，石清尾集団が独自に所持していた制海権の大部分が，中央政権に吸収されたことの反映であったと思われる。ただ，いまだ前代の伝統を引きつぐ積石塚という形態を取ることによって，かっての面目をかろうじて保ってはいるが，その墳形は円墳であり，規模も10m内外の古墳であるところに，その衰退した姿をうかがうことができよう。また，新しい葬法としての横穴式石室墳は，現在見る限りでは，6世紀後半を待たなければならなかった。こうしたことは，中央勢力との結びつきが強いと言っても，その結びついている勢力が，中央勢力内では衰退していく勢力であったことを示しているかも知れない。しかし，こうした対外的な諸関係については，一切不明とするしかない。この5世紀後半～6世紀前半は，農業生産にとっては，一つの変革期であった。現在の日本農業の原形とも言うべき乾田農法が，朝鮮から導入され次第に地方に定着していく時期である（都出比呂志1967）。こうした時期に，石清尾集団も，他の地域集団と同様に，平野部の開発にその努力を傾けたことは想像に難くない。こうした開発による前提がなければ，6世紀後半になってこの石清尾地域においても爆発的に増加する横穴式石室墳の群集は出現しないと考えられる。こうした地方開発の問題は，その後の歴史に深刻な影響を及ぼすのであるが，その実態の解明は不可能に近い。また，この時期は，今までの地域集団の再編，序列化が進行する政治的変動の時期でもあり，石清尾集団が他集団といかなる関係にあったかについても，不明である。

以上述べてきたように，5～6世紀前半の石清尾集団の動向を，古墳を通じてうかがうことは，困難であった。ただ，そこでの一つの特徴として，小規模な小円墳の積石塚が，かなり存在したことがあげられよう。特に，かって鏡塚グループの西側部の摺鉢谷の斜面に存在した積石塚群がこの時期に入るとの前提に立てば，その群集することが注目される。これが，いわゆる先駆的な群集墳として把握できるかどうかは，内容がほとんど判明していない現在判断することができない。しかし，前方後円墳の消滅の時期が早いことを考慮に入れるならば，そこに

集団的葬送儀礼が解体の道を歩みはじめ，しだいに共同体内において有力なグループが擡頭しつつあったことの反映と考えることもできよう。特に，これら積石塚の間に形態的にも，規模においてもほとんど格差のないことは注目される。

(4) 石清尾における群集墳の時代（古墳の消滅）

6世紀後半頃に至れば，石清尾地域にも横穴式石室墳が一般化する。それは，全国的傾向と規を一にし，まさに爆発的な数の増加であった。これまで，積石塚が築されていた摺鉢谷にも，またこれまでは古墳が造られていなかった石清尾山塊の山麓斜面一帯にも，分布するようになる。破壊された古墳をも含めれば，その数は150基近くになると推定される。それらの古墳は，例外なく群集する。群集する数は，3基程度のものから50基程度のものまで，かなりの格差が存在する。

今，これらの古墳が築造された時期を，ほぼ6世紀後半から7世紀初頭に限定できるとすれば，約60～70年間に築造されたことになる。驚くほどの短期間に，この石清尾というあまり広くない地域に，これほどの数が築造されたということになる。しかも，横穴式石室は機能的に多人数埋葬に適しており，この時期になれば10体以上埋葬されることもさほど不思議でない。古墳そのものの数と，埋葬される人間の二重の意味での増加であった。この時期になれば，香川県でも平野部近くであればほとんど例外なく見受けられ，現在人が住んでいない島にすら存在する。高松平野部でも，こうした同様な様相を示す。

前代の猫塚や石船塚が造られた時代と比較すれば，そこに大きな変化が見受けられる。前方後円墳が共同体的な性格を有するとすれば，この「群集墳の盛行する時代」の古墳は，個々の家族墓的性格が濃厚である。横穴式石室に葬られた人々は，先の前方後円墳の被葬者が集団を代表する首長ないし首長集団に限定されたのに対して，かなり広範囲の人々を含んでいる。とはいえ，この地域に居住した人々すべてが古墳に埋葬されたとは考えられず，古墳を築造することのできた大家族は，やはり限定されていた。

先に，この石清尾地域に「先駆的群集墳」が存在したのではないかと述べた。たしかに，前方後円墳の衰退・消滅は，香川県地方で最も早い地域の一つであり，そこに石清尾の一つの特徴が存在した。こうしたことに示される様に，共同体的諸関係が比較的はやくから解体化の傾向にあったと考えられる。その最も基底になったのは，何といっても生産力に一つの画期が存在したことであった。先述したように，石清尾の具体的資料を用いることができないが，たとえば，高松港外に浮ぶ女木島の女木丸山古墳（森井正1966，六車1969）より出土した鉄製の曲刃鎌に見られる如く，5世紀中～後半頃から地方に定着しだした朝鮮伝来の新しい技術が前提となる。こうした新技術を得て生産は増大する。集団内部に階層分化が起り，いままで集団に埋もれていた20～30人位で構成されていたと考えられる大家族が自立化してくる。こうした一

般的傾向は，石清尾においても同様であった。

石清尾の群集墳は，小形の円墳のみで構成され，それらの間に大きな格差がみられない。群集墳の形態としては，数個の群集墳が一つの単位となって単独で立地するもの，あるいは，20基内外～50基近くの小円墳が一単位となる二類型が存在する。一般的には，後期のこうした群集墳でも，その内容に格差が厳然として存在している。しかし，石清尾地域には現在の知見の範囲内では，卓越した古墳を見い出すことができない。たとえば，高松平野部では，先の高松市茶臼山古墳のすぐ近くには，石室全長約10,65 mの石棚を持つ久本古墳が存在する。こうした，いわゆる巨石古墳は香川県でも主要な地域に少数ではあるが分布しており，石清尾に見うけられないのは不思議である。しかし，等質的な小形の小円墳とはいえ，そのほとんどすべてが，多量の投下労働力と技術を要する横穴式石室を有することは，たとえば少し内陸部に入れば，おうおうにしてもはや石棺の機能を果していると考えられる小竪穴式石室が代用されていることを思えば，豊富な生産力に裏づけられていることを示している。特に，浄願寺山古墳群は，その立地する場所が，標高200 m，比高180 mほどの後期古墳としては，通例とはいささかその立地の点で傾向を異にしている。その内容も径10～15 m程の小円墳ながら，すべて横穴式石室を持っていると推定される。50基以上のこの地域では，最大の群集墳である。こうした群集墳は，香川県地方では，極めてまれであり，石清尾地域の後期古墳が，一般的に優位性を保っていると評価できよう。他地域では，この石清尾の比較的大形の横穴式石室墳がその盟主として存在していることを考えるならば，一般的に優位に立っているという意味で，高松平野部においては，先進地域というこができよう。しかしながら，卓越した巨石墳を持たないということに，この地域が律令体制確立期に讃岐地方の政治的中枢地として登場できなかった謎がひめられていると思われるが，こうしたことは一切不明とするほかはない。そして，この期になれば，新たな移住者が存在したことも考慮に入れなければならないが，具体的様相はこれまた不明である。

石清尾においては，7世紀初頭頃に古墳の築造は終了していたと考えられるが，それ以後は若干の追葬期間が存在した。しかし，内容の判明している古墳が少数なので，確定はできない。ただ，その追葬期間は，それほど長くなく前半頃にほとんど終了したのではないかと推定できるのみである。あれほどまでに，数多く造られた古墳が，急激に造られなくなったのである。古墳の消滅である。これ以後古墳は造られなくなる。この古墳の急激な築造の停止は，もはや，古墳という即物的な標識を通さずとも，支配関係を維持できることを意味しているといえよう。支配者は，こうした墓にその権威が認められなくなれば，新たな権威を創出するのが常である。それが，より整備された身分秩序として，中央政権に組み込むことであり，具体的には，力バネ制度であったと考えられる（石母田正1971）。

中央では，恒常的支配の中枢としての都城が。地方においては，地方支配の中枢としての国衙が造営される直前の時期であった。

(5) おわりに

以上，石清尾山古墳群の内包する諸問題のうち，ほんの一部を指摘したに留まってしまったが，もとより，それは承知のうえであった。たしかに残された問題は，限りなく残存している。たとえば，積石塚の問題，政治的諸関係の問題等については，ほとんど触れることができなかった。中央政権やその他の集団との関係，部民・ミヤケ・国造等の問題についても，一切を捨象した。特に，讃岐という「地方国家」が成立するにあたって，石清尾集団の果した役割はぜひとも評価したかったが，我々の力量不足からそれすら果しえなかった。そして，残された最大の課題は，最初にも述べたように，石清尾地域の全時代を通じての一貫した全体としての歴史叙述である。そして，本古墳群の保存とその活用である。本調査が，こうした点にいささかなりとも貢献できればと念願している。

注

1．現在，4・5世紀の前方後円墳が一系列以上たどれる地域は，石清尾の南部の植田地域，西部の鬼無地域，東部の古高松地域，北東部の屋島地域の計4地域が存在する。

2．『日本の考古学』Ⅳ（西川・六車1966）で，石清尾の前期古墳時代に対して，「一世代に一首長墓といった単純なものでなく，すでに集団内部にヒエラルキーが形成されていることをしめしているようである。」と述べられているが，ほんとうにヒエラルキーが形成されていたかは検討を要しよう。ここでは，否定的に考えている。

3．たしかに，積石塚の築造技術は，極めて高度なものであったと思われる。特に面を石垣状にきちんと取ったあたかも基壇を思わせる段築成技術に要する，労働力と技術は，普通の大形の古墳（土盛墳）と同様もしくはそれ以上であったと考えられる。通有の古墳に見られる葺石が，積石塚の簡略化した姿であるとも言えるのである。こうしたことを考えるならば，この石清尾集団の主体性と特異性を強調すべきであろう。しかし，その主体性の基盤は，強固なものでなかったこともまた確実であろう。系譜問題をも含めて，今後の課題としたい。

4．この大川茶臼山古墳は，全長約145ｍ，香川県最大の古墳である。丘陵末端に立地するとはいえ，平野部に存在し，周濠と周庭帯をも持っている。こうした規模と内容は，香川県内の古墳のなかでは極めて異質な存在であり，前方後円墳としては，頂点に達した姿である。その成立にあたっては，かなり広範囲に集団間の統合，再編，系列化が進行・定着したことが考えられる。

参考文献目録（アルファベット順）

（石清尾関係の主要な文献をも含む）

青井常太郎1944，『讃岐香川郡誌』香川県教育会香川郡部会

遠藤順昭1967，「大化前代地方社会の一姿相―とくに讃岐国について―」『関西大学考古学研究年報』1

後藤守一1926「本邦内地発見漢式鏡各説（讃岐国）」　『漢式鏡』　日本考古学大系

後藤守一1933 a「讃岐高松石清尾山石塚の研究新刊紹介」　『考古学雑誌』第23巻第7号

後藤守一1933 b「積石塚の問題」『考古学雑誌』第23巻第12号

ゴルフ場埋蔵文化財調査団1972，『ゴルフ場埋蔵文化財発掘中間概報』

春成秀爾1970　「弥生墳墓から古墳へ」　『古代の日本』第4巻中四国

福家惣衛1965　『香川県通史』古代中世近世編

福家惣衛1968　「香川県古墳一覧表」『讃岐の史話民話』

石母田正1971　『日本の古代国家』

香川県教育委員会1955『新修香川県史』

香川県教育委員会1970，『高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報』

鎌木義昌・高橋護　「古墳文化各説（山陽，四国地方）」　『新版考古学講座』5原史文化（下）

笠井新也1911　「石塚の研究」　『人類学雑誌』第32巻第1号

笠井新也1933　「讃岐国石清尾山石塚に就いて」　『考古学雑誌』第23巻第12号

小林行雄1955　「古墳発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号，後『古墳時代の研究』（1961）に収録。

近藤義郎（編）1960　『月ノ輪古墳』

近藤義郎・今井堯 1972「前方後円墳の時代」『考古学研究』73

京都大学文学部1968　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』2

田辺昭三1966　『陶色古窯址群』1　平安学園研究論集第10号

間壁忠彦1970　「沿岸古墳と海上の道」　『古代の日本』4中四国

増田休意1768　『三代物語』

増田休意1915　『讃州府志』

松本豊胤1971　「高松市円養寺遺跡調査概報」　『香川県文化財協会報』特別号10

森井正　1966　「高松市女木島丸山古墳」　『香川県文化財調査報告』8

六車恵一1965　「讃岐津田湾をめぐる4・5世紀頃の謎―古墳の分布とその解釈―」『香川県文化財協会報』特別号7

六車恵一1967 a　「香川県大川郡古枝前方後円墳」　『日本考古学年報』15

六車恵一1967 b　「讃岐における合口土器と前器古墳』53

六車恵一1968 a　「讃岐における古式古墳」　『古代学研究』52

六車恵一1968 b　「地下水よりみた讃岐の古墳」　『香川県文化財調査報告』 9

六車恵一1969　「香川県高松市丸山古墳」　『日本考古学年報』17

六車恵一1972 a　「石清尾山古墳」　『さぬきの遺跡』

六車恵一1972 b　「古枝古墳」　『さぬきの遺跡』

長町彰　1911　「讃岐国石清尾山古墳」　『考古学雑誌』第1巻第7号

長町彰　1912　「讃岐石清尾山発見の陶棺」　『考古学雑誌』第3巻第1号

長町彰　1918　「讃岐国における石枕ある2・3の石棺に就て」　『考古学雑誌』第9巻第1・10号

長町彰　1920　「讃岐国石清尾山の群集墳殊に其積石塚に就て」『考古学雑誌』第10巻第4・5号

長町彰　1929　「讃岐考古集録」　『考古学雑誌』第18巻第2号

中山城山1890　『全讃誌』（増補本）

西川宏・六車恵一ほか1966　「古墳文化の地域的特色（瀬戸内）」『日本の考古学』Ⅳ

西川宏1970　「前半期の古墳文化―讃岐と出雲を中心に―」『古代の日本』4中四国

岡田唯吉1928　「石清尾山大古墳群」『香川県史蹟名勝天然記念物調査報告』3

斉藤忠　1961　『日本の古墳』

高橋健自1912　「近時発見の珍品(3)」　『考古学雑誌』第2巻第3号

高橋健自1914　「石棺石槨及び土坑を論ず」　『考古学雑誌』第5巻第10号

高橋健自1915　「銅剣・銅鉾考」　『考古学雑誌』第6巻12号

高橋健自1925　『銅鉾・銅剣の研究』

高松市1961　『南郊高松』

高松市史編集室1964　『新修高松市史』1

高松市教育委員会1971　『高松市石清尾山古墳群緊急調査概報（第1次）』

高松市教育委員会1972　『高松市石清尾山古墳群緊急調査概報（第2次）』

寺田貞次1923　「石棺の用途について」　『考古学雑誌』第13巻第10号

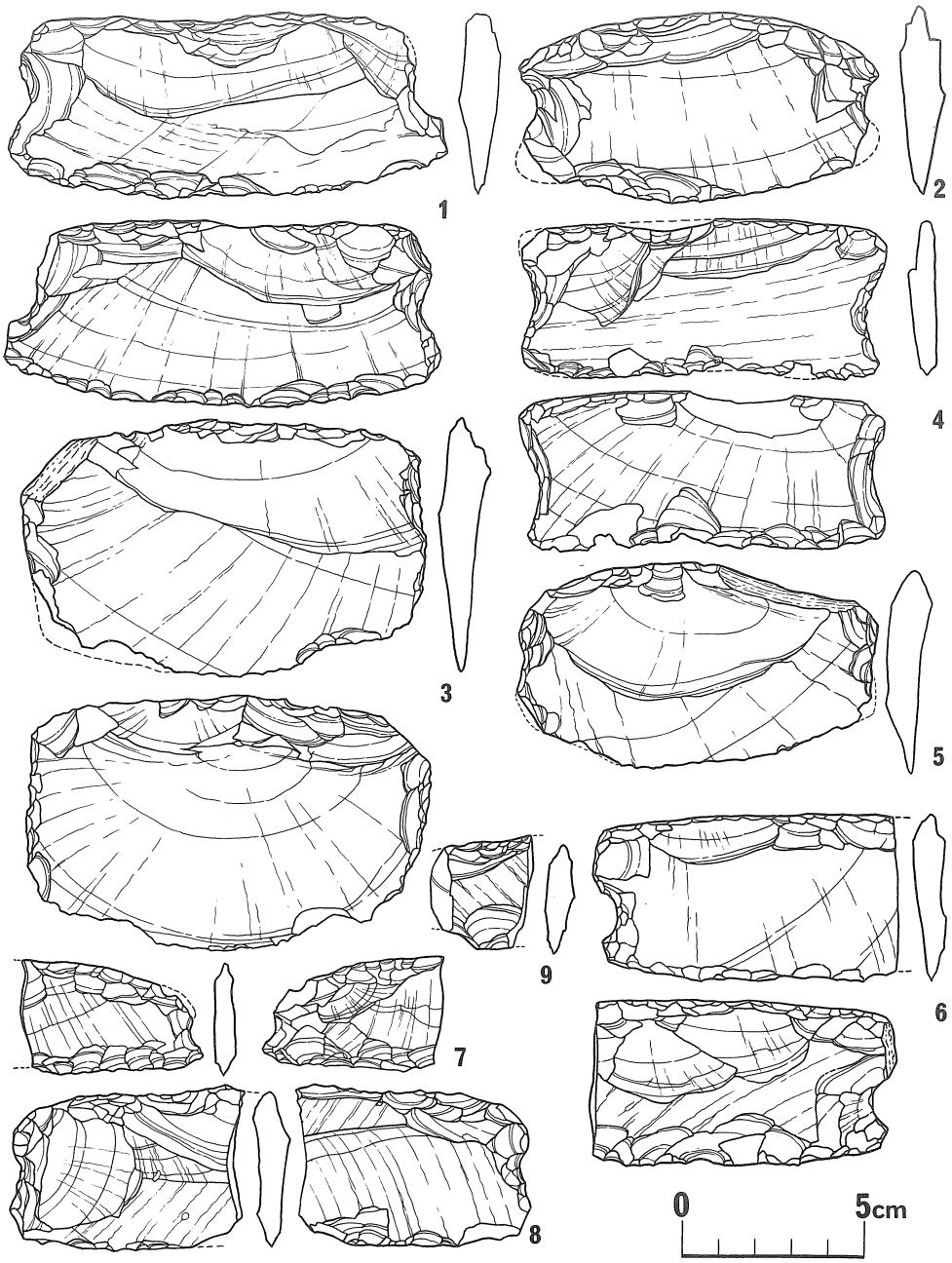
寺田貞次1935　「讃岐における前方後円墳」　『考古学雑誌』第25巻5号

東京考古学会1934　「考古学主要文献梗概並批評―讃岐高松石清尾山石塚の研究―」　『考古学年報』昭８年度

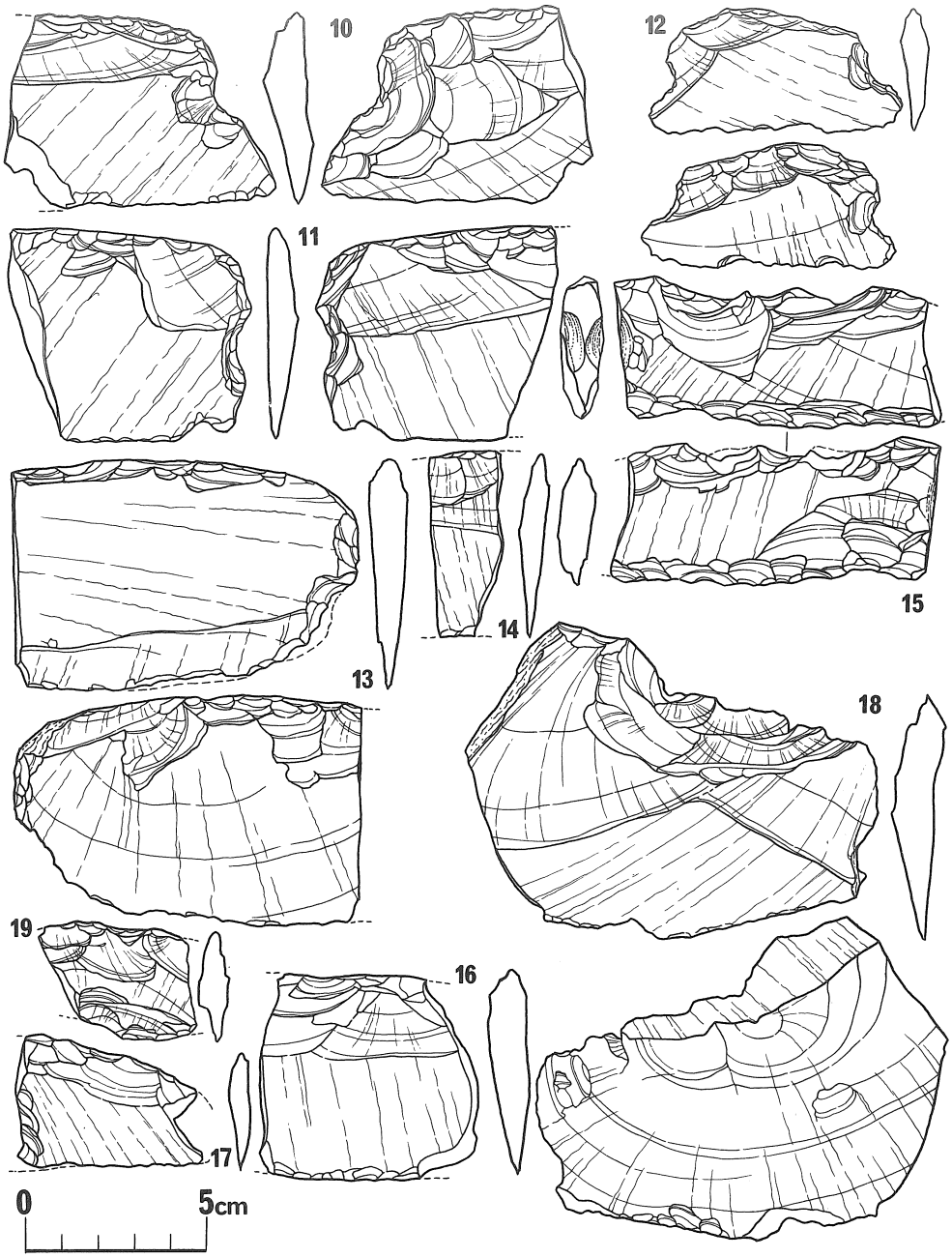
都出比呂志1967　「農具鉄器化の二つの画期」　『考古学研究』51

梅原末治1933　『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告12

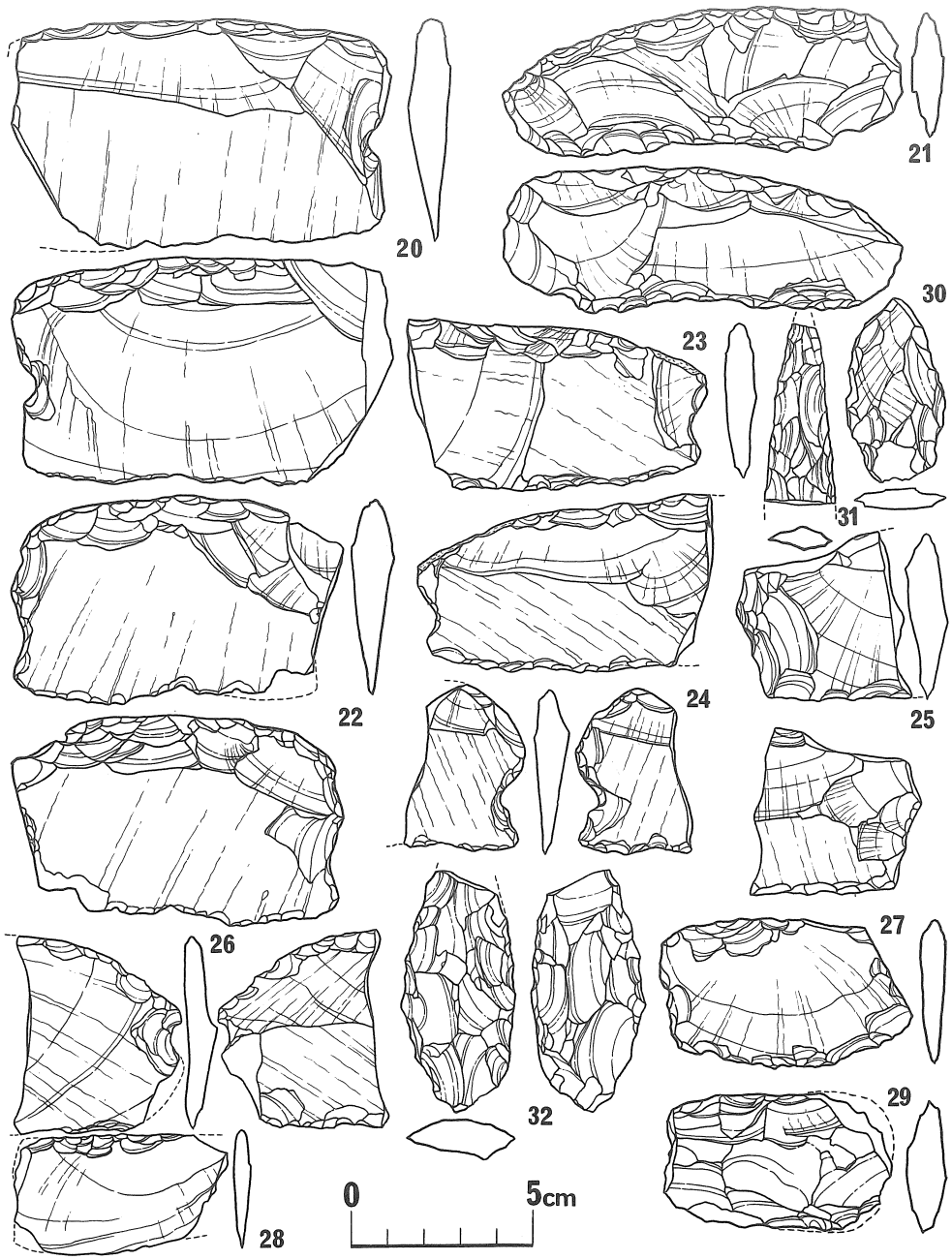
矢原高幸1957　「高松市石清尾山の石積古墳群」　『私たちの考古学』15



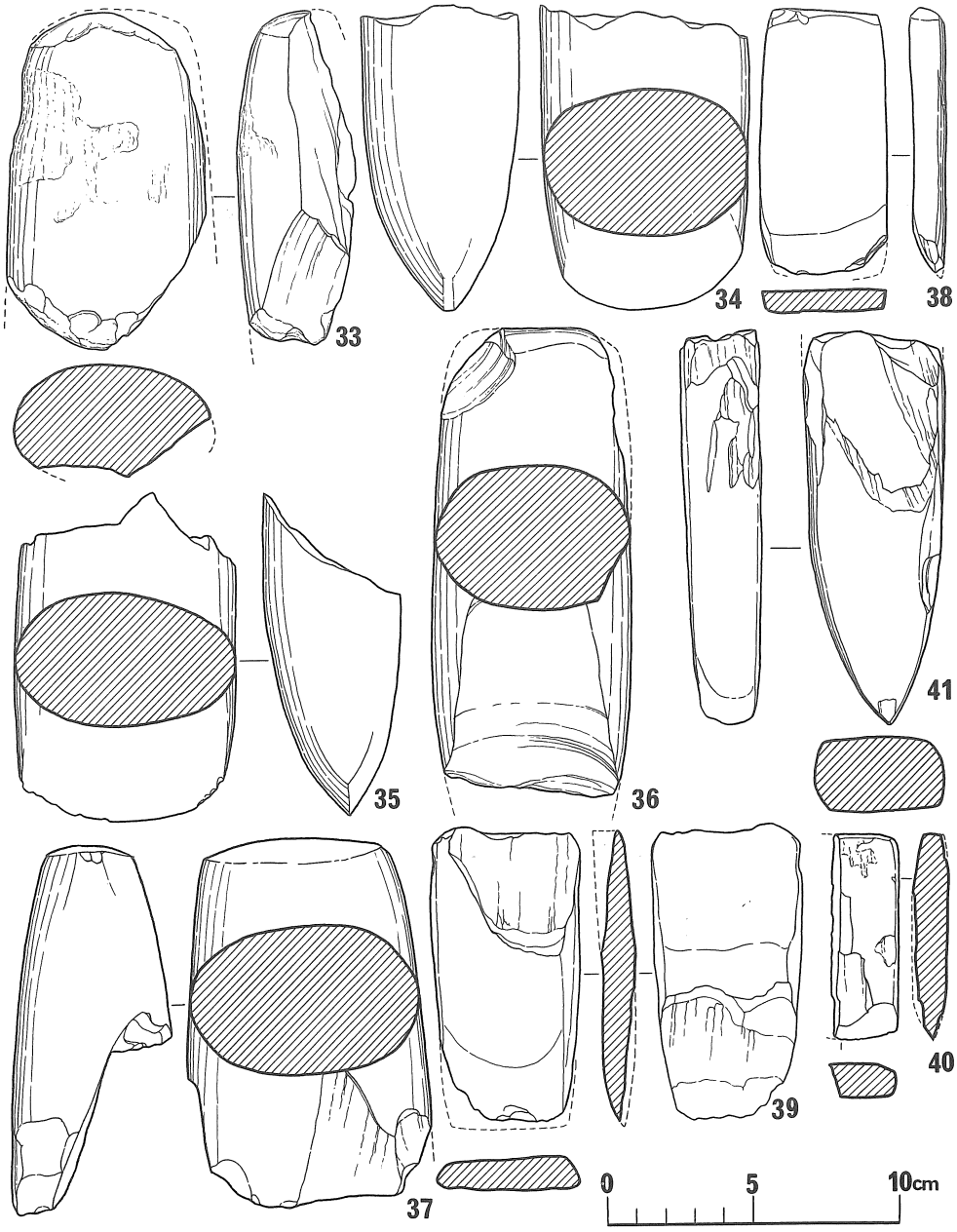
第1図　石　器　実　測　図



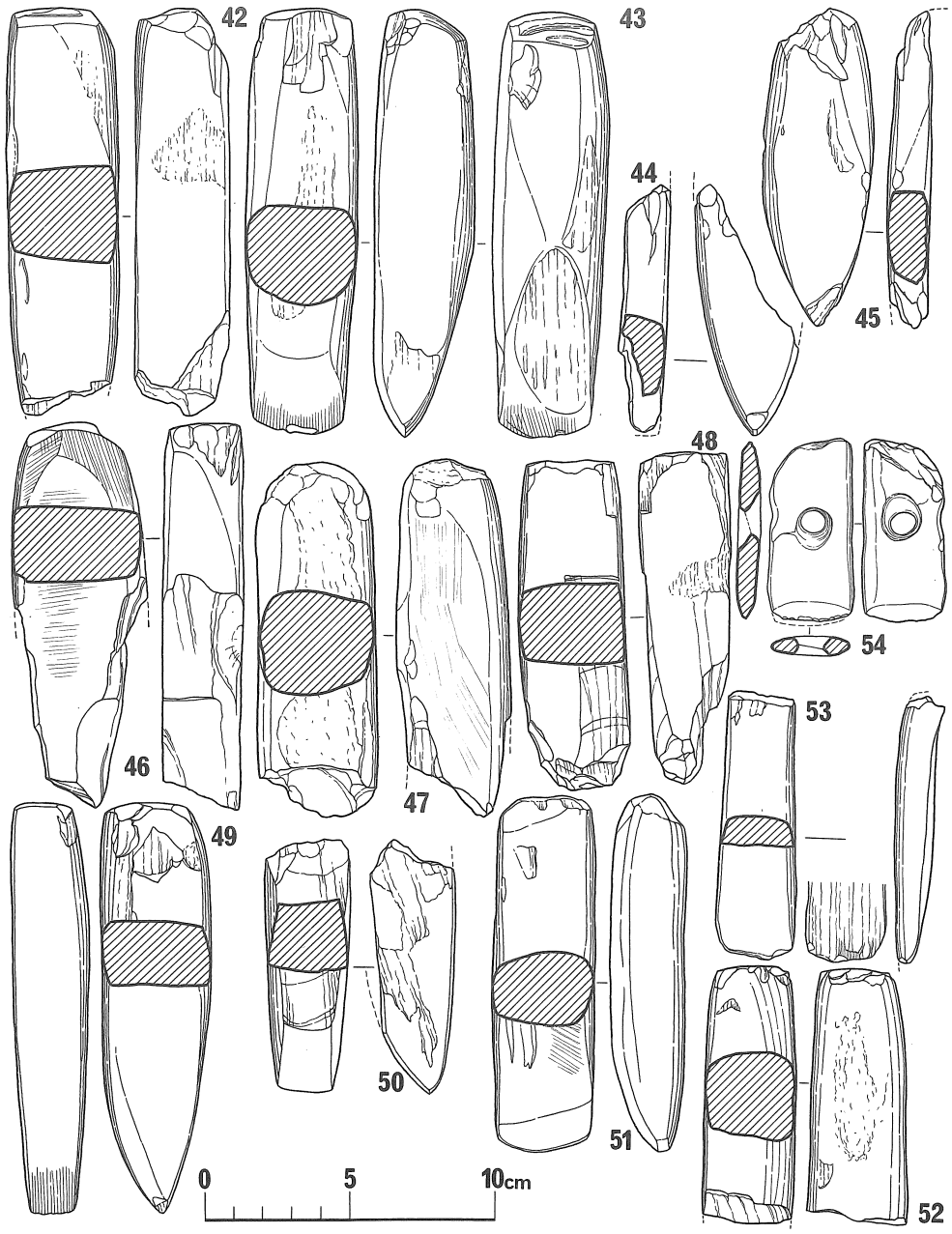
第2図　石　器　実　測　図



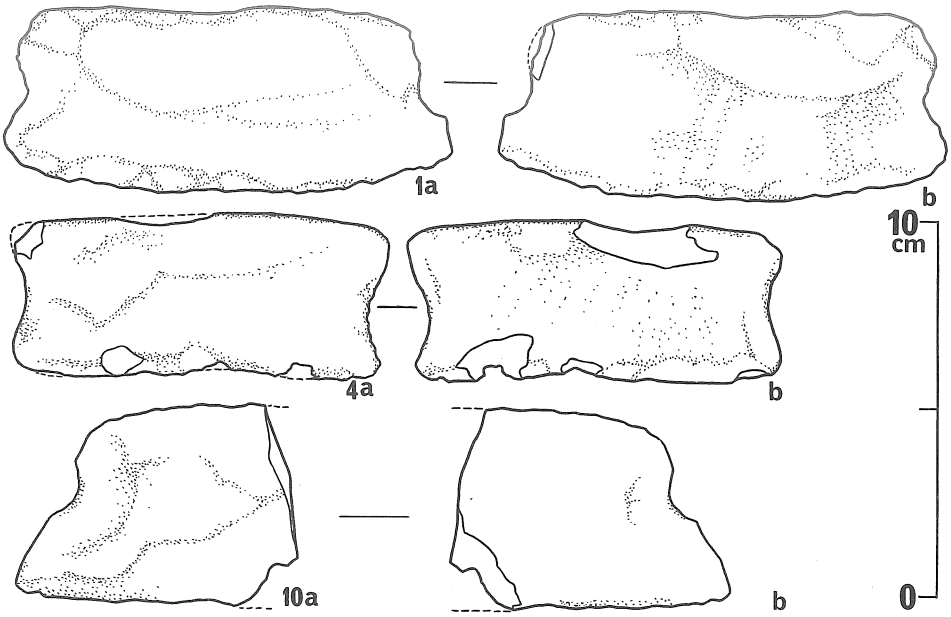
第3図 石 器 実 測 図



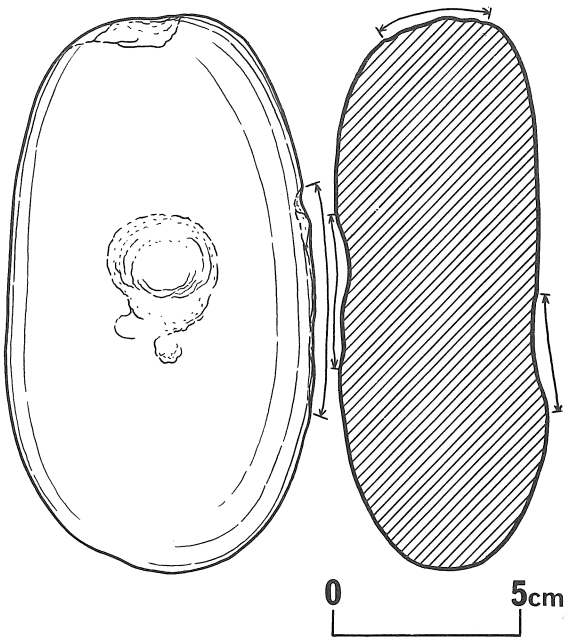
第4図　石　器　実　測　図



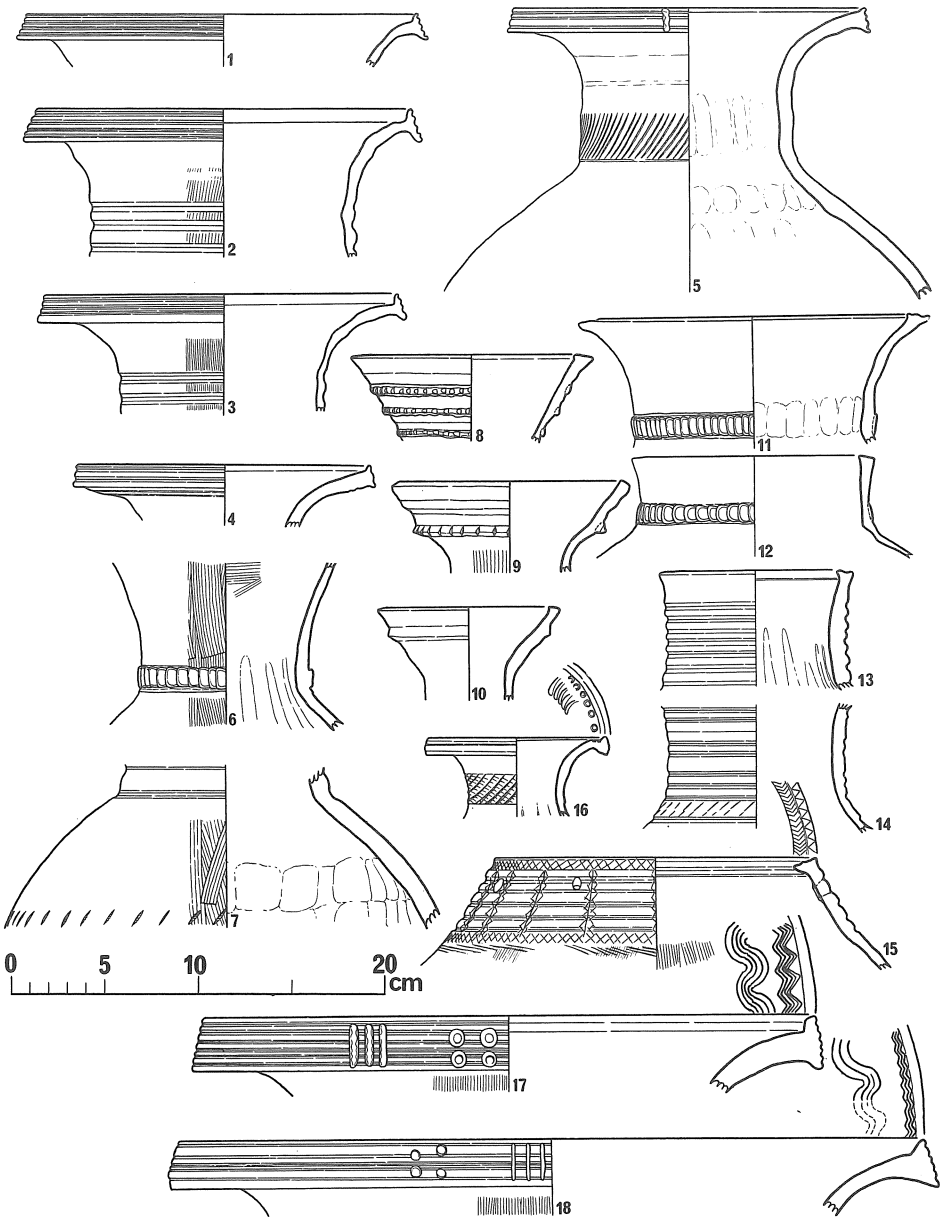
第5図 石 器 実 測 図



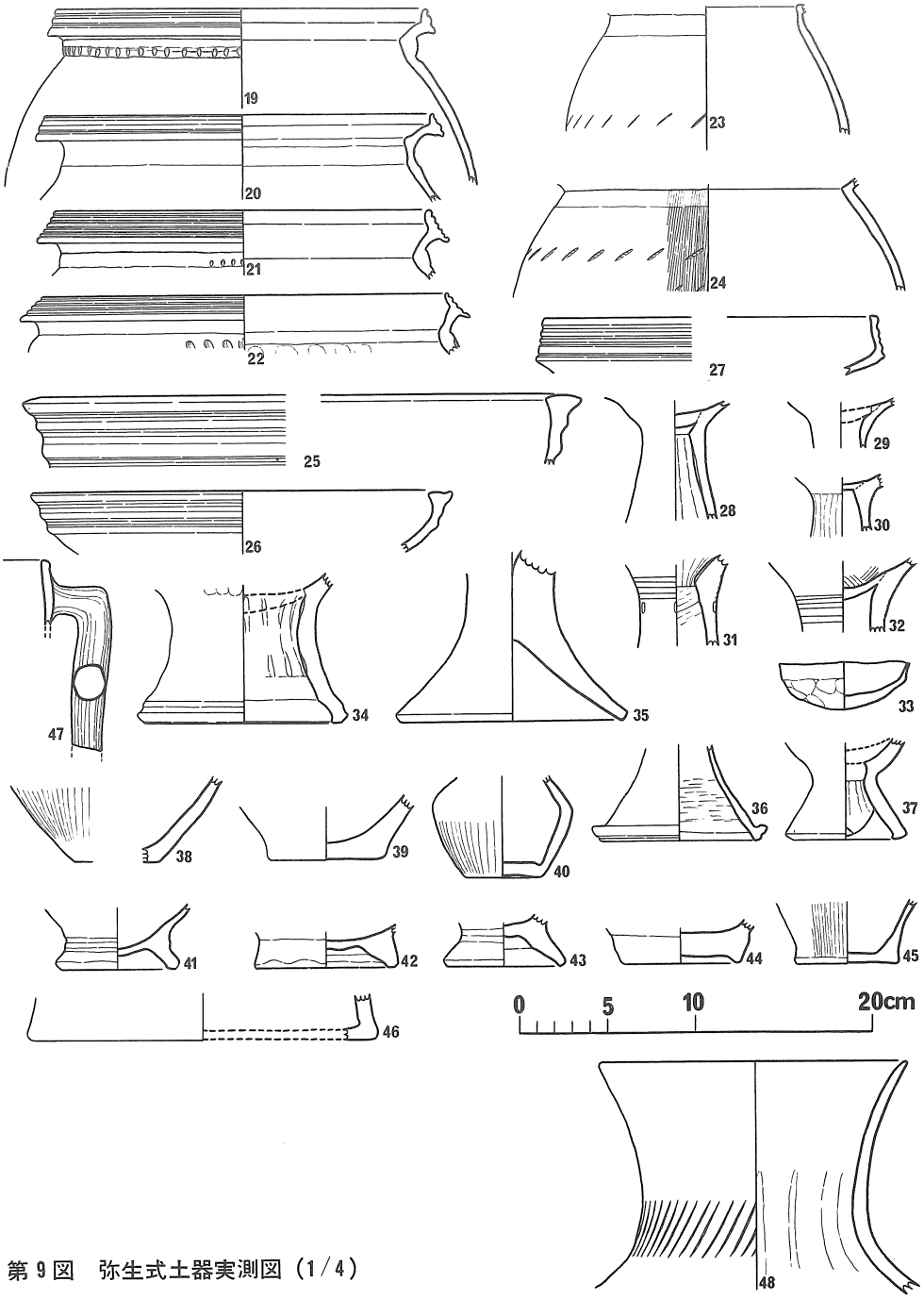
第 6 図　打製石庖丁の磨滅痕



第 7 図　凹石実測図



第８図　弥生式土器実測図（1/4 ）



第９図　弥生式土器実測図（1/4）

昭和48年3月31日　発行

編　集　　高松市教育委員会

発　行　　高松市教育委員会

　　高松市文化財保護協会